

みれん

シュニッツレル Arthur Schnitzler

森鷗外訳

青空文庫

一

黄昏時たそがれどきがもう近くなった。マリイはろは台に腰を掛けてから彼かれ此これ半時はんときばかりになる。最初の内は本を読んでいたが、しまいにはフェリックスの来るはずの方角に向いて、並木の外れを見ていたのである。それが今立ち上がった。こんなに長く待たせられた事はない、陽気が少し冷たくなった。そのくせ空気にはまだなんとなく五月の末の和かみがある。

アウガルテンの公園には、もうたんと人がいない。散歩をしている群むれは、今少して締められるはずの門の方へ足を向けている。マリイが出口の近所まで来た時、やつとフェリックスが見えた。約束の時間より後れたくせに男はゆっくり歩いている。女と目と目を見合せてから、少しばかり足を早めたばかりである。女は立ち留まって、男の来るのを待っていた。女の不性気に差し伸べた手を男は微笑ほほえみながら握った。

「まあ、あなたこんな遅くなるまでお為事しごとをなさらなくてはならないの。」こう云いった女の声は穏かな不平の調子であつた。男は女の手先を右の肘ひじに掛けさせて歩き出したが別に返事はしなかった。

女が「どうなすつたの」と問い返した時、男はやつと返事をした。「そうだよ。それに己は忘れて時計を見ないでいた。」

女は横から男の顔を覗き込んだ。どうもいつもより顔の色が蒼いようである。そう思ったので、女は優しい声をして云った。

「どうでしょう。あなたも少しわたくしに構って下さるようになります方が好くはないでしょうか。お為事なんぞは、少しの間廃しておしまいになってね。御一しよに散歩でもしようじゃございませんか。ねえ。内から御一しよに出る事にして。」

「そうさなあ。」

「わたくしこれからあなたを手放さないようにしようかと思ひますの。」

男はびつくりした様子で、急に女の顔を見た。

「どうなすつたの」と女は問うた。

「なんでもないよ。」

二人は公園の出口に來た。日の暮方の町の賑いが、晴れやかに二人の周囲を取り巻いた。市中一般に、春の齎した喜びが拡つていて、それが無意識に人々に感ぜられると見える。

「今から一しよに行くのと丁度^よ好^{ところ}い処があるが、知っているか。」

「どこでしょう。」

「ブラアテルへ行くのだよ。」

「わたくし厭^{いや}。こないだもあんなに寒かったじゃありませんか。」

「でもこうして町を歩いていると、蒸暑^いといっても好^い位だ。行^すって直ぐ帰^すったって好^い。一しよに行こうじゃないか。」男は何か外の事を考えている様子で、切れ切れにこう云った。

「変な物の言いようをなさるのね。」

「変なつて、どう変なのだい。」

「何を考えているの。あなたと並んで歩いているのはわたくしよ。」

男は氣^め抜けのしたような目^め附^つきで女をじつと見た。

「どうしたの」と、女は心配そうに云つて男の肘をしっかりと握った。

「うんうん。蒸暑^いなあ。本当だ。己は外の事なんぞを考えてはいないよ。もし少し位外の事を考えたつて、おこるのじゃないよ。」男は氣の散るのを強いて直そうとする様子でこう云った。

二人は横町を抜けてプラアテルの方へ歩いている。どうもフェリックスはいつもより詞^{ことば}少なである。もう方々に明りが点^つき始めた。

二

女は突然問うた。「あなたきようアルフレットさんのどこへいらっしゃったの。」

「なぜ。」

「だって行くといっていたじゃありませんか。」

「そうだっけな。」

「ゆうべなんだか力^{ちから}抜けがしたようだから行って見て貰^{もら}おうか知らと云^いったでしょう。」

「それはそう云ったよ。」

「それなのにおいでなさらなかったの。」

「いいや。行かなかった。」

「あの、きのうは工合が悪いと云っていたのでしよう。それなのにきようプラアテルのよ^{とこ}うな湿^{しづ}っぽい処^{ところ}へ行くのはあんまり不養生じゃなくて。」

「なに構うもんか。」

「そんな事を言っちゃあ厭いや。それではまるで体を悪くしておしまいなさるわ。」

男は泣き出しそうな声で返事をした。「そんな事を言わないで、一しよに行くのだよ。

どうも己おれはプラアテルが見たいのだから。こないだ一しよに行つて愉快に思つた処へ、もう一遍行つて見たいのだ。それあの四阿屋あずまやだな。あそこなら冷たくはないよ。」

「ええええ。」

「なに冷たいものか。きようは一体に暖かいのだ。内へ歸るにはまだ早過ぎる。それだといつて、町で晩飯を食うのは厭だ。己はきようは町の料理屋の窮屈な部屋すわに坐りたくないのだ。煙の中にいるのは己には毒だ。それに人の大勢いる処も厭だ。やかましい人の声を聞くのがつらい。」最初は口早に、いつもより声高こわだかに言つていたのが、段々末の方になると声が幽かすかになつてしまった。

マリイは前より堅く男の肘を握つた。なんだか心細くなつたのである。それに今物を言つたら、涙声になりそうなので黙つてゐる。

プラアテルの静かな四阿屋で、緑の木立の中の春の夜よを味いたいという男の憧憬あこがれが女にも伝わつた。そして暫しばらく一しよに黙つて歩いている内に、男の唇の上に、寛ゆるやかな、鈍い

微笑^{ほほえ}みの浮かんだのを、女が見附^{みつ}けた。男は女の方へ顔を向けて、そのとたんに偶然出た微笑を、楽しさの微笑みにして見せようとした。しかし男の性質を底まで知り抜いている女には、その微笑みのわざとらしいのが、容易^{たやす}く悟られた。

二人はプラアテルに着いた。本通りから曲つて初めての並木道は、向うを見ればほとんど真つ暗である。それを通り抜けた処にちよいとした料理屋がある。その周囲^{まわり}の広い庭には、ほとんど明^{あかり}も点^つけて無い。巾^{きん}を覆^{おほ}わない卓^{つくえ}が並べてある。椅子^{いす}がそれに寄せ掛けてある。その傍^{そば}に、緑色に塗った、ひよろ長い柱の上に、円い硝子^{がらす}の明りが点^{とも}してある。濁つた紅の焰^{ほのお}がちらちらとして動いている。客が二三人坐っている。その中にこの料理屋の亭主^{まじ}も交^{まじ}っている。

マリイとフェリックスがその前を通る時、亭主は立つて、烏打帽を脱いで礼をした。二人は四阿屋の戸を開けた。中には活栓^{コック}で細めた瓦斯^{がす}の火が明るくなったり暗くなったりしている。片隅の方に給仕の少年が坐つて居眠りをしていたが、慌ただしく立つて、火を明るくして、客の外^{がい}套^{とう}を脱ぐ手伝いをした。

二人は部屋の隅の薄暗い、静かな処に場所を取つて、二つの椅子を近く寄せて腰を掛けた。それから余り選^えり嫌いをせずに、飲物と食物^{くいもの}とを註^{ちゅうもん}文した。

給仕の行つてしまつた跡は、二人きりになった。ただ入口の方から濁つた赤色の火が見えているばかりである。部屋の隅は薄暗くなつてゐる。

三

二人はまだ強情に黙つていた。とうとうマリイが堪え兼ね、顫ふる声いごえをして言い出した。
「あなたどうしたのだから、そう云いつて下さいよ。」

男の唇の上にはまたさっきの微笑ほほえみが現われた。「なんでもないよ。そんな事を聞くものじゃない。己おれの機嫌きげん買かいな事は、お前知つてゐるはずじゃないか。それともまだ知らないのかい。」

「それは知つていますわ。でも、今のあなたの様子は、いつも機嫌を悪くした時とは違ちがうわ。何か別に厭いやな事があるのだわ。何かわけが無くてはならないと思うの。それをなんだか云つて下さいよ。お願いだから。」

男はじれつたような顔をした。丁度そこへ給仕が註ちゅうもん文ぶんしたものを持つて来た。男はそれを好いい事にして、女が「仰おつしやいよ、仰おつしやいよ」と云つても、給仕の方を目で見

じれったそうな身振をするばかりである。給仕は出て行つた。

「さあ二人きりになりました」と、マリイは云つて、椅子をびったり傍へ寄せて男の両手を取つた。「何かあるのでしょうか。わたくしどうしても聞かずに置くわけには行きませんわ。まさかもうわたくしが厭になつたのじゃないでしょうね。」

男は黙っている。女は男の手に接吻した。男はその手を徐かに引いた。「どうなすつたの。」

男は助けを求めるようにあたりを見廻した。「廃してくれ。そんな事を聞かないでくれ。そんなに人をいじめるものじゃない。」

女は男の手を放して、顔をじつと見た。「わたくしどうしても聞かないで置くわけには行きませんわ。」

男は立ち上がつて、深い息をした。それから両手で頭を押えて云つた。「ほんとにお前は己を氣違ひにしてしまう。もう問わずに置いてくれ。」こう云つて、そのまま立つていて、何かじつと見詰めている。女は心配そうに男の見ている方角を見たが、男は空を見ているのである。

男は腰を掛けた。息使いが前より静かになつて、顔には疲れたような優しみが拡がった。

それから数秒時間立つと、今まで自分を襲っていた恐怖が全く消えてしまった様子で、小聲に優しく、「飲まないか、食べる物も来ているぜ」と、女に言った。

女は男の云うなりに、ナイフとフォークとを手に持ったが、心配気に「あなたは」と云った。

「己も遣^やるよ」とは云ったが、男はやはり動かずにいて、飲物にも、食物^{くいもの}にも手を触れない。

「それではわたくしも食べられないわ」と、女が云った。

四

男はようようの事で飲み食いを始めた。しかし一口食ったかと思うと、黙ってナイフもフォークも置いてしまつて、手で額を支えて、女の方を見ないでいる。女は上唇^{うわくちびる}と下唇^{したくちびる}とを堅く結んで、暫く男の様子を見ていたが、その額を押さえている手を引き退^{のぞ}けて、隠していた顔を覗^{のぞ}き込んだ。

男の目には涙が一ぱいになっている。女がそれを見て、「あら、フェリックスさん」と

声を立てるや否や、男は泣き出した。さも思い迫ったような^{すすりなき}歔歔をするのである。女は男の頭を自分の胸のところへ引き寄せて、髪の上を撫でて、額に接吻して遣った。それから涙を口で吸い取って遣ろうとした。続いて「フェリックスさん」と呼んで見た。男は次第に泣き止んだ。^や「どうしたのか仰やいよ。」

男は女の胸に顔を埋めて^{うず}いる。そして鈍い、重くろしい声で、切れ切れに云った。「己はどうしても言わずに置こうと思ったのだ。マリイ。聞いてくれ。もう跡たった一年だそうだ。それでおしまいだというのだ。」言い畢つて男はまた声を立てて劇しく泣き出した。女は死人のような^{しにん}顔色になつて、口を開いたままで聞いている。男の言う事が分らない。分らせたくない。冷やかな、恐しいある物が吭を締め付けているようである。

それから突然女が「フェリックスさん」と叫んで、男の前に身を倒して、その時力無く俯向いた男の泣顔を見た。男は女が自分の前に跪いたのを見て、「お立ちよ」と囁いた。女は器械的に、言うなりに立ち上がつて、向いに腰を掛けた。もうなんにも問う事も言う事も出来ない。

およそ二三秒時間二人とも黙っていたが男が突然空を睨んで、何か不思議な重い物が自分を押付けるように感じたと見えて、声高く「ああ、溜らん、溜らん」と云った。

女はやつと声が出て、「行きましようね」と云つたが、それより上の事は言われなかつた。

「うん行こう」と、男は何か体から振落すような身振をして云つた。それから給仕を呼んで勘定をして、二人は足早に四阿屋あずまやを出た。

外では春の夜の沈黙が二人を包んだ。暗い並木を通る時マリイは立ち留まつて、男の手を握つて云つた。「わけを話して下さいな。」

男はすっかり落ち着いた。そして今女に言うことは簡単で、さっぱりしていて、ほとんど何も變つた事ではないらしく聞えた。男は女に取られていた手を引き放して、女の頬ほおをさすつた。そこは真つ暗で互に顔が好く見えな位である。

「ミツチエルや。びつくりしてはいけないよ。なにしろ一年というものは随分長いものだからね。実は己はもう一年しか生きていないのだ。」

「あなたそれは氣が變になつてそんな事を仰しやるのでしょうか。」女の声は叫ぶようであつた。

「一体己がこんな事をお前にいうのは吝けちなのだ。馬鹿ばかだと云つても好いかも知れない。しかし考えて見てくれ。そういう事を自分一人だけが知つていて、絶えずその事を思いなが

ら、心寂しく歩き廻まわっているという事は、事に依よつたら己にはどうせ久しくは出来なかったのかも知れない。事に依よつたらまたお前の方でも己というものが一年先にはいないのだという考えに段々慣れてくれる事が出来るかも知れない。兎とに角かくこうしてぼんやり立たつていたつて為しかた方がない。一しよに行こうじやないか。己の方ではもうその考えに馴な染じんでしまっている。アルフレットのいう事なんぞはもう疾とうから己は当あてにしていけないのだ。」

「それではあなた、アルフレットさんの処ところへはおいでなさらなかったのですね。あの方でなくてはほんとの事は分かりやしませんわ。」

「実はこの二三週間というものは、どうも己の病気の事が不ふた確しかなので、己は気になって溜溜まらなかったのだ。それが今は大ぶ好よくなった。兎とに角実際の事が分かったのだからなあ。己は大学のベルナルドさんの処へ行いつたのだ。為しあ合せにあの人は本当の事を言いつてくれた。」

「なんだか知れるものですか。その方の言いつたのが嘘うそかも知れないわ。あなたが御用心をなさるようにおどかしたのかも知れないわ。」

五

「いや、いや。お前は知らないが、己は極く真面目な話をしたのだ。己はどうしても本当の事を言つて貰わなくてはならないといつて、ベルナルドさんに迫つたのだ。お前の身の上も、この病氣次第でどうかして置かなくてはならないのだからな。」

「フェリックスさん」と叫んで、女は両手で男に抱き付いた。

「そんな事は余計な事だわ。あなたが死んでしまえば、わたくし一日も生きてはいけませんわ。一時間も生きてはいませんわ。」

「さあ行こう。余計な心配をしないでな」と、男が小声で云つた。

二人はプラアテルの出口の所に來た。歩いてゐる周囲が賑かになつた。明りも点いていて物音もする。町を走る車輪の音、電車の鈴や笛の音、頭の上を走る重い汽車のはためく音などがする。女はぎっくりした。この身の周囲の生活が、突然自分を嘲笑つて、敵意を表しているように感ぜられて、切なかつたのである。女は男の手を引っ張つて、大通りを除けて静かな横町から内へ歸り掛けた。

女は馬車を雇う事を男に勧めようかと一寸考えたが、それを口に出す事を躊躇した。ゆっくり歩けば好いと思つたからである。

女は男の肩に頭をぴったり寄せ掛けて、中^{ちゅうおん}音で云った。「^{うそ}嘘だわ。あなたが死んでしまうもんですか。もしあなたが生きていなけりやあ、わたくしも生きてはいないわ。」

「まあ、そう云わないものだ。もう少しすると、お前の考えだつて變つて来る。己はもう何もかも好く考^よえて置いたのだ。実に妙なものだよ。もうこれまでで、これから先は駄目だとはつきりと限界を立てて見せられたのだからなあ。」

「そんな界^{さかい}なんぞがあるものですか。」

「それがあるから妙なのだよ。ほとんど想像の出来ないような事ではないか。己だつて今こう云っている一刹^{せつな}那にはどうも嘘のように思われてならない。実に不思議なわけじゃないか。こうしてお前の傍^{そば}を歩いていて、大きな声をしてお前に何か饒舌^{しゃべ}っているくせに、一年先になると冷たくなつて、事に依^よつたら腐つてしまつているというのだからな。」

「お廢^よしなさいよ。お廢しなさいよ。」

「その時お前はやはりこのままでいるのだ。このままそっくりしているか、それとも己が死んだ跡で少しは泣くだろうから顔が今よりは少し蒼^{あお}くなつて位なものだろう。それからまた夜^{よる}が来る昼が来る夏になる秋になる冬になる。それから春が来る。そうすれば己の一週忌だ。おや。どうしたのだい。」

女はしくしく泣いている。涙が頬から頰筋へ伝わっている。

男の顔には絶望の微笑みが現れた。そして息を齒の間から出すような囁き声で、「堪忍しろ」と云った。声は咳枯れて惨酷に聞えた。

女は歩きながら、歎きをしてゐる。男は黙っている。丁度市の公園の前を通っている。暗い、静かな、広い町の上へ、公園の木立の中から、接骨木の花の香が、軽く悲しげに吹いて来る。二人は徐かに歩いている。公園の反対の側には単調な灰色や黄色に見える高い家が並んでいる。夜の青空に聳えている、カルススキルエの大屋根が、次第に近くなつて来る。二人はまた横町へ曲つて、間もなく自分達の住んでいる家に着いた。

薄暗い明りの点いている梯子段を、二人は徐かに登つて行く。誰かの家の窓や戸の奥で、女中達の話して笑っている声がする。

二三分立つと、二人は我が家に這入つて戸口の戸を締めた。窓の戸は開けてある。寝台の傍に据えてある小卓の上には、常の花瓶に赤い薔薇の花が活けてある。その匂が部屋に満ちている。窓の外には幽に物音がしている。二人は窓から外を覗いて見た。向いの家は明りも点いていない。総てひっそりしている。男は長椅子に腰を掛けた。女は窓の鎧戸を締めて窓掛を引いた。それから蠟燭に明りを点けて卓の上に置いた。男は女のし

ている事を見ずに考え込んで坐^{すわ}っている。女は傍^{そば}に寄って、「フェリックスさん」と呼んだ。男は仰向いて微笑みながら、「なんだい」と云った。

六

その男の声が優しく静かに響いた時、女は言うに言われない、切ない感じに襲われた。どうしてもこの男を死なせるわけには行かない。そんな事があつてなるものか。それは諛^{うそ}に違いない。そんな事のありようがない。そう思う心を男に話して聞かせようと思つて、男の前に蹲^{しゃが}んで、下から見上げたが、声が出なかった。そこで頭を男の膝^{ひざ}に載せて泣いた。男は両手で女の髪を摩^{さす}つて、「泣くのじゃないよ」と優しく囁^{ささや}いた。それでも泣くので、「もう廃^よせよ」と言い足した。

女は頭を上げた。そしてなぜと云うわけもなく不思議な希望が萌^{きざ}して来た。「嘘^{うそ}でしよう。ねえあなた。」男は女に長い熱した接吻^{せつぶん}をした。そしてほとんどすぎないように、「本当だよ」と言い放つて立ち上がった。

男は窓の処^{ところ}に行つて、その蔭^{かげ}になつてゐる処に立っている。蠟燭^{ろうそく}の光は男の足の所

にちら付いているだけである。暫くして男が言い出した。「どうも為方しかたがないからお前がそういう考えに慣れてくれるより外はないよ。死ぬるといえば変なようだが、一年立てば別れるのだと思えば、それまでの事ではないか。己が傍そばにいらなくなつたと思うだけで、この世にいらなくなつたのだという事を知らずにいても好いのだ。」女はその詞ことばを聞かない様子で、顔をびったり長椅子ながいすに押し付けている。男は詞を続けた。「なに哲学上に考えて見れば、そんなに恐ろしい事ではない。まだこれから楽しむ時が大ぶあるのだ。そうじゃないか。」

女は涙のない、大きい目をして突然男を見た。そして駈かけて来て両手で抱き付いて、胸と胸とを押し付けた。そして囁いた。「わたくし一所しよに死にますわ。」

男は微笑ほほえんだ。「なんだ。そんな子供らしい事を言わないものだ。己はお前が思うほど吝けちな性根の男ではない。それにお前に己の運命を分たせる権利は、己は持つてはいないのだ。」

「でもあなたが居なくなつては、わたくし生きていられないのですもの。」

「考えて見ろ。己というものの世の中にいる事を知らずに、お前は長く生きていたのだ。それからお前とこんな中になつてからもう一年になるが、そのお前と知り合になつた時、

己はもう今の病氣を持っていたのだそう。ただ己がそれを知らずにいただけの事だ。知らずにはいたがなんだかそんな事があるのではないかと己にはほんやり知れていた。」

「いいえ。あなた今だつてそんな事が本当に分かっているのではないわ。」

「いや。ところが己にはそれが分かった。分かったからきようお前に打明けるのだ。お前の考え次第できようから己と別れてくれてもいいのだ。」

女はいよいよ緊きびしく抱き付いた。男が、「どうだ、己のいう通りにしないか」と云つても、女は返事をせずに、顔を見上げている。相手のいう事が分からない様子である。

「お前は綺麗きれいだなあ。そして底の底まで健康なようだ。お前のような人間は人生に対して十分の権利を持つているのだ。どうぞ己に構わないで、別れてしまつてくれい。」

「いいえ。わたくしはあなたと一しよに生きたのですから、あなたと一しよに死ななくては」と、叫ぶように女は云つた。

男は女の額に接吻した。「そんな事をさせるものか。己が決して承知しない。どうぞそんな考えを綺麗あたまに頭のから除けてくれい。」

「どうぞそう仰おつしやらないで。わたくしは誓います。」

「待つた。そんな事をするものじゃない。そんな事をするのちと後になつてから、あの時の誓

いを取消してくれと、己に頼むようになるからな。」

「わたくしをそんな女だと思つていらつしやるの。」

「なに。お前を疑つていのではない。お前の己を愛していてくれる事は、己も好く知つてゐる、お前はあたりまえで己を見棄てるような事はない。しかし。」

「いいえ。どんな事があつてもわたくし別れるのは厭。」

男は首を振つてゐる。女は身を寄せ掛て、男の両手を取つて、それに接吻した。

「ほんとにお前は可哀い奴だなあ。それを思うと、己は悲しくてならない。」

七

「いいえ。悲しくなんぞお思いなすつては厭。たとえ二人の身の上にはどんな事があつても、二人は別れずに、お互の運命を分つのだと云つて下さい。」

男は真面目にきつぱりと云つた。「いや。そんな事は廃せ。己はこれでも並の人間とは違ふ積りだ。並の人間にするような事はしたくない。己には何もかも分かっている。今お前が始めて受けた苦痛に促されてそう云つてくれるのを、己が好い事にして同意して、そ

の詞ことばに酔わされてしまつては、己けは吝けちな野郎になつてしまふ。どうしても己は行つてしまわなくてはならない人間だ。そしてお前は跡に残るのだ。」

女はまた泣き出した。男は女の髪を撫なでて女に接吻せつぶんして宥なだめようとしている。二人とも窓の処ところに立つたままで、暫しばらくはなんにも言わない。こうして何分か立つた。蠟燭ろうそくは段々燃え下がつて行く。

暫くして男は女の体を放して、長椅子ながいすの処へ行つて腰を掛けた。なんとも言いようのない疲労に襲われたのである。女は跡から付いて行つて傍そばへ腰を掛けた。そして男の頭あたまを引き寄せて、自分の肩へ寄り掛からせた。男は優しく女と顔を見合つて、目を閉じたが、直すぐに寐入ねいつた。

淡ひやく冷やに暁あかつきが這はい寄つて来た。フェリックスが目覺して見ると、自分の頭は女の胸に寄せ掛けてあつた。そして女はぐつすり寐ていた。男はそつと起きて窓の処へ出て町を見下ろした。明方の灰色な空氣みなぎが漲みなぎつてまだ人影はない。体がぞくぞくした。数分間すると、男はそのまま寢台ねだいの処へ行つて、その上に倒れて天井を見詰めていた。

男が二度目に目の覺めた時には、もう室内がすっかり明るくなつていた。マリイは寢台の縁ふちに腰を掛けている。接吻して自分を覺してくれたのである。二人は微笑ほほえみ交した。ゆ

うべの事は皆悪い夢ではなかっただろうか。男も自分の体がすっかり健康で何事もないように思われる。外には日が照っている。町からは賑かな物音がする、何もかも活動している。向いの家には窓の戸が処々開けてある。部屋の上には、いつもの朝と同じように朝食の支度がしてある。部屋は明るい。隅々まで日がさしている。細かい塵が日光の中で踊っている。総て希望の影が満ちている。

医学士が昼食後の葉巻を喫んでいるところへ、女の客が来た。まだ患者を見るはずの時間にはなっていないので、学士は少し不愉快に思った。そこへ客は這入って来た。

「マリイさんじゃないか」と、学士は驚いて呼び掛けた。

「こんなに早く参ったのですけれど、おおこりなすつては厭よ。御烟草はどうぞそのまま上がつていて下さいまし。」

「それじゃあ御免蒙つて喫むよ。しかしなんの用ですか。どうかしたのですか。」

女は片手に日傘を持ったままで、片手を卓の上に突いて、学士の前に立っている。「本当でしょうか。フェリックスさんがひどく悪いというのは。おや。あなたお顔の色が変りましたわ。そんなら今までわたくしに隠していらつしやったのね。なぜ言つて下さらなか

つたの。」語氣頗る急である。

「あなたは何をいうのです。」こう言い掛けて学士は立ち上がって、部屋の中をあちこち歩き出した。「あなたはどうかしているのだ。まあ、そこへお掛けなさい。」

「あなたわたくしの申した事に御返事をして下さいまし。」

「それはあの男は病身ですとも。それはあなたにだって疾うから分っているでしょう。」

「いいえ。その事ではありません。助からないそうじゃありませんか。」女の声は叫ぶようである。

「なんですと。そんな事を。」

「いいえ。わたくしは知っています。フェリックスさんも知っています。きのう大学のベルナルドさんの所へ参つてすっかり聞いて来ましたのだそうです。」

「大学の教授だって随分見損う事があるものですよ。」

「だってあなたフェリックスさんを何遍も診察なさったのでしよう。どうぞわたくしに本当のところを言つて下さいまし。」

「一体そういう問題にはたしかに本当だという判断は下せないものなのですよ。」

「それはあなたが御自分のお友達ともだちの事だからと仰おつしやるのでしよう。ね、だから言われな

いと仰やるでしょう。仰やなくなつたつて、あなたのお顔に出ているわ。あ、本当だ、本当だ。まあ、わたくしどうしよう。」

「困りますな。まあ、気を落ち着けて下さい。」

八

女は鋭く学士の顔を見た。「本当ですね。」

「さあ。あの男は病氣ですよ。それはあなただつて知っていました。」

「それが直らない病氣なのでしょう。」

「一体なんだつてそんな事をあの男に言つたのか知らん。それに。」

「ねえ、あなたどうぞ望みがないのなら、わたくしをいたわつて無駄な望みを起させないようにして下さいまし。」

「しかしそんな事は確^{しか}と予言の出来るはずのものではないのです。随分長く生命が保てる事もあるのですから。」

「ええ、ええ、それが一年なのでしょう。」

学士は唇を嚙んだ。「なんだって外の医者 of 所なんぞへ行つたのでしょうか。」

「それは知れていますわ。あなたが本当の事を言ってお聞かせなさらないからです。」

「下らない。実に下らない。馬鹿な事を言つたものだ。言つて聞かせてなんになるというのだろう。」医学士アルフレットは不平に堪えない様子である。

この時戸が開いてフェリックスが這入つて来た。そしてマリイを見て云つた。

「大方こんな事だろうと思つた。」

「おい。君は馬鹿な事を遣つたね。実に馬鹿げている。」学士はこう呼び掛けた。

「君、いろんな言草は廃してくれ給え。君が友人として僕をいたわつてくれた段は実に感謝する。それが好意というものだろう。」

女が詞を挟んだ。「あの大学の先生の仰やつたのは。」

「廃せよ。これまではアルフレット君だつて、お前だつて、己を騙して安心させて置いても好かつたのかも知れない。しかし今から先そんな事をすれば、それは下手な喜劇というものだ。」

学士は云つた。「君は無経験なのだ。僕が言つて聞せるがね、このウィインの町を歩き廻っている人間の中には、もう二十年も前に死の宣告を受けた事のあるものが何人あるか

知れないのだ。」

「しかしその宣告を受けて、宣告通りに死んだものの方が無論多いのだろう。」

学士は室内をあちこち歩いている。「第一こういう事を考えてくれ給え。きのうときようと、君の体になんの変った事もないのだぜ。そこできょうから君が前より養生をして、今までより僕の言う事を好く聞いてくれれば、それだけはたしかに得だ。丁度八日^{ようか}前の事だが、僕のところへ五十になる男が遣つて来た。」

「待ち給え。分かっているよ。その五十になった男が二十の時に不治の病だといわれて、今でも元気が好くて、子供が八人とも達者でいるというような事を君は話すのだろう。」

「まあ、そんな事だがそれが事実なのだ。実際そういう人がある。」

「しかしね、世間に奇蹟^{きせき}というものがあるとしても、それが僕の体にあるとは僕は思わないのだ。」

「奇蹟だと。大違いだ。僕の話すのは自然の事実だ。」

女がまた詞を挟んだ。「あの、ちよいとフェリックスさんの顔を御覧なすつて下さい。どうもわたくしには昨年の冬よりは御様子が好いように見えるのですが。」

学士はフェリックスの前に立ち留まった。「まあ。養生をしなくてはいけないのだ。こ

れから二人でどこか山奥の方へ行つてすっかりなま懶けるのだね。」

女は学士の詞を歓迎するように答えた。「いつから行つたら好よいでしょう。」

フェリックスは遮った。「下らない。」

「それから秋になると南の方へ旅行するが好いい」と学士が云った。

「それから春になるとどうしろというのだ」と、フェリックスは嘲あざけるように云った。

「春になるとあなた直つていらつしやるかも知れないわ」と、女が声に力を入れて云った。

フェリックスは笑った。「直る。そうさな。兎とに角かく苦痛が無くなっているのだろう。」

学士は憤慨した調子で云った。「僕はいつでも考えているのだが、内科の大先生なんというものは、どれもこれも心理学というものを知らないのだ。」

「そうさ。人間という者は真理には耐えないと云う事を先生方は知らないのさ。」

九

「ところがそんな真理だのなんのというものはないのだ。僕の考えでは、先生君をおどかして、君に摂生をさせようと思つたのだろう。どうもその位な事に違いない。そこで君が

しつかり摂生をして、直ってしまったところで、何も向うの耻はじにはならない。ただ君に警戒を加えたと云え、ば済むのだ。」

「もうそんな幼稚な言草いいぐさは廃めや給えたま。僕は教授と極く真面目まじめに話した。どうしても正確なところを聞かなくてはならない理由があるのだという事を、向うに呑み込のませたのだ。詰まり親戚しんせきの処分だねえ。そういう理由は大抵向うが有力だと感じてくれるからね。一体もう疾とうから僕は不確ふたしかな診断に悩まされて、我慢がし切れなくなっていたからね。」
 学士は憤然とした。「それが違うのだ。今だつて君がなんのたしかな事を知っているものかい。」

「いや。今はたしかなところを知っているよ。幾ら君がごまかそうとしたつて駄目だ。僕は考えているが、こうなつては僕の最後の一年をなるべく有利に過す方法を講ずるより外はない。今に君に見せて遣るや。僕はこう見えても、笑いを含んでこの世に暇いとま乞こいをして見せるよ。おい、ミイツ。泣くな。己おれがいなくなった跡で、まだこの世界がどの位面白いおもしろいか、お前はそれを夢にも知らないのだ。アルフレット君、君はどう思う。」

「廃よし給え。そんな事を云つてマリイさんを切ながらせて、それがなんになるのだ。」
 「なるほど。それはそうかも知れない。結末を付ける事は、早く結末を付けるに限る。お

い、ミイツ。お前は直ぐ己と別れて、己を一人で死なしてくれ。」

女は突然学士に向って叫んだ。「あの、どうぞわたくしに毒を調合して下さいまし。」
学士は声を励まして云った。「いやはや、それでは二人共気が違っているというものだ

。

「いいえ。毒を下さいまし。わたくしはフェリックスさんが死んだ跡で、一秒時間だつて生きていようとは思いません。わたくしのこの心持をフェリックスさんに見せて遣りたいのです。なんだつてこれが分からないのでしょうか。ええ、口惜しい。」

「おい。ミイツ。そんなら今お前に言つて聞かせる事がある。今云つたようなむちやな事をもう一遍云つて見るが好い。己はお前の目に掛からない処へ隠れてしまつて、生涯お前に逢わない事にする。お前の運命を己の体に結び付けてしまふという権利は己には無いからな。また己はそんな責任を負いたくもなんともないからな。」

学士がこう言い出した。「フェリックス君。どうもそういう工合では僕は君に直ぐに旅行をして貰わなくてはならない。あすよりはきよう立つが好い。そんな風になつては、君方は何をし出すか分からないから、どうも傍で構わずに見ているわけには行かない。僕が今晚にも君方を停車場まで送つて行こう。先ずこの土地を離れて、清い空気を呼吸して、

気を落ち着けたら、君方も普通な考えに戻って来るだろう。」

「それは僕はどうでも好いよ。どこでこうしていたって、全く同じ事だからねえ。詰まり
。」
「フェリックスはこう言い掛けた。

学士はそれを遮るようにして云った。「待ち給え。差当り何も君が絶望するような状況
はちつともありはしない。だから余計な、悲しげな話は暫く度外に置いて貰いたいものだ
ね。」

マリイは涙を拭いて、難有ありがたそうに学士の顔を見た。

フェリックスは微笑ほほえみながら云った。「君は豪えらいよ。大した心理学者だ。なんでも医者
は患者を荒わづつぽく扱あつかうと、その患者が丈夫なような気になるものと見える。」

「兎とに角かく僕は君の医者というよりも、君の友人だという訳だからね。」

「好いよ。そんなら旅行する。あすどこか山の方へ立とう。」

「無論そうしなくてはいけない。」

「兎に角君には感謝するよ。そこでもうこつちとらは行こうじやないか。あの戸の外で咳せ
払きはいするのは患者だろう。ミイツ。行こう行こう。」こう云ってフェリックスは学士
と握手した。

マリイは暇乞いをして、学士に言った。「どうも難有うございました。」

「なに。僕にお礼なんぞを言うに及ぶものですか。あなたも気をしっかり持って、フェリックス君に気を付けて遣らなくてはいけないのです。そんならいずれました。」

十

二人は梯子段^{はしごだん}を降り掛かった。途中でフェリックスが突然^い云った。「実に親切な男だなあ。どうだい。」

「ええ、ええ。」

「それにあんなに体が好^よくて若いのだから、これからまだ四十年位生きられるのだろう。それとも百までも生きるかしら。」

二人は往来へ出た。その周囲^{まわり}には歩いたり、饒舌^{しゃべ}ったり、笑ったりして生きていて、死ぬる事なんぞは考えない人がうようよしていた。

二人は湖水にびったり食つ付いている小家^{こいえ}を借りた。本当の村とは離れて、一列の家が

水に沿うて立てられていて、それがしまいには離れ離れになっている、その一番端の一軒である。家の背後は傾斜地になつていて、そこから牧場が高い処まで続いている。そのまた上には畑に夏の作物の花が咲いている。そのまた奥の方には、めつたに好くは見えないが、微に遠山のぼんやりした輪廓が現われている。家の前には階段がある。その階段を支えている四五本の褐色をしている、濡つた木の柱は、澄んだ水底に立ててある。そこへ出て見ると向いの岸にごつごつした岩が鎖のように長く続いているのが見える。その上の方には沈黙した大空の冷やかな輝きがある。

ここへ来てから数日間二人は意外な落ち着きを感じた。自分でもどうしてこんなに気が鎮まつたかと不思議に思う位であつた。なんだか運命の威力というものも常に住つてゐる処でなくては、人の心の上に抑圧を逞ゆうする事が出来ないのではないかとさえ思われた。いつもの住いで自分達を強く押し付けていたような運命が、ここへ移り住んでからは、どうした事か、少しも力を逞ゆうしなくなつた。そればかりではない。二人は知り合になつてから此方、今のような心を新たにしような寂しさを味わつた事はなかつた。折々二人は顔を見合せて、妙な心持をしている。なんだかちよつとした喧嘩か思違えかをした跡で、その事を避けて口に出さずにいるような心持なのである。天氣の好い夏日和に、男

は余り気分が好いので、またそろそろ為事しごとを始めようかとさえ云った。女はそれに同意しなかった。

「だってあなた、本当に心しんから健康におなりなすつたのではないのですからね」と、微笑ほほえみながら云った。男が持つて来た本や書物かきものの積み上げてある小卓こつくえの上に日影が躍っている。窓からは湖水を渡つて、柔かい、人に媚こひるような空氣が吹き入れる。その空氣は世界のあらゆる不幸をまるで知らないような空氣である。

ある晩の事二人はいつものように、年の寄つた土地のものに舟を漕こがせて湖水へ出た。その舟は好く出来ていて、幅も広く、それに柔かい、弾力のある腰掛こしが取り附つけてある。いつもそれへ女が腰を掛けると、その足下あしもとに男は横になつてゐる。一枚の暖かい、鼠ねずみ色の毛布いろうを持つて来て、それを敷物にも上掛けうわがけにもするのである。そこに横になつて頭ひざを女の膝の上に載せてゐる。広い、静かな水の上に軽い霧が立ち籠こめてゐる。なんだか夕ゆ闇うやみがゆるやかに湖水の底から登つて来て、次第に岸の方へ拡ひろがつて行くように感ぜられる。きようは男が奮発して、久し振に葉巻を喫のんで見た。徐しずかに煙を吹きながら湖水の波や、その向うの岩の頭に薄黄いろい夕日の差しているのを眺めてゐる。

男は言い出した。「おい。ミイツ。お前あの上の方を平気で見る事が出来るかい。」

「どこの方でございますの。」

男は天を指さした。「真^まつ直^すぐにあの上の方を見るのだ。あの藍^{あい}色^{いろ}な処を見るのだ。

己^{おれ}にはそれが、なんだか気味が悪いようで出来ないから、お前に聞くのさ。」

女は上を見た。そして数秒間見詰めていた。「わたくし好い心持ちですわ。」

「そうかなあ。きょうのようにすっかり晴れ切っていると、己にはとても見ていられない。なんという遠い事だろう。身ぶるいがする程遠いのだからな。雲でも上の方にあると少しは気持ちが良いのだ。雲というやつはまだおれ達と心^{こころ}易^{やす}いものなのだからな。雲を見るのはお馴染^{なじみ}のものを見るようなものだ。」

十一

その時舟を漕^こいでいる男が口を出した。「あしたは雨でございましょうね。ひどく山が近く見えますから。」こう云^いつて船頭^{ふなづ}は、^ろの手を停^とめると、舟は音もせず、ゆるやかに波の上を滑^ゆって行く。

フェリックスは咳^{せき}払^{ばら}いをした。「妙だ。どうも葉巻はまだ己^{おれ}には好^よくないようだ。」

「そんなら水の中へ棄てておしまいなさいな。」

フェリックスは火の付いたところが赤く見えている葉巻を、指で摘んで振り廻していたが、とうとうそれを水の中へ投げ入れてしまった。そして顔をマリイの方へ向けずにこう云った。

「どうも己はまだ本当に健康にはなっていないなあ。」

「好い事よ。そんな事を言うのはお廃しなさいよ。」こう遮るように云って女は徐かに男の髪を撫でた。

フェリックスは云った。「これから雨でも降り出したら、何をしようかなあ。そうなたら、己が為事をしたって、文句を言いはしないだろうな。」

「それはいけませんわ。」

女は身を屈めて、男と顔を見合せた。その時男の頬が赤くなっているのに気が付いた。「そんな厭な事をお考えなさらないが好いわ。もうそろそろ帰ろうじやありませんか。寒くなつて来るようですから。」

「なに。寒くなつて来ると。己は寒くはない。」

「それはあなたそんな厚い毛布を着ていらつしやるのですもの。」

「そうだったなあ。お前が夏服一枚でいるのを己はまるで忘れてしまっていた。随分勝手だったなあ。」

フェリックスはこう云つて、船頭の方に向いて、漕ぎ戻せと言いつけた。

を二三百遍ばかりも動かしたかと思うと、もう家が近くなった。その時フェリックスが右の手で左の手の脈を抑えているのに、マリイは気が付いた。「あなたどうかなすったの。」

「ミイツ。どうも己はまだ健康でないよ。」

「なぜ。」

「どうも熱が出たようだ。下らない。」

マリイは心配げに云つた。「きつとあなたの思違えですわ。兎に角直ぐにお医者^{ところ}の処へそう云つて遣^やりましょうね。」

「なんだ。それがさぞ役に立つだろうよ。」

舟が岸に着いて、二人は下り立つた。家へ帰つて見れば、部屋はほとんど真つ暗になっている。それでもまだ日の内の温まり^{あたた}が残っている。女が夕食の支度をする間^{あいだ}、男は腕附^つきの椅子^{いす}に腰を掛けてじつとしている。

男は突然云つた。「それでももうここへ来てから八日立つたなあ。」

卓つくえの上へ、食器を並べていた女は、急いで男の傍そばへ来て背後うしろから両手で肩を押さえた。「何かまた詰まらない事を考え出していらつしやるのね。」

「廃せよ。」男はこう云つてその手を振り落として立ち上がつて、卓そばの傍へ腰を掛けた。

女はそこへ付いて行つた。男は指先で卓の上をとんと叩たたいている。そしてこう云つた。

「実にまるで防禦ぼうぎよのないうところへ敵が突然襲撃して来るようなものだからな。」

「あら、そんな事を。」女はこう云つて自分の椅子を男の傍そばへ寄せて腰を掛けた。

男は目を大きく睜みはつて部屋中をあちこち見廻している。それから何事か腑ふに落ちぬという様子で、腹立たしげに頭を振つて、それから齒の間から空氣を押し出すようなものの言い振いぶりをして、こう云つた。「実に防禦がないのだ。誰たれに救いの求めようもない。事柄は何もそんなに恐れるには及ばない事柄なのだ。ただ防ぐという事が、まるで出来ないのが溜たまらない。」

「あなた、後生ですから、そんなにいららないで下さいよ。それ程の事ではないと、わたくし思いますの。ただ御安心のためですから、わたくしがお医者の方へそう云いに参つても好いでしょう。」

「どうぞ廃してくれ。全体また己が病気の事を言い出したのが悪かったから堪忍してくれ。」

「あら。そんな事を。」

「もう己は決して言わないよ。さあ、注いでくれ。注ぐのだ注ぐのだ。よし。何か外の話をしてないかい。」

「そうでございますね。なんのお話にしましょうか。」

「なんでも好いよ。なんにも話す事がないようなら、何か読んで聞せてくれても好い。直ぐでなくても好いよ。食事が済んでからで好い。食べないか。己も食べるから。食は進む位だ。なかなか旨い。」^{うま}こう云つて食べ始めた。

「それ御覧なさい。」

女はわざとらしい微笑^{ほほえみ}をして云つたのである。二人は飲んだり食ったりし始めた。

十二

それから数日間暖かい雨の日が続いた。二人は夕方になるまで、部屋の中にいたり、階

段の上に出たりして暮した。二人で本を読んでいる時もある。窓から外を見ている時もある。またある時は女が針はりしごと為事をしていると、男は傍そばでそれを見ている。骨牌かるたなんぞをもして見る。男はある日女に将棋の駒こまの行き道を教えたり何かもした。またある時は男が長椅子がいすの上に横になつていると、女はその傍そばへ来て腰を掛けて、本を読んで聞かせる。兎とに角昼かくも夜も徐しずかに過ぎて行く。男は気分が悪くはなかった。天気は悪くても体に異状もなく、その後熱のちも出ないのを、男は喜んでいた。ある午後の事であつた。久し振に長雨が降り止やんで、空が少し明るくなり掛かつて来た。二人は出窓に腰を掛けていた。男がこれまでの話の続きでもなんでもなく、出し抜けにこう云いつた。「一体この世界には死の宣告を受けたものばかりがうようよしているのだなあ。」

女は針為事の手を停とめて、顔を上げた。

男ばかり語り続けた。「それはこう云うわけだ。譬たとえて見れば、誰たれかお前とこの処へ来て云うのだな。あなたは千九百七十年五月一日じつにお亡くなりなさいますよというのだな。お前だつて何も百年生きているわけではないが、そう云われた日には、それから千九百七十年五月一日じつが氣になつて、生涯い厭な思いやいをし通しにするのだ。」

女は黙つて聞いている。

男は今日の光が洩れ始めて、湖水の水がきらきらとし出したのを眺めながら語り続けた。
「またこんな人間もいるだろう。其奴はきようあたり大丈夫で、息張って歩いている。ところが詰まらない、偶然の出来事で、此奴は一二週間の内に死んでしまうのだ。そのくせ死という事なんぞをまるで考えてはいない。そうじゃないか。」

女は云った。「そんな馬鹿な事を考えるのはお廃しなさいよ。今ではもうあなたすっかり健康になつていらつしやるのが、御自分にもお分かりになつているのでしょう。」

男は微笑んで黙っていた。

「だつてあなたなんぞこそ健康になる質の人ですわ。」

男は声を出して笑つた。「お前。己が運命というものが分らないでいると思うのかい。」

今ちよつと工合が好く^{ぐあい}なつたからといって、己がそれに騙^{だま}されていると思うのかい。己は偶然自分の前途を知る事が出来て、死ぬる日の近いのが分つて、外の豪い^{えら}奴^{やつ}のように、哲学者になつてしまったのだ。」

「もう大抵にしてお廃しなさいよ。後生ですから。」

「はいはい。拙者は今に死にますから、さよういたせばあなたに死のお話しなんぞをして、御迷惑を掛ける事も無くなります。」

女は手為事を置いて、男の傍^{そば}へ寄つて来て、確信しているような調子で云つた。「あなたが大丈夫無事でおいでなさるといふ事が、わたくしには本当に分つていますの。この頃^{ころ}のあなたの体の好くなつた事つてありませんわ。それが御自分ではお分りにならないのでしようね。ですから死ぬる事なんぞをまるで考えずにおいでなされば、それであなたとわたくしとの上に落ちて来た暗い影はまるで消えてしまうのですわ。」

十三

男はじつと女の顔を見ていた。そしてこう云つた。「どうもお前には絶対的に物の真相を理解する事が出来ないのだ。どうかして具体的に分からせて遣^やらなくてはならない。ちよいとこれを見い。ここになんと書いてある。」男はそこにあつた新聞を手につけて、日^ひ附^{づけ}のところを指さした。

「千八百九十年六月十二日とありますわ。」

「そうだ。そこで考えて見ろ。この一八九零^{れい}とある零の代りに一が書いてある日^ひが来るのだなあ。その時は己^{おれ}はもういないのだ。どうだ分かるかい。」

女は新聞を荒々しく男の手から奪つて、床の上に投げた。

「新聞に罪はないよ。」男は徐かにこう言い放つて、突然立ち上がつて、あらゆる陰気な考えを一時に遠く擲つたらしい様子をして、こう云つた。「どうだい。あれを見ろ。綺麗じやないか。あの水の上に日の差しているところは。それからあそこを見ろ。」こう云いながら男は階段の横の方へ振じ向いて反対の方角を見た。平地になつてゐる方角である。

「あの畑の作物の揺れているのを見ないか。あそこへ出て見たいなあ。」

「あんまり濡つぽくはないでしょうか。」

「行こう行こう。己は外へ出たくてしようがない。」

女は強いて留めてもどうかと遠慮した。

二人は帽子を手につつて、外套を引つ掛けて、畑の方へ行く道に掛かった。空はほとんど晴れ切つてゐる。遠い山の端に色々な形をした白い霧が掛かつてゐる。牧場の緑が遠い金色を帯びた白の中へ消えて行くようである。

暫くして二人は穀物の作つてある畑の中の道に出た。道が狭いので二人は跡先に歩いてゐる。外套の裾が作物の茎に触てさらさらと鳴る。少し歩いて横へ曲つて木の茂つてゐる森の中へ這入つた。そこには綺麗な道の所々に腰掛が置いてある。二人は手を取り合つ

て並んで歩き出した。

男がこう云った。「どうだい。綺麗じゃないか。それにこの匂^{におい}が好いなあ。」

「雨上がりですが好いでしょか。」女はこう言い掛けた。

男はじれったそうに首を振った。「好いよ。そんな事はどうでも好いのだ。余計な事を言い出さないでくれ。」

暫く歩いていると、木立が段々まばらになって来る。そして木の枝の間から湖水が見える。もう湖水まで百歩もない位である。狭く岬のように突き出した処^{ところ}があつて、森の木立の続きがまばらになりながらその辺^{あたり}まで延びている。そこに櫓^{もみ}の木で拵^{こしら}えた卓^{つくえ}と腰掛^{こし}とが置いてある。水打^{みずうち}際には木の柵^{さく}が結つてある。夕方になって少し風が出て来たので、波が岸を打っている。その風の余りが森の木をゆすつて、濡^ぬれた木葉^{このは}から雫^{しずく}を垂らし始めた。湖水の上には暮れて行く日^ゆの疲れた影が横っている。

フェリックスが云った。「こんな好い景色があるという事は、己はこれまで夢にも知らなかった。」

「ほんとに好いのねえ。」

「お前に分かるものか。景色が本当に好いという事は、暇^{いとま}乞^こいをする積りで見なくては分

からないのだ。」

男はこう云つて、ゆるやかに二三歩前へ歩き出して、下の方を水に洗われている柵の、細い木の上に両肘^{りょうひじ}を衝^ついた。そして長い間きらめく水の面^{おもて}を見ていた。暫くして振り返ると、女が背後^{うしろ}へ付いて来ていた。女は目に涙の出そうなのを堪^{こら}えているのが知れた。

男は笑^{じょうだん}談らしく云つた。「これをみんな己はお前に残して遣^やつて行つてしまうのだ。

そう云うと可笑^{おか}しく思うだろうが、これはみんな己のものだ。この頃^{ごろ}己は人生の秘密の感じが分かつて来て、人間というものは無窮の占有権を持っているという事が分かった。この感じは実に偉大な感じだ。このあらゆるものが、己の自由自在になるのだ。あのごつごつした岩の上へ、己は花を咲かせて見る事も出来る。あの空^{そら}に漂っている白い雲を己は追^のい除^のけてしまう事も出来る。しかしあれはみんなあのままで綺麗だから、己はどうもせすに置いて遣^のるのだ。お前だつて己がいなくなつて、一人になつて見る。そうすると己の心持ちが分かるのだ。その時はお前もあらゆるものが自分のものになつたという感じがするに違^{ちが}ひない。」

十四

男はこう云つて女の手を取つて自分の傍へ並ばせた。それから片手を差し伸べて、景色を指さして、「あれがみんなだ」と云つた。それでも女は、さっきの涙の出そうな目をして黙っているの、男は「もうそろそろ帰ろう」と、急に思い出したように云つた。

日暮が近くなつて来た。二人は岸に沿うて程なく家の前に出た。この時男が云つた。

「兎に角^{かく}好い散歩だつたなあ。」

女は黙つて頷いた。

「おい。ミイツ。きょうのような散歩を、これからもまたしようじゃないか。」

「ええ。」

「だがきょうのようにお前をいじめる事は、これからは^や廃めにするよ。」男はさげすんで^{あわれ}憫むような調子でこう言い足した。

それからまだ何日も立たない頃^{ころ}の事で、ある日の午後フェリックスはまた^{しごと}為事を始めて見ようかと思つた。そこで紙を出して、鉛筆を手にとって、何か書きそうにして、マリイの方をちよいと見た。少し意地の悪い心持ちで、女がどうするだろう、^{とめ}留るだろうかと思

ったのである。しかし女はなんとも云わなかった。暫くして男は紙と鉛筆とを脇へ置いて、何か意味のない書物を手に取って読みそうにした。少し読みかけて見たが、この方がよほど気が晴れて好いように思われた。まだ本当の為事は出来ないのである。なんでも少し人生を馬鹿にし切って沈黙の前途に向って、平気で未来を迎え見るようにして、哲人が遺言をするように、何か書きたい。それが望みなのである。尋常の人は遺言をしても、内々には前途にある死を恐れながら書いている。それではいけない。それに書くものは、目で見たり手で掴んだりするようなものを材料にしたくない。そんなものは皆自分が死んだ跡で、いつか亡びて無くなってしまうのである。自分が遺言として残して置くのは、一篇の詩でなくてはならない。自分が剋伏してしまった世界に向って、静かに微笑んで別れを告げる詩でなくてはならない。そういう心持は、女には話して聞かせなかった。話したところで、とても分かるまいと思うのである。どうしてもこの女なぞに比べて見ると、自分はよほど豪い人間のように思われる。毎日長い午後の時間に、男は一種高慢な心持ちになって、向うに坐っている女を見ている。どうかすると女は読み掛けた本の上に俯伏しになって居眠りをしている。額からほつれて濡れ掛かった髪が、本の上に渦を巻いている。男の心の中では、女に打明けずに、自分の考えている事が沢山あるというのが、自慢しても好い事

のように思われている。自分が如何にも寂しく、如何にも偉大に存在しているように思うのである。

きよの午後には女がまたいつものように転寝をしたので、男はそつと抜け出して、森の中を散歩した。夏の午後の、むつとするような静さが周囲を取り巻いている。なんだかきようこそという心持ちがした。なんだか身が軽いようで、何物にも縛せられないような気がして、深い息をした。そして木の下、重くろしい蔭を歩いていった。木の枝で遮られて、翳められたような日の光が、好い心持ちに自分を照している。日蔭も、静けさも、柔かい空気も、総て我が身の幸福であるように感じた。そしてそれを受用した。これだけ色々な柔かい、優しいもののある人生を棄てて行かなくてはならないのが、今は別段苦痛にならない。「棄てて行くと、棄てて行くと」と中音に独言を言つて見た。それからまた深い息をすると、柔かい空気が、如何にも軽々と、好い心持ちに胸の中へ這入って行く。その時、一体己が病氣だというのが、分らないなあと思った。しかし兎に角病氣なはずだ。助からないはずだ。そう考える内に、忽ち大いに発明したというような気がした。それはその病氣だという事、助からないという事を信ぜなくなったのである。そうだ。皆嘘だ。それだからこんなに何物にも縛せられないような、好い心持ちがするのだ。

さつききょうこそという心持ちのしたのは、それが分つたのであった。そうして見れば人生の快樂を剋伏したのではない。死の恐怖が消え失せたのだ。もう死ななくてはならぬという事を信ぜなくなつたのだ。縦たとい今は体が少し悪くても、いずれ直る。自分もその直つて好よくなる病人の内なのだ。なんだか魂たましいの奥の片隅の方で、あるこれまで潜んでいたものが覺めて来たように思われる。目をこれまでより大きく開あいて、これまでより大股おおまたに歩いて、これまでより深い息をしたいような氣がする。日の光が一層明るくなつて、人生の活動が一層盛んになつたように思う。これだ。これだ。しかしなぜだろう。なぜこんなに突然希望に酔わせられたような心持ちになつたのだらう。なに。希望ではない。それ以上の物だ。確信だ。けさまでは自分は恐怖に責められていた。咽喉のどを扼やくせられていた。しかし今は健康だ。けさも健康であつたのだ。こう思つて大声に「健康だ」と叫んで見た。

十五

この時男は森の出口に立っていた。目の前に湖水が濃い藍あいいろ色に湛たたえられている。そこにあつたベンチに腰を掛けて、好いい心持ちになつて、鏡のように平かな水の面おもてを見渡した。

そして、一体妙だな、人生を快く擲^{なげう}つてしまおうと思つたのは、あれは、実は体の直つた快さであつたかと思つてゐるのである。

ふいと背後^{うしろ}に軽い物音がした。それはマリイであつた。見返る隙^{ひま}もない内に、女はそこへ出て来て、輝く目をして、顔を少し赤くしている。

「どうしたのだい」と、男は云^いつた。

「なぜあなたお出掛けなすつたの、わたくしを一人ぼっちにして置いて。わたくしびつくりしましたわ。」

「なんだ。馬鹿^{ばか}な。」男はこう云つて女を引つ張つて、側^{そば}へ腰を掛けさせた。そして笑^{わらい}顔^がをして女を見て接吻^{せつぶん}した。この女はいつも暖かい、柔かに肥えた唇をしているのである。「こつちへおいで」と男は小声で云つて自分の膝^{ひざ}の上に腰を掛けさせた。女はぴつたり身を寄せ掛けて、男の頸^{くび}に手を捌^{から}んだ。女の姿は如何^{いか}にも美しい。明るい色の髪の毛から、鬱陶^{うつとう}しいような薰^{かお}りが立つ。男はこのしなやかな、好い匂^{におい}のする人を、限りなく愛する情の、胸に沸^わき上がつて来るのを覚えた。そして目に涙を浮べて、女の手を取つて接吻した。まあ、自分はどんなにかこの女を愛しているのだろうと、心に思った。

湖水の方から微^{かす}かな、しゅうというような音がした。二人共頭を上げて見て、それから

立ち上がって、岸の方へ歩いて行つた。遠い処とこに汽船が見えている。二人はそれを眺めていて、汽船が段々近くなつて、甲板の上の人の姿が見分けられるようになった時、始めて船の方に背を向けて、森の中を歩いて内へ帰り掛けた。二人は手を引き合つて、ゆつくり歩きながら、折々顔を見て笑い交すのである。口に出る詞ことばは昔恋の初めて萌きざした頃ころの詞と同じであつた。まだ不確かなような愛情の甘い疑問と、媚こびるような慰めの、親切な詞とが、二人の間に交された。二人とも気が晴れやかで、子供の心ようであつた。幸福が再び返つて来たのである。

重くろしい、燃えるような夏の日が来た。昼は焦げ付くように暑くて、夜は人を誘惑するように生なま温ぬるい。きょうの昼もきのうの昼のようで、きょうの夜もきのうの夜のようにである。丁度時間が静止しているかと思われる。

二人は誰たれにも逢あわずに籠こもつてゐる。そしてお互に氣を付け合うだけで、余所よその人には構わずにゐる。森と、湖水と、小さい家と、これだけが二人の世界である。心持ちの好い鬱陶しさが身を包んで物を考える事を忘れさせてゐる。心配のない、笑い交す夜と、疲れた親密な昼とが二人の上を通り過ぎる。

そういう夜の続いた後のある晩の事である。蠟燭ろうそくを点けたままで二人は寝ていた。目を明いたままで横になつていた女が床の上でふいと起き直つた。女は穏かな眠に沈んでいる男の顔を眺めた。そして息遣いを聞いた。今ではどうも一日一日直る方に向いて行くのがたしかなようである。如何にも嬉しいので男の顔に自分の顔を摺すり寄せて、男の息が自分の頬ほおに触れるようにした。まあ、生きていると云事いうことは、どんなに美しい事だろう。それに自分の生活の内容は、全くこの男の事で填めうづめられているのである。無くするかと思つたこの人を取り返した。いつまでも別れないように、取り返してしまつた。

そう思っている時、ふいと寐ねている男の息遣いが今までと違つて来たのに気が付いた。軽い、抑え付けられたようなうめきをしたのである。そして男の少し開いた唇に苦痛の表情が見えた。それから男の額には汗が玉のように出ているのに気が付いて、女はひどく驚いた。男は頭を少し横へ向けた。そして唇を締めた。表情はまた平和に戻つて、二つ三つ不安らしい息をした跡で、平生の息を音を立てずにするようになった。

しかし女は急に心配し出して来た。出来る事なら男を呼び醒さめて、
体の暖あたまりを、男の生活を直接に身にかけて見たい。それから、なんだか不思議に自分が
罪を犯しているような気がして来た。この頃いま男の命が助かると信じていたのが、ひどい大
胆な望みであつたかのように思われて来た。そしてこんな事を思った。自分が男の事を、
たしかに直ると思つたというのは嘘うそではなかつただろうか。実はただ直りそんな様子を見
て、難ありがたたく感じていただけではあるまいか。そうして見れば何も深く自分を罪するには
及ばない。これから先き放縦な心持ちになつて、丈夫な人を相手にするように、十分の幸
福を受けようとはしないようにしよう。今までつい夢のように歓楽を極めていたのは、あ
れは如何いかにも軽はずみな、罪の深い事であつた。その罪は償つぐわなくてはならない。そうだ
そうだ。一人人間の上で罪である事は、二人の間でも罪であるに違ひではないか。そ
れとも愛情きせきが奇蹟きせきをする事が出来るのではあるまいか。この頃の夜のように打ち解けてい
たのが、却かえつて男の健康を恢かい復ふくさせ掛けたのではあるまいか。女の考えはこんな風にと
つおいつしていた。

突然恐ろしいうめき声が男の口から洩もれた。夢ゆめ現うつの境に、目を大きく開あいて、体を
半分起して、空を睨くうんでゐる。女は覚えず大声で叫んだ。男はそれを聞いてやつと本当に

目が醒めた。

「なんだ、なんだ」と、男は押し出すように云った。女はなんとも返事をする事が出来なかった。「今声を立てたのはお前かい。誰か大声を出して叫んだように聞えたが。」こう言い掛けて、男は忙しい息を衝いて、こう言い足した。「己は息が詰まるような気がした。なんだか忘れてしまったが、夢も見ていたようだった。」

「わたくし本当にびっくりしてよ」と、女は吃りながら云った。

「知っているかい。己は今寒けがしているのだ。」

「それはこわい夢を御覧なすったからですね。」

「そんなわけじゃないよ。」こう云って、男は腹を立ったような目付きをして、上の方を見た。「なに。己はまた熱が出たのだ。知れていらあ。」男は齒をがちがちいわせて、横になつて、布団を襟元まで引き寄せた。

「どうしましょう。何か。」女はこう言い掛けて、途方に暮れたようにあたりを見廻した。「なにをするに及ぶものか。寐るが好い。己もひどくがっかりした。これから寐なくちやあならない。明りは消さずに置くのだよ。」こう云って男は目を瞑つて布団を口の隠れるように被った。

女は遠慮して何もいう事が出来なかった。男の容体の悪い時、気の毒がるような事をいうと、どんなにか腹を立てるだろうと、これまでの経験から推して考えたのである。それから二三分すると、男は寐入ったが、女はそれきり寐付かれずにいた。

程なく彼誰時の薄明りが、忍びやかに部屋の窓から這入って来た。この暁の近づいて来る微^{かすか}なしるしが、女のためにはひどく嬉^{うれ}しかった。何か親しいもの、ひとりでに微笑^{ほほえ}まれるようなものが近づいて来るように感ぜられた。暁の来るのを出迎えにこつちから行きたいような気がして来た。そこでそつと床から抜け出して、朝の着物に着替えて階段の処^{ところ}へ、忍^{しのび}足^{あし}をして出て見た。

空も、山も、湖水も、総^{すべ}て暗い、不確な灰色の中に漂っている。その輪^{りん}廓^{かく}をはつきり見ようと、目に力を入れるのが、愉快である。女は榻^{こしかけ}に腰を掛けて薄明りの中を見詰めている。この静かな夏の朝の空気の中にひとりで坐^{すわ}っているのが、なんとも云われない程好い心持ちである。体の周囲^{しゅうい}は如何にも平和で、柔かで、永遠なように思われる。この偉大なる沈黙の内に、暫^{しばら}く一人でいるのが、如何にも愉快である。あの狭い、息の籠^{こも}ったような部屋から出ているのが、如何にも愉快である。こう思うと同時に、電光の如^{ごと}くある認識がこの女の頭^{あたま}の内にひらめいた。それは自分があの男の側^{そば}を離れて、ここへ来て、一人で

いるのが愉快なのだという認識であつた。

十七

翌日女は朝から晩まで前晩の事を思っていた。暗い所で考えたように気味悪く思わない代りに、一層はつきりと、何かそれに本づいて決断をしなくてはならないように思われた。そこであるだけ男の色情が強く起らないように、氣を付けようという決心が先ず出来た。さてそう思つて見ると、なぜ今まで久しい間、そこへ氣が付かなかつたかと、我れながら不思議な位である。しかしこれを実行するには、よほど優しく、よほど巧者にしなくてはならない。拒むように思われてはならない。むしろ今までの愛情より一層高尚な、一種の新しい愛情だと思われるようにしなくてはならないと思うのである。

しかしそれ程の工みをしなくても済むようになった。なぜというに、その晩から後には、男の烈しい色情が、暴風の風いのように鎮まつたからである。男は女を、疲れを帯びた優しきで待遇した。女は最初それを嬉しく思つて安心していたが、後になつては変だと感じた。男は昼の内は本ばかり見ている。しかし側で氣を付けて見ると、どうも本当に読んで

いるのではないらしい。たびたび目は本から余所へ逸れて、遠い所を見詰めている。毎日
 の話しは平凡な事ばかりになった。しかし女は別に自分が疎外せられて、男の本当の考え
 を聞く事が出来なくなつたのだとは感ぜずにいた。男の様子は如何にも自然らしく、その
 中ちゆうおん音で、毒にも薬にもならない事を言っているのが、やはり病気の直り掛かった人の、
 晴れやかな、落ち着いた心から出るらしく思われた。朝は女が明け切らない内に、一人で
 外へ出るようになったのに、男は長い間床に寝ていた。女は外へ出ると、階段に腰を掛け
 ていたり、時々湖水まで下りて舟に乗つて、沖へ出ずに、岸边で舟を波に揺らせていた
 りするのである。また森へ散歩に行く事もある。そんな風に暫く外にいてから部屋に帰つ
 て男を起す事になつていた。男の長い間好く眠るのを、女は体のために好いように思つて
 いた。女は、男が夜中にたびたび目を覚して、好く眠っている女の顔を悲しげに見るのを、
 夢にも知らなかつたのである。

ある朝の事、女はまた舟に乗っていた。朝日の黄金色の火花が水の面にちらばってい
 る。その時女はふいときようだけ沖の方へ出て見たくなつた。暫く漕いでいる内に、手が
 慣れていないので、次第に骨が折れて来た。しかしそれを却つて面白く思っていた。まだ
 夜の明けたばかりであるのに、もう外にも舟で出ている人がある。中にはわざと女の舟に

近く漕ぎ寄せて見て行くのもあつた。中にも美しい小舟に乗った二人の男は、女の舟の側を摺^すれ違い様^{さま}に、帽を脱いで、微笑^{ほほえ}みながら丁寧^{ていねい}に礼をした。

女は呆^{あき}れて二人の顔を見て、なんとも思わずに、その舟の方を振り返って見た。その時男はまた礼をした。女は二度目に礼をせられた時、これは悪い事をしたと気が付いたので、弱い腕の力一ぱい漕いで、舟を家の方へ戻そうとした。岸に着くまでには、半時間も掛かつて、髪は乱れ、顔は赤くなっていた。舟の着く前に、女はフェリックスが階段に出て腰を掛けているのを見付けた。それから舟を着けると、女は男の側へ駈^かけ付けて、背後^{うしろ}から男の目隠しをして、「さあ誰^{たれ}だか当^{あた}てて御覧なさい」と云った。

男は静かにその手を振り放して、女の顔を横から見た。「どうしたのだい。大変浮れているではないか。」

「あなたにお目に掛かったのが嬉しいのですわ。」

「大変赤い顔をしているじゃないか。」

「わたくし好い心持ちなのですもの。」

こう云つて女は男の膝^{ひざ}の上に掛けている毛布^{ケット}を引き退^のけて、自分が男の膝に腰を掛けた。自分のちよつと間の悪いような氣のしたのが忌^い々^{まい}しい。男の不機嫌なのが忌^い々^{まい}しい。女

はそんなような心持ちで男に接吻した。

「でもそんなにむやみに上機嫌なのは可笑しいじゃないか」と、男が云った。

「それはわけがありますわ。わたくし嬉しいのですもの。」こう云ってちよつと言い淀んで、跡を継ぎ足した。「あなたがお忘れになったのが。」

「なにを」と男は疑うような調子でいった。こうなると女は跡を言わずにはいられなくなつた。「こわがる事をお忘れなすつたのですもの。」

十八

「死の恐怖を忘れたというのかい。」

「そんな事をはつきり言うのはおよしなさいよ。」

「ふん。己が死の恐怖を忘れたというのだな。お前だつて忘れたじゃないか。」こう云つて、男は女の顔をじつと見た。女の心の底を探るような、ほとんど意地の悪い目付きで見たのである。女はなんにも云わずに両手で男の髪をいじりながら、額に接吻しようとて口を寄せた。その時男は顔を少し後へ引いて、それを避けて、冷やかに、不遠慮に云つ

た。「一体お前は己と運命を一つにすると、少くも一度は云った事があるのだから、己に死の恐怖が無くなれば、お前にも無くなるはずだなあ。」

「それはわたくしにも無くなるだろうと思いますの。」女は活潑かつぱつに、晴れやかな調子で云った。

男は真面目まじめにその詞ことばを遮さへった。「ところがそうは行かないのだ。何も知れている事を隠しているには及ばない。死の恐怖は無くなりはいしない。死が次第に近づいて来るのが、己には分かっている。」

「まあ。」女は目立たぬように男の側そばを離れて、欄てすりにもたれた。

男は立ち上がって、あちこち歩き出した。「實際己には分かっている。それだからお前に一通り言つて聞かせて置くのは、己の義務だろうと思うのだ。もし出し抜けに死んでしまふと、お前がびつくりするだろうからなあ。己の死ぬまでの日数がもう四分一ぶは立っているぞ。なに。こう言つて話すのが義務だなんぞというのも、やっぱり自ら欺みづかくので、己が臆病おくびようからこんな事をいうのかも知れないよ。」

女は心配気に云った。「あなた、わたくしが黙つて出て行ったものですから、おおこりになったのではなくって。」

男は急に答えた。「馬鹿^{ばか}言え。実はお前の晴々しているのを見るのは、己だって悪くはない。己もこれから晴々した気分になって、ある事件の熟して来る日を待つ積りだ。しかしお前の今のように浮れているのを見ると、正直を言えば、己は余り好^いい心持ちはしないのだ。だからお前に相談をするのだが、いつその事近い内に別れてしまおうじゃないか。」

「あなた。」女は歩いている男の両腕をつかまえた。

男はそれを振り放した。「これから厭^{いや}な時が来るのだ。これまで己は面白い病人だった。少し色^{あお}が蒼くて、少し咳^{せき}をして、少し気がふさいでいる。そういうのは女に嫌われはしない。しかしこれからはな、違^{ちが}うぞ。段々己の病気の悪くなるのを見ていると、己という人間の記念が次第に傷つけられてしまふばかりだ。」

女はなんと返事をして好いか分らぬので、途方に暮れて男の顔を見ている。「己がこう云ったって、直^すぐ置いて逃げるわけには行かないと、お前は思っているのだろう。なんだか冷淡なようで、今少し極端に言えば、卑劣なようにさえ見えるのだ。そこで己が言つて聞かせるが、そんな遠慮は決していらぬ。お前が別れて行つてくれれば、己は為^{しあ}合せだ。己の自信が傷つけられずに済むのだ。なぜというに、別れた跡で、お前が己の事を思い出す時に惜しんで泣いてくれる事が出来るようにして置きたいのだ。もしあべこべにお前が

この上己の側そばにいて、昼も夜も介抱して、どうせ死ななくてはならないものなら、早く死んでくれれば好いと思ひ續けて、とうとう己の死んだ時、ようようの事で助かつたと思つて別れてくれるのが、己は難ありがた有くはないからなあ。」

女はなんと云つて好よかろうと思ひ悩んでいる。ようようの事で、「わたくしいつまでもあなたの側にいてよ」と云つた。

男はそれを聞き流して云つた。「もうそんな話しはよそう。これから八日程かしたらウイインへ帰らなくてはならない。色々整理して置きたい事があるからなあ。そこでいよいよこの家を引き払う日になったら、己はお前にさっきの間をもう一遍繰り返して見る積りだ。さっきの願いと云つた方が好いかも知れない。」

「あの、わたくし。」

男は烈はげしく女の詞を遮つた。「どうぞもう黙つていて貰もらいたい。さっき云つた時が来るまでは、何を言うのも無駄だからなあ。」こう云つて、階段から立つて部屋の方へ行き掛けた。女が跡に付いて行きゆきそうにすると、「どうぞちよいとの間己を一人で置いてくれ」と云つた。その声は優しかった。

女は階段の処ところに残つていた。そして涙も何も出ない目で、きらきら光る湖水の面おもてを見詰

めた。男は寝間へ帰って、床の上へ横になって、長い間天井を睨んでいた。それから唇を噛んで、両手を拳に握った。この時その唇から、嘲るような調子で、「忍耐、忍耐」という声が洩れた。

十九

この頃からなんだかある邪魔物が二人の中に這入ったような工合になった。それと同時に二人は絶えず、ほとんど神経質に、何事かを話し続けなくてはいらなくなった。二人は日常の事を詞数多く話し合った。どうも物を言い止めるのがこわいような気がするのである。あの山の上に棚引いている鼠色の雲はどこから出て来たのでしょうか、あしたの天気はどんなでしょう、湖水の色が朝昼晩と変わるのはなぜでしょうというような対話が、長く長く続くのである。散歩に出る時は、これまでのように、家の周囲の寂しい所ばかりを歩いていずに、海岸の人家のある方へ行く事になった。そうすると、色々な人の顔を見て、話しの種が出来るのである。そんな道で、向うから若い男が来ると、女はひどく憤み深い風をする。もし男が舟を漕ぎに来た人や、山に登りに行く人を見て、その着物の

批評なんぞをすると、女は實際その人を見たのに、つい見なかったと嘘を衝いて、今度出逢った時、わざわざ叮嚀に見直す事がある。そんな時に男にちよつと顔を見られると、女はせつないような気がした。ある時は十五分間も並んで黙って歩いてゐる事がある。それから内にいると階段に出て並んで坐つて、やはり黙っている事がある。そんな時は女が「新聞を読みましようね」と言い出す。それが如何にもわざとらしいのを、隠す事も出来ないのである。それから読んで聞かせてゐる内に、男がもう聞いていない事がある。その時女は心の内で、それを知つていながら、知らない顔をして読み続けている。自分の声を聞いているのが、心持が好い、二人の間に声のしているだけでも、ひっそりとしているよりは好いと思うのである。こんな風に互に心配をごまかしていようとしているが、それでもやはり男は男、女は女で、自分自分の思案に耽つてゐるのである。

二十

男はこないだ女に対して馬鹿らしい狂言をして見せたという事を、自分で認めずにはいられなかった。もし女にこれから先の苦勞をさせまいという情願が本當なら、自分が

そつと身を引いてしまうのが一番好いはずである。どこか静かな土地を見付けて、そこで一人死ぬるのは、造作もない事ではないか、こんな事を平気で考えて見られるのが、我れながら不思議だと、男は思った。さてその身を引いて、一人で死のうという事を、どうして実行したら好かろうかと、考え出すと、そんな事のなかなか出来ないのが分つて来た。それはある夜眠らずに、その実行の爲方を細かに考えて見た時の事である。先ずあすの朝明けない内に、暇乞いをせずに、ここを出て行つて、寂しい所へ死ぬる日の来るのを待ちに行くとする。そして女をこの晴れやかな、面白い、我が物で無くなった人生の中に残して置くのである。そう思うと、そんな事は出来ない、いつまで立つても出来ないとい、つくづく自分の腑甲斐なさを感じずにはいられない。そんならどうしたら好かろう。その日は厭でも来るに違いない。實際一日一日と迫つて来ている。その日には女を残して置いて、自分はこの世を去つてしまわなくてはならない。今の自分の存在というものは、その日を待つているに過ぎない。実は死そのものよりも厭うべき、苦悶の期間に過ぎない。どうも今になつて見れば小さい時から、自分で自分を觀察する癖を付けたのが悪かった。今の病気の種々な徴候も、この癖がなかったら、見逃すかも知れない。見逃さなくても、さ程に思わないかも知れない。こう思つて、男は自分の昔知つていた、二三の人の事を思い出し

て見る。その人々は、自分が今煩つているのと同じ病氣になつて、次第に衰えて行つたのである。それでも死ぬる二三週間前まで、晴れやかに未来の事を考えていた。それが今では羨ましい。あの医者うらやの所へ尋ねて行つて、嘘うその限りを尽して、とうとう本当の事を言わせてしまった。あの日は実に咄のろうべき日である。あんな事をしたので、自分は今咄のろわれた人間のようになつて、こうして寝ている。譬たとえば、いつ首切役が来て、刑場へ引き出すかも知れない、宣告を受けた罪人のようになつて寝ている。一体自分の存在は恐れても恐れ足りない程のものである。然しかるにその恐怖の全体を、はつきり意識している時は少しもない。いつでも心のどこかの隅に、横着な、便べん佞ねいな希望が綺麗きれいに離れ去つてしまつた事はない。しかし自分にはそれより強い理性がある。それが寝られない、長い夜や、暮れ易やすい、単調な昼の間に、十遍も百遍も千遍も繰り返して、こういう事を自分に言つて聞かせる。それは自分の逃にげ道みち、自分の活路はただ一つしかないという事である。それは一時間も、一秒間も待たずに、自分でこの世の暇いとまを取る事である。それなら、病氣で死ぬるのを待つより、少しは男らしいだろう。いよいよそうしようとさえ思えば、誰たれも待てといつて束縛するものがないのが、ほとんど慰めのようにも思われる。しようとさえ思えば、何時なんどきでもこの世の暇いとまを取るに、差さ支しはないのである。

二十一

ところで女だ。昼間、自分と並んで歩いていたり、側に坐^{そば}つて本を読んでいたりする時などに考えて見ると、この女と別れるのが、そうむつかしくもなさそうである。詰まりこの女も我が存在の一部分たるに過ぎない。この周囲^{しゅうい}の生活を棄^すてなくてはならないものとするれば、女もその一部分に過ぎないから、無論棄^すてなくてはならないと思う。しかし外の時、殊に夜になって若い女の美しい顔をして、目を堅く瞑^{つぶ}つて、ぐっすり寐^ねているのを見ると、女が際限もなく可^{かわ}哀^{わい}い。女の眠りが穏かなだけ、現在を遠く離れているらしく見えるだけ、眠らずにいる自分の苦悩に關係がなくなっているだけ、男は女の可^{かわ}哀^{わい}さが増すのである。とうとうある夜^よの事、それは丁度あすはこの湖水の側を離れてしまおうと思ひ定めた晩の事であつたが、男は好^よく寐^ねている女の顔を見て、自分の病苦に構わずに寝ているのを、如何^{いか}にも不人情なように感じて、一つ揺り起して、耳に口を寄せて、「お前^{おれ}が己^{おれ}を愛しているというのが本^{ほん}当なら、己と一しよに死ね、今直^すぐ死ね」とどなって遣^やりたく思つた。しかしその場はそのまゝに寝かして置いた。そして事に依^よつたら、あす言つて聞か

せようと思った。

男は知らなかったが、女はたびたび自分の寐顔を、男が見ているのを知っていた。男は知らなかったが、女はたびたび目を細目に明けて、寝間の薄明りの中に、男が床の上で半分起き上がって自分を見ているのを見ながら、こわきにその目を皆明けずにいた。いつかの真面目な談判の記念は長く女の心を去らずにいて、女はいつかあの問いを繰り返さされることだろうと、顫えるようにこわがっていた。一体なぜそんなにこわいのだろう。男が何遍問うたところで、自分の答える詞は極まっているではないか。「あなたの生でいらつしやる最後の一秒まで、わたくしはお側を離れません。あなたの唇から洩れる溜息や、あなたの睫から翻れる涙を、わたくしの唇で受けて上げます。」こういうより外はない。一体男は自分を疑っているのであろうか。自分にこれより外の答えが出来ようか。その外の答えはどんな事だろう。例えばこんな答えが出来ようか。「あなたの仰やるのは御尤なようですから、わたくしはお暇をいたしましょう。面白い、優しいところのある御病人の側にいたという、わたくしの記念だけをいつまでも持っている事にいたします。その大事な記念を傷けないために、わたくしはあなたを一人置いて、お暇をいたします。」こんな事を言ったら、その跡はどうなるだろう。女はそれから先の事を細に想像して見ず

にはいられなかった。多分男は冷やかに微笑^{ほほえ}んで、自分と握手をして、「難有^{ありがと}う」というだろう。そして男が脊中を向けるとき、自分は急いでその場を逃げるだろう。その日は目の醒^さめるような喜びに輝いている夏の朝であろう。自分は成るだけ早く男の側から遠ざかろうと思つて、黄^{こがねいろ}金色に輝いている朝の空気の中を、次第に遠く遠く馳^はせ去るのである。その時あらゆる縛^{ばく}が取れてしまつて、自分は再び独立して、人を気の毒がる、厭^{いや}な心持が無くなるだろう。数箇月の長い間ひどく自分を苦めた、あの物を問うような、死に掛かった目が見詰めているという感じが、綺麗^{きれい}になくなってしまふだろう。自分の身は歓喜に返り、人生に返つて、再び若々しくなるだろう。自分の走つて行く跡から、夏の朝風が笑いながら自分の裾^{すそ}を吹いているだろう。

二十二

こういう物狂わしい夢の影が、忽^{こつぜん}然消えてしまうと、女は今までより一層はかない身の上になつたように思う。そしてそんな夢の影が、仮にも浮んで来たのを、切なく思うのである。

そして女は男が死ななくてはならないという事を自覺しているという事、絶望に陥っているという事を思うたびに、どんなにか同情の胸を痛めて、身ぶるいのするような心持ちになっただろう。男の死ななくてはならない日が、次第に近づいて来るのを覚えると共に、女の男を愛する情は、どんなにか深くなつただろう。そして女は自分の男に答えるはずのことばが別にあるように思つて見る。病人の側（そば）にいつまでも付いていて一しよに苦んで遣（や）るといふのは、どうもまだ物足りない。男の死を待っているのを見ていて、何箇月の間も男と一しよに死の恐怖を味わうというのもまだ物足りない。何かそれ以上の最善の事、最高の事をして遣る事は出来まいか。「あなたがお亡くなりになったら、わたくしはお墓の前で死にましよう」と云（い）つたらどうだろう。そうしたら、男は自分を半信半疑して、墓の前で本当に死ぬか知らぬと思ひながら死ぬだろう。それよりは男と一しよに、いや、男に先立つて死ぬるが好（よ）かろう。男がいつかの問いを繰り返した時自分は氣をしつかり持つていてこゝう答えよう。「ねえ、あなた。お互にこんな苦みをいつまでもしていずに、早く切上げてしまおうではありませんか。御一しよに死（し）ましようね。つい今直（す）ぐに。」この詞を心の内で言つて見て女は物に酔つたような心持ちになる。しかしそれと同時にその心の内には、別な夢の影が浮ぶ。それは優しい朝風に身を吹かれて、歡喜と人生とを向うに見て、

野の上を走って逃げる影である。まあ、なんという卑劣な、みじめな事だろう。

二人が旅立とうと思った日の夜が明けた。春が再び返って来たかと思われるほどの、珍らしく暖かい朝であった。マリイがもう階段の所へ出て朝食の用意をしてしまつて待つてゐると、そこへフェリックスが部屋から出て来た。

「ひどく好い天気だなあ」と男が深い息をして云つた。

「本当ですわね。」

「ちよいとお前に言いたい事があるよ。」

「なんでしょう。」女はこう云つて置いて、先潜りをするように言い足した。「もつとここにゐるのでしょうか。」

「そうじゃない。しかしここから直ぐにウイーンへは帰らない事にしようと思うのだ。己はきようはよほど工合が好いから、ここを立つて、どこか途中でまた滞留しようかというのだ。」

「ようございますとも。」女は近頃にないい好い心持ちで、こう答えた。もう一週間この方、こんな風に心にわだかまりのない話し振をした事はなかった。

「まあ、己の考えでは、ザルツブルヒあたりに足を留めようかと思う。」

「ようございますとも。」

「そうしたつて、ウイインへは随分早く帰られるのだ。それに己は汽車旅を一息に長く続けるのは嫌いなのだ。」

「それはお草臥くたびれなさいますわね。それにそんなに急がなくても宜よろしいのですから。」女は活潑かつぱつにこう云った。

「もう荷物は皆みなしまつただろうね。」

「もうとつくに出来ていますわ。直ぐにでも立たれるようになっていきますの。」

「そんなら馬車を雇つて立つとしよう。ここから四時間か五時間で着くだろう。汽車に乗るよりか、その方がよつぽど好い。汽車の中にはきのうの暑さが残っているからなあ。」

「ではそうしましょうね。」

女は男に勧めていつもの牛乳を一杯飲ませた。それから湖水の波の波頭に、美しい、銀色の光の见えているのを、男に指さして示した。二人はひどく愉快らしく、色々の事を話した。女が何か言うと、男は無邪気に、優しく返事をした。

とうとう女がこれから馬車を誂あつちえに、自分で行つて来ようと言ひ出した。それに乗つて正午に立つてザルツブルヒへ行かうというのである。男は笑ひながら、そうして貰もらおうと云つた。女は大きな麦藁むぎわら帽子ぼうしを急いで被かぶつて、男に二三度キスをして置いて、往来へ駈かけ出した。

兼て女に問おうと思つた事を、男はとうとう問わずにしまった。多分もう問わずに置くだろう。それは男の晴やかな額すくを見ても直分すくる。いつもは優しい詞ことばを掛けていても、その底に隙すきを覗うかがつているような、意地の悪い心持ちがあつた。そして何か罪のない話をしてゐる間に、突然わざと憎らしい事を一言こというのであつた。そういう時は、女はその一言ことを聞かない内に、先へ悟つていた。きようはその意地の悪い詞ことばが出ないので、女は感謝わはくしないでならないように思つた。きようの男の優しさには、和睦わはくするような、恩恵を施すような趣おもむきがあつた。

女が階段の所へ歸つて来て見ると、男は留守の間に來た新聞を読んでゐた。

「おい。不思議な事があるよ。」男はこう云つて目食めくばせをして女を側そばへ呼んだ。

「なにが書いてありますの。」

「まあ、読んで見ろ。あの男が死んだのだ。あの大学教授のベルナルドだなあ。」

「どういう方でございますの。」

「それ、あの男さ。己おれに病気の事をひどくむずかしく言つて聞せたあの男さ。」

「まあ、あのベルナルドという人が亡くなりましたの。」女は男の持つて居る新聞を取つて覗のぞいて見た。「まあ、好いい気味だ事」と口まで出そうなのを、女は堪こらえていた。

この出来事は、二人がためには、大層意味があるように思われた。ベルナルド教授は自分が飽くまで健康でいて、さも豪えらそうに専門の知識を吹ふ聴いして、見て貰いに行つた男の希望を打ち破つてしまったのに、自分が却かえて数日間に死ななくてはならなかつたのである。今あの人が死んだという事を聞くと同時に、男はこれまで心の底でひどくあの教授を憎んでいた事を自覚した。そして自然にその復ふ讐しゅうが出来たのを、自分の運命のために大層好い前兆でもあるように感じた。言つて見れば自分の身の周まわりから、気味の悪い幽霊を逐おい退のけてしまったような心持ちである。

女は新聞をそこへほうり出して云つた。「一体人間というものは、どんなに豪くつたつて、未来は分らないはずでございますわね。」

「そうだ。あすどうなるという事が分かるものじゃあないなあ。まるで分らないのだ。」

男は心から女に同意してこう云った。それから少し間を置いて、突然外の問題に移った。

「車は云い付けたのかい。」

「ええ、十一時に来るようにそう云って置きましたの。」

「そんならまだちよつと舟でそこらを廻つて見る隙位あるなあ。」

二人は手を引き合つて、舟の繋いである小屋の方へ歩いて行つた。二人ともなんだか当然享けるはずの幸福を享けるような心持ちがしているのである。

ザルツブルヒに着いたのは午後遅くなつてからであつた。どの家を見ても旗が立ててあるので、二人は驚いた。町で出合う人が皆晴着を着て、中には印の付いた帽子を被つてゐる人もあつた。宿屋へ着いて、ミヨンヒスベルヒという岡の方の見える部屋を借りた。そこで聞けば、きょうこの町では大きい唱歌会の大会があるのであつた。宿屋の主人は一枚の切符をくれた。これを持つて今晚八時にクウルパーク公園に行くと、大層なイルミネーションがあつて、そこで合奏をするのだという事であつた。借りた部屋は二階で、窓の下をザルツアハの流れが通つてゐる。二人ともここまで来る馬車の中で大ぶ眠つたので、好い心持ちになつてゐる。そこでは余り長くいずに日が暮れ掛かると、町へ出掛けた。

二十四

町 中 まちじゆう なんとなく人の気が立っている。誰 たれかれ 彼となく家の中に落ち着いてはいられない

いので往来へ出ているらしく思われる。その雑沓 ざつとう の間を、印の付いた服を着た唱歌会員が通っている。大ぶ外 ほか から来ているらしい人も見える。近所の村から来た田舎びた晴着を着た人も、町の人の間に交 まじ つて押し合っている。家々の搏風 はぶ からは、市の定色 ていしよく に染めた旗がひらめいている。大通りには、花で飾った凱旋門 がいせんもん が出来ている。どの町に行っても大勢の人が、落着かないような様子をして歩いている。その上に勻 におい のある夏の夕の空気が、心地好 よ く柔かに漂っている。

ザルツアハの岸 そば の、心持ちの好 い い、静 しずか な所から、二人は市中の賑 にぎや かな所へ出た。これまで例の湖水 こすい の側 そば で、ひっそりした生活をして来たので、この慣れない賑 にぎ いに出逢 であ っ、ほとんど茫然 ぼうぜん とするようであった。しかし暫 しばら くすると、大都会に育った人の、世慣れた心持ちが出て来て、平気で周囲 しゅうい の刺戟 しげき を身に受けて見るようになった。一体男は大勢の騒いでいる事は好かないので、きょうも少し不快に思った。女はその反対で、直 す ぐに興 き に乗つて来た。そして子供か何かのように、土地の異様な衣服を着た女を、立ち止まって見たり、

襷たすきを掛けた唱歌会員の、体格の好い男を、振り返って見たりしている。折々は項うなじを反せて、どの家かの美しい装飾を見ている。そして格別面白がらずに、並んで歩いている男に、
 「あれ、御覧なさいよ、綺麗きれいではありませんか」などと云いう。しかし男は黙うなずつて頷うなずくばかりである。

「丁度好い所へ来ましたわねえ。あなたそう思わなくつて。」

こう云われたので、男は妙な目付きをして女の顔を見た。その目付きはどういう意味だか、ちよつと女に読めなかった。男は「大方お前は今夜おれ己おれを公園へ合奏を聴きに引つ張ひつて行きたいのだろう」と云った。

女は微笑ほほえんで答えた。「ここへ来て最初からそんなに吝けちにしなくつたつて好うございましょう。」

「それではほんとにそんなところへ己を連れ出す積りかい。」男は女の微笑ほほえみが癩しやくに障さつてこう云った。

「まあ、お厭いやなら参ろうとは申しませんわ」と女は驚いて云ったが、その目は直ぐに横の方を通り掛つた男女の連れを見ている。様子の好い、美しい、若い二人連れで、結婚旅行に出たのででもあるらしく笑い交して通り過ぎたのである。

フエリックスとマリイとは並んで歩いてはいるが、女は男の肘ひじに手を掛けてはいなかった。人込みになると、ちよつと押し隔てられて、また出逢うような事がある。兎角とかく男は不愉快らしく、人家の壁に沿うて歩いていて、面白げに往来ゆききする人達ひとたちに触れないようにしているの、猶更なおよ押し隔てられ易いのである。

その内段々暗くなつた。街燈に火が点ついた。町の所々、殊に凱旋門のあるあたりには酸漿提灯おずきぢようちんが点けてある。歩いている人の多数は公園の方へ向いて行く。合奏の時間が近づいて来るのである。暫くの間は二人とも大勢と同じ方向に、押されて歩いていたが、男は突然女の肘をつかまえて、狭い横町へ曲つた。暫くそこを歩いていると、明りなんぞも多く点いていない、寂しい所へ出た。また数分間黙つて歩いている内に、とうとうザルツアハ河の岸に出た。单调な水の音が下から聞えて来る。

「こんなところへ来て、どうなさるの」と女が問うた。

二十五

「まあ、黙っていないか」と、叱しかるように男は云つた。それから女の黙ってしまったのを

見て、男は神経質な、いらいらする声をして云った。「己おれなんぞにはあんな所は向かないのだ。明りが沢山点ついていたり、面白そうに歌を歌っていたり、若い人間が笑っていたりするとところは、己達の行く場所ではない。己達はこういう所になくなくてはならない。ここへなら人の喜んでどなる声なんぞは聞えない。ここなら寂しくしていられるのだ。己達はこんな所にいなくてはならないのだ。」これまでの詞ことばを腹の立つのを我慢しているような調子で言つて、それから冷かすような調子になつて、「少くも己はそうだ」と言い足した。女はこの詞を聞いた時、自分が今までほど同情しなくなっているのに気が付いた。しかし女はこう思つた。これは多分余りたびたび聞かせられているからだろう。それにあんなり誇張して言われるので、感動しないのだろうと思つた。そして仲直りをしようとするような、優しい声で答えた。

「わたくしそんな事を言われるはずはありませんわ。」

「御免よ。」やはり嘲あざけるような調子である。

女は男の手に搦からみ付いて、ぴったり身を寄せて云つた。「あなたもわたくしも、二人ともこんな所にいるのは好よくありませんわ。」

「いやこんな所が好いいのだ。」叫ぶように云うのである。

「いいえ。わたくしだってあの人込みへ帰って行こうとは思いませんわ。あなたが厭いやに思いなさるように、わたくしも厭でございますの。ですけど、何も人交わりの出来ないもののように、こんなにして逃げ廻まわらなくったって好うございますでしょう。」女の声は優しい。

こう云ったとたんに、風のない、澄んだ空気の中に合奏のオルケストラの響が伝わって来た。一音毎ごとにはつきり聞き取られる位であつた。多分今宵こよいの祭りの序開じよびらきの曲である。花やかな、晴がましい、金笛きんてきの響のようであつた。

暫しばらく立ち止まって聞いていた男が突然云つた。「行こう行こう。音楽というものは遠くから聞いていると、悲しげになつていけない。」

「本当にメランコリーの音色ねいろがしますわ。」

二人は足を早めて賑にぎやかな方へ歩き出した。家の間へ這入はいって見ると、河の岸で聞くよりは音楽の声が幽かすかになつている。段々明りの沢山点あいている、人通りの多い町へ出て来ると、女はまた昔のように男を可哀かわゆそうに思う同情を起して来た。男の心持ちが分つて、さつき云つた詞の毒々しさが忘れられたのである。

「内へ行きましょうか」と女が問うた。

「なぜだい。眠むたいのか。」

「なに。眠むたいものですか。」

「もつと外にいようじゃないか。」

「あなたが宜しければ、わたくしまだ外にいたくつてよ。でもあんまり寒くなりはいでしようか。」

「なに。蒸々するようだ。暑いと云つても好い位だ。晩飯を外で遣ろうじゃないか。」男は少し神経質な調子でこう云つた。

「ではそうしましょうね。」

二十六

二人は公園近くに来た。楽人団が序開きの音楽を奏してしまつた所である。昼のように明るく、火の点してある公園から、面白げに話しをしている大勢の声が聞える。後れて合奏を聞急に急いで行く人がちらほら通り過ぎる。その中に唱歌会員が二人、後れたものと見えて、あわただしくフェリックス、マリイの二人連と摺れ違つて行つた。マリイはこ

れを見送ったが、悪い事でもしたと思うらしく、直にその目をフェリックスに移した。フエリックスは唇を嚙かんでいる。やつと我慢している怒りが額の皺しわに現われている。何か言うだろうと思つて、女が待つていたが、何も言わない。そして今公園の入口に這入はいつて行く唱歌会員の二人を、さも憎げに見送っている。その心の内には自分の不愉快な感じを分析して見て、自分で理解しているのである。

摺れ違つて行つた二人は、フェリックスの最も憎んでいるものである。自分がこの世から消えて無くなつた跡に、残っている物の一部分である。自分がもう笑いも泣きも出来なくなつてしまつた跡でまだ若々しく生きていて、笑う人間である。それから今、うっかり悪い事をしたと思つて、後悔して、自分の肘ひじに力を入れて搦からみ付いている女も、やはり跡に残る物の一部分である。女も笑つて生き残っている若々しさの仲間なので、その同類相求める心持ちが、知らず識しらず発動して、さっきのように唱歌会員の二人を見送つたのである。男はそれが分かつているので、物狂わしくなるほど腹が立つている。

二人は長い間黙つて歩いていた。それから男が大きい溜ため息を衝ついた。それを聞いて、女が男の顔を見ようとすると、男は顔を反そむけた。そして突然云つた。「ここが好いじゃないか。」

女はなんの事だかちよつと分からなかった。

「ええ。」

二人は庭に卓や椅子を並べた料理屋の前に立つていた。公園の直ぐ側で、高い木立が白い布を掛けた卓の上に枝を拡げている。所々に明りが点いているが、その数が少いので、あたりは薄暗い。客は余り無い。そこでどこへでも勝手な所へ席を取る事が出来るので、男は好いじゃないかと云つたのである。

二人はこの庭の片隅に席を取った。庭中に二十人ばかりも客がいるだろう。直ぐ側の卓には、さつき一度出逢つた、氣の利いた風をしている、若い男女の二人連れが掛けていた。マリイは直ぐにさつきの人だなと思つた。

丁度公園で唱歌会員の合唱が始まった。少し微かではあるが、善く調子の合つた歌が聞える。面白げに歌っている声が掠めて通るので、木立の葉がゆらぐような心持ちがする。フェリックスは上等のライン産の葡萄酒を注文した。そして一口含んでは、目を半分瞑つて、音楽に耳を傾けている。しかしどこで奏している音楽だという事さえ考えずに、ただ聴いているのである。

マリイは男の側へびつたり寄つた。女の膝の障つているところだけ、肌の温まりが男に

感ぜられる。男はさつきひどく腹を立てたので、その反動が来て、何事にも冷淡になって、大体好い心持ちがしている。そして誰の力も借らずに、自分の心持ちを、こんなに冷淡になるように落ち着かせたと思つて、それを喜んでゐる。実際男はここへ腰を掛ける時、どうしてもこの苦痛を押え付けてしまわなくてはならないと、堅く決心したのであつた。そしてそういう結果になつたのが、どれだけ自分の意志の作用であるかという事を、細かに研究して見る程の精力はもうなかつた。さて落ち着いて見るといろんな事が思われて来た。さつき女が余所の男を見た目付を、ひどく憎らしく思つたのは、どうも少し無理であつたかも知れない。外の人が通つたつて、やはりあんな風にして見たものではあるまいか。現に今隣に坐つてゐる二人を見る、マリイの目付も、さつきの唱歌会員を見た目附と、余り違つてはいないようだと思うのである。

二十七

葡萄酒は好かつた。音楽は人に媚びるように聞えて来る。夏の夜の人を酔わせるような微温みがある。男はちよいと女の目を見た。その目の中には無限の愛情と好意とが輝い

ていた。そこで男は精一ぱい心を今の一刹那に集中しようと思った。過去をも未来をも、少しも思うまいと男は意志に最後の鞭撻を加えた。兎に角今だけでも幸福を感じていた。少くも苦痛をばかしていたい。

その時忽然と、少しも予期しないのに、解脱したような、一種の新しい感じが出て来た。それは今自殺してしまえば、わけはないという感じであった。直ぐに遣ればなんでもない。今遣らないところで、いつでもこの感じを起して自殺すれば、わけはないと思つたのである。音楽は聞える。ほろ酔い機嫌になつてゐる。可哀らしい娘が側にいる。こういう時に遣るのだなあ。女はマリイだつて。しかしマリイでなくつたつて外の女でも好いわけだと考えた。

女も旨げに酒を啜つてゐる。男は今一本と註文した。近頃にないい好い心持である。自分でもよくよく思つて見れば、こんな感じのするのは、常より少し余計に酒を飲んでゐるからかも知れない。しかしそうだつて構わないのだ。兎に角そんな心持ちになられるのが難有い。この感じのしている間は、「死」なんというものはこわくもなんともない。どうでも好いのだ。「なあ、マリイ」と男はふと云つた。

女は体をびつたり寄せた。「なんですつて。」

「何がどうなつても構わないじゃないか。」

「ええ。構いせんとも。ただわたくしがあなたの事をいつまでも大事に思っているという事だけは、変りつこなしでございますの。」

女が真面目で、この誓言めいた事を言うのが、男には異様に感ぜられた。今の刹那の心持ちでは、男のためには、女は誰でも好いのである。このマリイという女も、自分を取り巻いている万有と、解けて流れて、一しよになつてしまふのである。これは面白い。なんでも世の中をこんな風に觀察しなくてはいけない。待てよ。これは酒のために浮かぶ幻影だけではないぞ。ただ酒がある物を己の心から奪い去つたのだ。そのある物が平生己を臆病に、おつくうにしているのだ。人間や事物をひどく勿体らしく見せているのだ。こういう時に白い粉薬を、少し許りコップの中へ叩き込んでしまえば好い。まあなんという造作もない事だろう。こう思うと同時に、なぜだか目の中に涙が湧いて来た。自分で自分を気の毒に感じたのである。

今唱歌が済んだ。手を叩く音、褒める声が聞える。それからがやがやと、話声がする。その内楽人団がまた奏樂を始めた。今度は晴々とした心持ちのポロネエズの曲である。男は指先で卓を叩いて拍子を取った。この時一つの考えが頭をかすめて過ぎた。それは「も

う少しばかりの命だ、面白く暮されるだけ暮して見よう」という考えであつた。しかしこの考えには少しも気味の悪いような分子は含んでいない。むしろ人に傲おごるような、君主的なような分子を含んでいる。なんだ。息を引き取るという事は、人間と生れた以上は誰も免れない事ではないか。何もそれをびくびくして待つてゐるには及ばないじゃないか。一体自分はまだ体が衰えていないで、どんな快樂をも受ける事が出来る。音楽を聴いて面白がる事も出来る。酒を飲めば旨うまい。可哀かわゆらしい娘を見れば膝ひざの上に抱だいてキスをして遣りたくなる。これ程の力を体の内に持つていながら、何も夜昼下らない事を考えて気持ち悪くしている事はないじゃないか。なんだ。今から機嫌を悪くしているのは太早たいそう計だ。そんな面白や情慾じょうよくが、いつかは無くなつてしまふだろう。その時自由意志で、決然として実行すれば好いのだ。そうすれば君主的な行いだ。意張いばつて出来る行いだ。こんな事を思いながら、男は女の手を取つて、それを長い間握つていた。そしてその手の上に、ゆるやかに息を嘘ふき掛けていた。

「あら」と女は満足したらしい様子さまやで囁ささやいた。

二十八

男は女の顔をじつと見た。そして大層美しいと思った。そして「行こう」と云った。

「も一つ歌が済むまでいようじやありませんか」と女は無邪気に促した。

「好いとも」と男は云った。「だが内へ帰つて窓を明けて置けば、後の歌は風が持つて来て聞かせてくれるぜ。」

「あなたもうお草臥くたびれなすつて」という女の声は、心配しているらしかった。

「そうさ。ひどく草臥くたびれている。」男は笑いながらこう云つて、笑しょうだん談だんらしく女の髪を撫なでた。

「そんなら参りましょうね。」

二人は立ち上がつて、料理屋の庭を出た。女は男の肘ひじに手を掛けて、手に力を入れて、片頬かたほを男の肩に押し付けた。歌い始めた次の歌が、次第に遠くなりながら、帰つて行く二人に付いて来る。ワルツの拍子で、晴やかに、最後に繰り返して一しよに歌う文句が元氣よよく聞えるので、二人は覚えわづかず活潑かつぱつな歩調になった。宿屋までは、数分間しか掛からない。梯子段はしごだんを昇る時は、歌が聞えなかった。しかし部屋に這入はいると、さっきのワルツの節がまた元氣よく聞えて来る。

部屋の窓は皆明^{みな}け放^{はな}つてあつた。月の光が青い色の、柔かい波を打たせて這入^はっている。丁度向いの所にミヨンヒスベルヒ山^{やま}と、その巔^{いただき}にある城とが、はつきりした輪^{りん}廓^{かく}をなし、空^{そら}にえがかれている。明りなぞを点^つけるには及ばない。部屋の床^{ゆか}の上には、銀色の月の光が、幅の広い帯のようにさし込んでゐる。ただ部屋の隅々だけが暗いのである。一つの窓の側^{そば}に腕^{うで}附^{つき}の椅子^{いす}が置いてある。男はそれに身を投げ掛けて、女を力強く引き寄せた。そしてキスをする、女もキスをし返した。丁度公園では歌が停^やんだところであつたが、聴衆がひどく喝^{かつ}采^{さい}して止^やまない、同じ歌がまた始めから繰り返された。

突然女が立ち上がつて、窓の方へ走つて行つた。男は跡から追い掛けた。

「どうしたのだ。」

「よしましようね。」

「なぜ。」男は足踏みをした。

「だつてあなた。」女はあやまるように手を組み合せた。

「よすのだつて。そんなら己^{われ}におとなしくして、死ぬる日を待てというのか。」齒^く喰^くいしばつて、その間から押し出すような物の言い振である。

「だつてあなた。」女は男の前に膝^{ひざ}を突いて、男の膝を両手で抱^だいた。

男は女を引き上げた。「お前は分らないのだ」と云つて置いて、耳に口を寄せて囁いた。「己はお前が可哀かわゆいのだぞ。もう長くは生きていられないのだから、何も余計な遠慮をしなくつても好いじゃないか。己はもう心配をしながら一年も生きていようとは思わない。それよりは二三週間でも、二三日でも、一夜よでも二夜よでも好い。己は生活が味いたいの。それと思う事がしたい。そしてその挙句で、お前が不承知でないなら、一しよにあそこへ」男は片手で女を抱えて、片手で窓から下を指さした。そこには河が流れている。唱歌会の歌はもう止んで、河の水音が二階まで静かに聞えている。

女は返事をしなかった。しかし両手で男の頸くびに搦からみ付いた。男は女の髪の毛かの香を吸い込んだ。どんなにか男は女を愛しているだろう。もう二三日でも好いから幸福を享うけたい。そしてその上でどうともなりたい。

四辺あたりが静かになった。女は側で寝ている。合奏はとくに済んでいる。公園から後れて帰る人達ひとたちが、声高に話しながら窓の下を通っている。今卑たかしい高こえ声をして歩いている人達が、さつき好い声で歌つて、人を感動させたのと、同じ人達かと思うと、不思議だと男は考えた。話声は次第に遠くなつて、跡には訴えるような水音ばかりが聞えている。

二十九

もう二三日で、もう一晩か二晩で好い。それでおしまいにするのだ。しかし女はまだ生きていたのだ。思い切ってくれるだろうか。なに、何も思い切ってくれなくても好い。何も知らずにいても好い。ただその時は、己おれに抱だかれて、今のように入ねいって、それからもう醒さめないばかりだ。そしてそれをたしかめた上で、自分が遣やるのだ。あんなに生きていたがるものに、何も前まえ以て知らせるには及ばない。もし余計な事を知らせたら、己をこわがり出すだろう。そうなると己一人で死ななくてはならない。それは如何いかにもつらいのだ。事に依よつたら今直すぐに実行しようか知ら。あんなに好く寐よているのだ。この手に力を入れて、あの頸くびをうんと抑えれば済むのだ。しかしそれは馬鹿ばかげている。まだ愉快に暮せる時間が残っているじゃないか。いつ最後の時が打つという事が、己には分かるに違いない。こう思つて男は女の顔を眺めていた。そしてその心持ちは生殺の自由になる女の奴隷を搔かき抱いだいているようであつた。

フェリックスは決心が付いたので、安心した。当分の間あいだは、マリイと町を散歩していて、

余所の男の目が、マリイに注がれているのに気が付くと、嘲るような微笑がフェリックスの唇の上に漂った。馬車に乗って一しよに散歩している時や、夜一しよに横になっている時、男はこれまでになく、この女を我が物にしているという、自慢したいような心持ちになった。ただ一つ気に掛かるのは、一しよに死ぬるにしても、女は自由意志で死ぬるのではないという事であつた。しかしそれもいつかはこちの思い通りになるらしい徴候が見えているように思つた。男の愛情が如何に猛烈に発現しても、女は拒む事を敢てしない。この頃の夜のように、女が控え目でなく自由になつていた事は、これまでにない。この様子では、「さあ、きよう一しよに死ぬるのだぞ」という事が、近い内に出来そうである。しかしそれを言い出す事を、男は一日一日と延ばしている。どうかすると夢のように、こんな光景が目に見え浮ぶ。自分が短刀を手にとって、女の胸を刺していると、女は最後の呼吸をしながら、自分の手にキスをしてくれるのである。折々もう言い出しても好い頃だろうと思つては、また疑念を起すのである。

ある朝女が目覚めて見ると、男が側にいないので、ひどく驚いた。起き上がって見ると、男は窓の側の腕附の椅子に腰を掛けている。顔は真っ蒼で、頭をうなだれて胸のところのシャツを明けている。女は堪えられない程心配になつて、飛び起きて、男の側へ行

った。「あなたどうなすったの。」

「なんだ。」男は目を開いた。そして手で胸を抑えて、うめいた。

「なぜわたくしをお起しなさらなかったの。」

女はこう云つて手を組み合せた。

「なに、もう好くなつたのだ」と男は云つた。女は急いで寢台の所へ行つて、掛布団を卸して、それを男の膝の上に掛けて遣つた。「どうしてあなたここへいらつしやつたの。」

「なんだか己にも分らない。大方夢を見たのだろうよ。なんだか頸を締め付けられたように、息が出来なくなっていたのだ。お前の事なんぞはまるで考えなかった。それからこの窓の所へ来ていたら、好くなつたのだ。」

三十

女は急いで着物を着て、窓を締めた。外には厭な風が吹き出していて、見ているうちに空が灰色になって、細かい雨が降つて来て、厭にしめっぽい空気を吹き込んで来たからである。夏の夜の快さが、忽ち消え失せて、灰色の、物悲しい景色になった。夜の明方にな

つて、急に秋が来て、美しい幻の影を破ってしまったのである。

男は落ち着いている。「なぜお前そんな心配げな目附めつきをしているのだい。なんでもないじゃないか。丈夫な時だつて、夢に魘おそわれて飛び起きる事はあるからなあ。」

女は中々安心しない。「ねえ、あなた、御一しよにウイーンへ帰ろうではありませんか。」

「だがなあ。」

「どうせもう夏はおしまいになったのですもの。あの外の様子を御覧なさい。如何いかにも寂れて、悲しげになつていゝではありませんか。それに寒くなると、お体のためにも悪いでしょう。」

男は黙つて聞いている。そして丁度草くたびれ臥た回復期の患者のように、一種の好い心持ちのしているのを、自分ながら不思議に思つていゝ。呼吸は楽である。自分を包围している、一種の疲れた空気が、眠りを催すような甘味を感じさせる。しかしこの土地を立つのが好よからうという事だけは、自分にも分つていゝ。居所の変るのは、なんとなく愉快なようにも思われる。冷たい雨の降つていゝ日に、汽車の中に寝転んで、頭あたまを女の胸に寄せ掛けていゝのは、好い心持ちだろうと想像して見る。「好いや。立つ事にしよう。」

「きょうでも好いでしょうか。」

「好いとも。お前の都合が好いなら、正午の急行で立つても好い。」

「お疲れが出はしますまいか。」

「なんの詰まらない。草臥る程の旅ではないじゃないか。それにお前が万事うま旨く世話をしてくれるだろうから。」

思いの外たやす容易く、男が立とうというので、女は喜んだ。直ぐに荷物を片付ける。宿屋の勘定をする。馬車を呼びに遣る。電話で停車場へ言つて遣つて、借切りの室しつを取る。その内男も着物を着替えたが、部屋より外そとへは出ないで、午になるまで長椅子ながいすの上に寝転んで、折々ほほえ微笑んだ。その間々あいだあいだにはうとうとしていた。そんな風に半分眠つたようになって、折々女の方を見ては、心の内に嬉うれしく思った。この女はいつまでも己われに付いているのだ。それから死ぬる時も一しよに死ぬるのだと思つて見るのである。「もう近い内だ。」声に出さずにこうつぶやいたが、心の底にはそんなに早く死ぬるようには思わなかつた。

その日の午後には、午前に想像したように、男は汽車の中で、楽に横になつて頭を女の胸にもたせて、足の上にはシヨオルをひろ拡げて掛けていた。鎖とぎしてある汽車の窓から外を見

れば、空は鼠色^{ねずみいろ}で、細かい雨が降っている。立ち籠^こめている霧の中を見込むと、時々岡^{おか}や村が近い所に見える。電信柱が背後^{うしろ}へ走^{はし}って行く。電線が高くなったり低くなったり、跳^{おど}るようにして跡へ消えて行く。折々停車場で列車が留^{とど}まるが、寝ているのでプラツトフオオムに立^たっている人は見えない。人の足音や話声や、鐸^{すず}の音や、相図^{あず}の笛が聞えるだけである。最初は女に新聞を読ませて聞いたが、声が嘎^かれて来たので止^やめさせた。二人とも都の住いへ帰るのが嬉しかった。

三十一

晩になった。雨は相変らず降っている。男は考えを極^きめようと思^{おも}つて見たが、どうも輪^り廓^{んかく}がぼやけて来て、思想^{しゆ}が纏^{まと}まらない。兎^とに角^{かく}こんな事を考えた。ここに大病になった人間が寝^そている。そいつは夏の間山地にいるのが好^いいというので、そこへ行^いつていたのだ。その側^{そば}に女がいる。女は長い間誠実に看病をしてくれた。しかし今はもう倦^うんでいる。大層女の顔^{あお}が蒼^{あお}く見える。しかしこれは明りのせいかも知れない。そうだ。もう明^つりが点^ついている。外は真^まつ暗^{くら}だ。もう秋だな。秋というものは静かに物悲しいものだ。今夜はいつ

もの住いの部屋へ帰るのだ。あの部屋に這入^{はい}つて見たら、元^{もと}のようで、一旦^{たん}そこを出て山になんぞ行^いていなかったのも同じであろう。女は眠^ねっているな。こんな時は眠^ねっていて、物を言^いつてくれない方が好い。あの唱歌会の連^{れん}中^{じゅう}がこの汽車に乗^のっているだろうか。己^{おれ}は草臥^{くたび}れてはいるが、病氣^{びやうき}なようではない。この列車には己よりひどい病氣^{びやうき}になつてゐるものが幾^{いく}らもいるだろう。ああ。ひっそりして好いなあ。一体きよう一日はどうして暮^くしただろうか。あのザルツブルヒの宿屋^{しゆくや}の長椅子^{ながいす}に寝^ねていたのはきようだっけな。あれからはもう大分時^じが立^たっているようだ。時間^{じかん}と空間^{くうかん}が。一体分らないものだ。世界の謎^{なぞ}か。そんなものも、死^しんで見たら解釈^{かいしゃく}が付^つくかも知れない。なんだか耳^{みみ}に旋律^{せんりつ}が聞^{きこ}えて來^きた。あれは進行^{しんこう}している列車^{れっせん}の音^{おと}だ。そのくせそれが旋律^{せんりつ}のようでない。どこかの民謡^{みんぎョウ}だな。ロシアのだろうか。單調^{たんてう}で、しかも好い感じだな。

「もしあなた。」

「なんだい。」男は自分の前に來^きて、立^たつていて、頬^ほを撫^なでてくれる女を見た。

「好^よくお休みになつて。」

「なにを言^いいに來^きたのだい。」

「もう十五分^{じふごふぶん}で着^ききますよ。」

「嘘うそのようだなあ。」

「まあ大層好くお休みになったようね。きつとお体のために好いのだわ。」

女は荷物を纏かめている。列車は相変らず闇やみを穿うががつて走っている。二三分毎ごとに汽笛おとの音が聞える。窓硝子がらすを通して、ぱつと明るくなつて、直すぐまた消える火の光が見える。列車が都近くていしやじようの停車場を通過するのである。

男は起き直つて、「あんまり長く横になつていたものだから、却かえつて草臥くたびた」と云いつて、腰掛すわの隅に坐つて、窓の外を見ている。もう遙か向うに明りの点いたウイインの町が見える。列車は速度をゆるめている。女は窓を開けて、体を前屈まえかがみにして外を見ている。車がホオルに這入った。女は手招きをした。そして男の方へ向いて、「来ていらっしやいますわ」と云つた。

「誰たれが。」

「アルフレットさんですわ。」

「そうか。」

女はまた手招きをした。男は立ち上がつて、女の肩越しに、プラットフォオムを見た。なるほど友達ともだちの医学士が窓に近づいて来た。マリイと握手した。それからフェリックス

にこう云った。「帰って来たね。」

「どうして来てくれたのだい。」

女は急に詞を挟んだ。「わたくしが電報でお知らせしましたの。」

学士が云った。「君はひどいよ。手紙なんというものは書かない流義と見えるね。まあ、
為方がない。さあ、出て来給えよ。」

「僕はあんまり長く眠ったもんだから、まだ頭がぼんやりしている。」フェリックスは、
車室から降りながらよろめいたので、こう云って微笑んだ。

学士は病人の肘をつかまえた。そうすると女が、いつものように肘に縋ると見せて、片
々の肘をつかまえた。

学士が云った。「二人とも随分草臥ているだろうね。」

「わたくし本当にがっかりしていますの。」女はこう云って、それからフェリックスの方
に向いて。「ねえ、あなた、汽車旅は随分疲れるものでございますわね。」

一同ゆるゆる停車場の石段を降りた。その間女は学士と目を見合せようとするのを、学
士は除けるようにしていた。

石段を降りて、学士は馬車を呼んだ。そしてフェリックスにこう云った。「まあ、君が

無事で帰ったのを見て安心したよ。またあすの朝君の所へ行くからね。」

「僕はぼんやりしている」とフェリックスは繰り返した。それから馬車に乗ろうとするのを、学士が手を出して助けそうにしたので、「そんなに意気地がなくなつてはいないよ」と云つて、一人で車に乗った。続いて女が乗るのを、手を貸して乗せた。

三十二

女は車の窓から手を出して、学士と握手をして、「そんならあしたどうぞ」と云つた。

その女の目附めつきが如何いかにも心配げなので、学士はわざと微笑ほほえんだ。「あした早く行つて、君方きみがたと一しよに朝食あさしゆくを食べよう。」

馬車は停車場ていしやじようを離れた。学士は真面目まじめな顔をして、暫く見送しばらつていて、「気の毒だなあ」と独言ひとりごとを云つた。

翌朝医学士が急いでフェリックスの住いへ来て見ると、マリイが戸口に待ち受けていた。「ちよつとお話しがございますの。」

「まあ、先きへわたしに診察をさせて下さい。その上でお話しをした方が、都合が好よさそうに思うのですから。」

「いいえ。ただ一つ申して置きたい事があるのです。あの方の体がどんなになつていても、どうぞそれを言つて聞かせないで下さいまし。」

「なに。そんなに心配しなくつても好いのですよ。それ程悪くなつてはいまいから。まだ寐ねていますか。」

「いいえ。もう目を覚めているのです。」

「昨晚どうでした。」

「さようでございますね。午前四時頃じゅうまで、ぐつすり寐ねて、それから好く寐ねられなかつたのです。」

「まあ、わたしが診察をする間あいだは、あなたははずして置いて下さい。あなたが機嫌を好くして、あの男の気分を引き立たせて遣やらなくてはいけないのです。ですからちよいとの間避けていて、わたくしに任せて置いて下さい。」こう云つて微笑みながら握手して、一人寝ね間まへ這入はいつて行つた。

フェリックスは着布団を腮あごのところまで掛けて寝ていて、友達ともだちの這入はいつて来たのを見

て、合点^{がてん}合点^{がてん}をした。

学士は寝台^{ねだい}の縁^{ふち}に腰を掛けて云った。「内へ帰って安心しただろうね。大ぶ様子が好いようだから、持病のメランコリイなんぞは山に置いて来たのだろうね。」

「まあ、そんなものさ。」フェリックスは真面目で云った。

「君、ちよいと坐^{すわ}って見ないか。こんなに僕が早く来たのは、医者として職務を尽しに来たのだからね。」

「さあ、見てくれ給^{たま}え。」フェリックスは平気な様子で診察を受けた。

診察が済んでから、学士は二つ三つ何か問うて、返事を聞いて、こう云った。「まあ、この位なら満足しなくてはならないね。」

「おい。もう狂言はよしてくれ給え。」こういうフェリックスの顔は不機嫌であつた。

「君こそそんな馬鹿^{ばか}げた様子をするのをよし給え。兎^とに角^{かく}真面目に病氣と闘わなくてはならないのだ。君の方では健康になろうという意志を堅固にしていなくてははいけない。成行き次第だなんぞという料^{りよう}簡^{けん}になられては困るよ。そんな態度は、第一君の柄にない。」

「そんならどうすれば好いというのだい。」

「先^まず二三日はそうしていて、起きないのだね。」

「そんな事か。君が言わなくても僕は起きたくないのだ。」

「それは丁度好いというものだね。」

フェリックスは少し調子付いて来て、こう云った。「ただ一つ僕には分らない事があるよ。それはきのうの始末だ。君、分かるなら説明してくれ給え。どうも僕には何もかも夢のようだがね。汽車で帰って来たのも、停車場に着いたのも、この寢床に這入ったのも。」

「それになんの不思議があるものか。君だつて人間以上の力は持っていない。誰でも草臥切った時はそんな事があるものだ。」

「いや。そうでないよ。きのうのような疲れようはこれまで無かった。きようだつて僕は疲れているが、頭ははつきりしている。実はきのうの方が却かえつて愉快であつたのだ。しかしそれを今から思つて見ると、気味が悪くなるね。またあんな風になるだろうかと思うと。」

三十三

こう云つているところへ女が這入はいつて来たので、フェリックスが女に言った。「おい。」

アルフレット君に礼を言ってくれ。お前は看護婦を仰付けられたのだ。なんでも己はきようからはこう遣つて寝ていなくてはならないのだそうだ。まあ、これが己の死ぬる寢床なのだから、その積りでいて貰おうか。」

女がひどくつらそうな顔をして聞いているので学士が云った。

「馬鹿を言うのを真面目で聞いているはいけませんよ。ただ二三日こうして寝ているが好いとわたくしが云つたのです。乱暴に起きないように、あなたは氣を付けて下されば好いのです。」

「ふん。君は知るまいが、僕に付いていてくれるこの女は、大した天使だぜ。」フェリックスは皮肉な調子で女を褒めた。

学士は色々養生の爲方を話して、女に監督を頼んだ。それからフェリックスに言つた。「そこで君にきよう約束をして置くよ。僕は隔日に医者として見舞いに来る。それで沢山なのだ。その外の日に来た時、病氣の事を言いつこなしだよ。僕はいつもの通り、友達として話しに来るのだからね。」

「いやはや。君は豪い心理学者だよ。しかしそんなければ外の病人に遣つて見せ給え。そんなあさはかな手には、僕は乗らないからね。」

「困るね。僕は男子が男子に話しをする積りで言っているのだ。好く聞き給えよ。なるほど、君は病氣だ。しかし旨く撰生をすれば直す事の出来るのも事実だ。僕は何も加減をして物を言うのではない。」こう云つて置いて、学士は立ち上がった。

フェリックスは疑い深い目附をして、学士を見送った。「まるで本当の事を言っているように見えるから可笑しい。」

「信ぜないのは君の勝手だよ。」学士は手短にこう云った。

「今のは拙かったね。大病人に荒い詞を使つて氣を引き立てるなんていうのは、古い手だ。」

「そんならあした来るよ。」学士は戸の方へ歩いて行つた。そして女が付いて出そうにしたので、「いなくてはいけません」と、命令するように囁いた。

女は学士の出て行つた跡の戸を締めた。それから顔に微笑を見せて、縫物を取り出して、卓の側へ寄つた。

フェリックスは女の様子を見ていて、こう云った。「おい。ここへ来ないか。そうだ。お前は大した親切な女だね。」この優しい詞を、苦々しい、鋭い調子で云つたのである。

帰つてから暫くの間はマリイはフェリックスの床の側を離れずにいて、親切に看病した。その間女の様子は、落ち着いて、わざとらしくなく晴やかに見えていた。勿論病人の気を落ち着けるようにと心掛けていたのである。また実際時々は病人もそれを見て心持ちを好くしていた。しかしその反対に、女の落ち着いた様子に反感を起す事もある。何か今新聞で見た事を話したり、病人の様子がよく見えると云ったり、病気が直ったらどんな生活をして見ようと云ったりする時、フェリックスは不機嫌になって、「どうぞもう己に構わないでいてくれ」という事もある。

医学生は毎日来た。一日に二度来る事もあった。しかし友達の体の事などは少しも話さない。両方で知っている人の噂をしたり、病院で見て来た話しをしたりする。稀には美術文学の話もする。そしてなるたけ病人に多く物を言わせないように力めている。そんな風に恋人と友達とで、病人を気楽にならせようとしているので、病人も体の好くなる時が来るだろうかと思わずにはいられないようになる事がある。重い病人に対して、側にいるものがこんな狂言をするものだという事は、無論病人の心に分っている。狂言だ狂言だと思ひながら一しよになつて話している。しかしその内にいつとなく引き入れられて、自分がまだ何年も生きているはずと思うらしい詞が、自分の口から出る事がある。

三十四

そういう時は病人は反省して、死に掛かった病人というものは、却^{かえ}つて気分が好^よくなつて、健康になる夢を見るものだという話しを思い出す。それからその道理から推して、自分の気が鬱^{うつ}したり、心配が起つて来たりするのを、却^{かえ}つて気分的好^いいよりは有望な徴候だと思ふようになる。さてそんな論理は余り間違つていると思うので、とうとう病氣の未来なぞというものは知れないものだ、たしかめられないものだという結論に到着する。

フエリックスはまた本を読み出した。もう小説は面白くなく、読む内に厭^あきて来て、就^なかんずく中^{かんずく}作中の人物が榮華をしたり、色々に活動するのを見ると、癪^{しゃく}に障^{さや}つて来るのである。そこで哲学書を読む事にして、マリイに言い付けて、本箱からシヨペンハウエルとニイチエトを出させた。暫^{しばら}く読んでいる内は、その説いている道理から平和を見出^{みだ}す事も出来た。しかしそれが長くは続かなかつた。

ある晩医学士が来た時、病人は丁度シヨペンハウエルの一巻を布団の上に伏せて、厭^{いや}な顔をして空^{くう}を見ていた。側^{そば}には女^{おんな}が手為^{てしごと}事をしていた。

「君、僕はまた小説の方を読もうと思う。」病人は学士の顔を見て、激したような調子でこう云った。

「どうしたのだ。」

「小説なら、兎に角嘘だという事を白状して書いているのだ。立派な詩人が上手に書いたのでも、下手な素人が拙く書いたのでも、それだけは同じ事だ。それと違って、この先生なんぞは氣取っているのだ。」こう云つて伏せてある本の方を見た。

「いやはや。」

病人は床の上で起き上がった。「哲学者なんという奴は、自分が神のように丈夫でいて、人生を厭うだの、平気で死を待っているだのというのだ。そういうながらイタリヤで散歩をしていて、賑かな生活に身の周囲を取り巻かれていっているのだ。僕はそういうのを氣取っているというのだ。そんな先生を部屋の中へ閉じ込めて熱を出させて、息苦しくして遣つて、お前は来年の一月一日から二月一日までの間に土の下に埋られるのだといって聞かせて、其上でどんな哲学を説き出すか、聞いて遣りたい。」

「よし給え。そんなパラドックスな洒落は。」

「君には分らないよ。分るはずがない。僕は読んでいると胸が悪くなる。みんな氣取りや

だ。」

「そんならソクラテスなんぞはどうだ。」

「あいつも狂言をしていた奴だ。あたりまえの人間なら、未知の事物に対しては、恐怖を感じなくてはならない。旨く行つたところで、その恐怖を隠しているに過ぎない。僕は正直な話をするがね、一体これまで歴史に書いてある臨終の心理というものは皆偽物だ。それは人に名を知られている、歴史上の人物は、後世の人のために、狂言をしなくてはならない義務があるように思っていたからだ。僕なんぞでさえそうだ。僕が何をしていると思う。こうして、もう僕に対してなんの利害得失をも有せない事柄を、君なんぞと話しているのも、可笑しいじゃないか。これはなんというものだろう。」

「もうよせよ。殊にそんな無意味な事をいうものじゃないよ。」

三十五

「僕だってやはり狂言をする義務を有しているように思つて、こんな事を饒舌るので、實際を言つて見れば普通の人間の夢にも知らない、非常な恐怖に僕は襲われているのだ。そ

れと同じ事で、英雄だって、哲学者だって、恐怖していたには相違ない。ただあいつらは狂言が上手だったのだ。」

「もうおよしなさいよ」と女が頼むように云った。

「大方お前なんでも、アルフレット君と同じように、平気で死を向うに見る事が出来ると思つてゐるのだらう。それは死というものを知らないからだ。犯罪者になつて死刑の宣告を受けて見るが好い。それか、己おれのような体になつて見るが好い。その上でなくては話しは出来ないのだ。盗坊どろぼうは平氣な顔で絞首台へ連れて行かれる。大哲学者は毒藥を呑のみながら、旨い文句うまを考える。革命を起して、失敗した英雄は、銃の先を胸に突き付けられて笑う。そういうのはみんなごまかしだ。己には好く分よかっている。平氣を装つたり、笑つたりするのは氣取るのだ。なぜというに死に対しては非常な恐怖を抱いだいているに相違ないからだ。死の恐怖は死そのものと同じように、自然の現象だ。」

学士は静かに寢台ねだいの縁ふちに腰を掛けて聞いていた。そして病人が饒舌ねたり止やんだ時こう云つた。「第一君そんなに長く饒舌ねたつてはいけない。殊にそんな大きい声を出してはいけない。それから君のいう事は飽くまで馬鹿ばかげている。それはひどいヒポコンドリーというものだ。」

「それにあなたきようなんぞはそんなに御様子が好いじやありませんか」と女が口を出した。

「君、ほんとにあんな事を思っているのだろうか」と、病人は学士に向いて云った。「どうだろう。こいつに君が本当の事を言つて聞かせてくれたら。」

「ところがほんとの事を言つて聞かせなくてはならないのは、マリイさんじゃなくつて、君なのだ。しかし君は何を言つたつて、きようは聞きそうでないから、僕は止めにして置く。まあ、二三日立つて、その間^{あいだ}今の^{ながえんぜつ}ような長演説を慎んでいる事が出来たら、君も起きられるようになるだろう。その上で君にしっかり言つて聞かせる事があるよ。」

「ふん。どうも君の腹の中がこんなに見え透かないといいのだがなあ。」

学士は「もう好いよ」と云つて置いて、女の方に向いた。「あなたもそんな困つたような顔をしていないが好いのです。この先生だつて今に物の分かる時も来るでしょう。それはそうと、なぜ窓が一つも明けてないのですね。外はひどく好い秋日和ではありませんか。」

女は立つて窓を明けた。丁度日の暮れ掛かる時である。外から吹き入れて来る風が如何^{いかに}にも好い心持ちなので、女は暫く^{しばら}その風に吹かれていたように思った。そこで窓の側^{そば}に

立ち留まつて、頭を外へ出して見た。その時女の心持ちは、病室を出てしまつて外に一人
でいるようであつた。もう何日もこんな好い心持ちのした事はない。それから頭を引つ込
めると、病室の、鈍い空氣が顔を撲つて胸が詰まるような氣がした。見れば病人と学士と
で何か言つてゐるが、詞は聞えない。しかしそれを聞きたくも思わなかつた。そこでまた
頭を窓から外へ出した。往来は人けが絶えてひっそりしている。近い大通りから馬車の通
る音が微に聞えるばかりである。その内窓の下の人道を散歩する人がちらほら通る。向い
の家の門口には、女中が二三人出て、何か話して笑つてゐる。向いの家の窓が明いて、
若い上さんが、自分と同じように顔を出して外を見る。マリイはそれを見て、なぜあのお
上さんは散歩に出ないのだらうと思つた。そしてどの人もどの人も自分よりは幸福なよう
に思つて羨ましがつた。

三十六

爽かな九月の天氣が来た。日は早く暮れるが、風もなく、寒くもない。
マリイは隙があると、病人の側を離れて、開けた窓の前に椅子を据えているのが癖にな

る。殊に病人の眠っている間は、何時間もそうしている。なんだかがつかりしたようで自分の境遇がどんなものだという事を、はつきり考えるのが厭である。そればかりではない。何事をも考えるのが厭である。過去の事も思わず、未来の事も思わずに、何時間もぼんやりしている事がある。目を大きく明いて空を見詰めて坐っている。ただ外から気持ちの好い風が這入って、自分の額を吹いてくれれば、それで満足に思っている。その内病人がうめくので驚いて見に行くのである。しかし自分の病人に対する同情が次第に薄らいで来る。憐憫が變じて神経過敏になつて、苦痛が變じて恐怖と冷淡との混合物になつて来る。しかし自分が悪い人になつたとは思われない。いつか学士が、あなたは天使のようだと言つたが、そういう褒詞を受けて恥じなくてはならないような気はしない。今のうちに冷淡に傾いて来たのは、それは疲れたのである。極端に疲れたのである。もう外へ出なくなつてから十日以上になる。なぜ出ずにいるのだらうと考えて見る。そうすると病人をおこらせまいと思つて出ないのだという事が、新しい発明のように心に浮ぶ。無論側にいるのがつらいとは思わない。あの人を愛している事も決して昔に劣らない。ただ自分は疲れたのだ。それも無理ではない。こう思っている内に、外へ出たいという要求が次第に切になつて来る。これを無理に我慢しているのは、子供らしい事ではないか。病人だつて少し考

えて見たら分かりそうなものである。一体もし病人がおこりはすまいかと思つて、こんなに久しく出ずにいたのは、随分病人のために尽していたというものではあるまいか。自分が病人を深く愛している証拠ではあるまいか。

女はこんな事を考えている内に、手に持つていた縫物を床の上に取り落してちよいと寝台の方を見た。もう寝台のあたりは薄暗くなっている。きようは病人も落ち着いている。今眠つたところである。こんな時にそつと出て行つたら、病人は知らずにいるだろう。ちよいとあの梯子を下りて、あの町の角を回れば、賑かな公園に出られる。それからあの都の中心を輪なりに繞っている大通りに出て、電燈の沢山点いている、オペラ座の前を通る。あの辺はいつも賑かである。その賑かさが如何にも恋しい。しかしそんな事が出来るのはいつだろう。無論病人が直つてしまえば出来るだろう。あの人が病氣でいては、往来や、公園や、大勢の人を見たつて詰まらない。

女はとうとう出ずにいた。そうして寝台の側へ椅子を持つて行つて病人の手をつかまえて涙を飜した。その涙は、もう側にいる男の事を考えなくなつても止まらなかつた。

その日の午後であつた。学士が来て見ると、病人がこの頃になく好い血色をしてい

た。それを見て学士が云った。「この塩梅あんばいだと、もう二三日立ってから起きられそうだね。」

「そうかね」と病人は云ったが、何事に依らず友達ともだちの言う事を猜疑さいぎの耳を持つて聞く癖が付いているので、嬉しくも思わなかった。

学士は、卓たくの側にいるマリイに向いて云った。「あなたも少し血けつ色しよくが好くつても好いね。」

その詞を聞いて、病人も女の顔を見たが、なるほど目立って色が悪い。一体この頃病人は、女の親切を感謝したいような心持ちになると、わざとその心持ちを排斥する癖が付いている。女の犠牲的精神が幾分か偽物ぎぶつらしく思われて、その忍耐の表情が白々しく思われたのである。そこで女がいつその事じれったがつて来れば好いと思う。いつか詞ことばか科こなで、女が薄情な根性を曝露ばくろしたら、その時面と向つてそう云つて遣やりたい。もう疾とうからお前が面かむを被かつていいるという事は知っていた。己おれは胸が悪かった。どうぞ己の側を退のいて己に落ち着いて死なせてくれと云つて遣りたい。

女は学士の詞を聞いて、少し顔を赤くして微笑ほほえんだ。「わたくしちつとも弱りなんかしていませんわ。」

三十七

「いや。そうではありませんよ。フェリックス君だって、自分が直って、あなたが病気になるのは困るでしょう。」こう云いながら、学士は女の側へ歩いて行った。

「だってわたくし本当になんともないのでございますもの。」

「一体あなたはちつとも外へ出ないのですか。」

「出たくなありませんもの。」

「おい。フェリックス君。マリイさんはまるで君の側を離れっこなしだと云うぜ。」

「そうだろう。御承知の通り天使だからね。」病人は平気でこう云った。

「しかしね、マリイさん、それはあまり馬鹿^{ばか}げていますよ。そんなにして無駄な骨を折るのは、子供らしくて、なんの用にも立ちません。是非折々は外へお出^でなさい。わたしがその必要を言明しますね。」

女はかすかに微笑^{ほほえ}んだ。「なぜそんなに仰^{おつし}やいますの。出たくなけりやあ好^いいじゃありませんか。」

「それは出たくても出たくなくても同じ事です。一体その出たくないというのが、もう悪徴候です。是非きようは出なくてはいけません。そして一時間許り公園のベンチに腰を掛けておいでなさい。それとも厭いやなら、馬車を雇ってプラアテルあたりへでも行つておいでなさい。あの辺へんはこの頃ごろ面白い時節ですから。」

「でも。」

「でもなんぞと云つたつて駄目です。そんな風に続いて遣やつていて、余り天使になり澄すと、体が台なしになりますよ。まあ、ちよつとその鏡で顔を御覧なさい。実際大変な事になるのです。」

学士がこう云つた時、病人はちよいと胸を衝つかれたような心持ちがした。抑えた怒が腹の中を掻かき交せている。なんだかこの会話をしている時、マリイの顔に、人の憐あわれみを乞こうような、自覺したる忍耐の表情が見えたように、病人は感じた。そして動かすべからざる真理でもあるように、この女は己おれと一しよに苦勞すべきはず、己と一しよに死ぬべきはずの女だという思想が、頭の中をひらめき過ぎた。女が体を台なしにする。無論それで好いじゃないか。己が死に向つて進んで行くのに、あいつが薄赤い顔をして目を赫かがやかしてゐなくてはいらないというのだろうか。一体アルフレットだつて女がそうすべきだと思ふの

だろうか。それとも女までが自分にそんな考えを。

学士がさつき云った事を繰り返して、女に勧めている間、病人は女の顔の表情を一しう懸命^{うかが}覗^{のぞ}っていた。とうとう学士は女に承諾させた。それはきょうの内に外へ出るというのであった。学士に言わせると外へ出るのも、看病すると同じように、女の病人に対して尽すべき義務の一つなのである。

「あんな事を言っているのは、己というものを度外視しているのだ。どうせ直らない病人だということで、構わずに死なせる気なのだ。」病人はこう思った。そして学士が帰って行く時、ひどく冷淡に握手をした。心のうちに学士を憎んでいるのである。

女は学士を部屋の入口まで送ったきりで、直^{すぐ}に病人の所へ帰って来た。病人は唇を堅く閉じて、額に深い怒りの皺^{しわ}を寄せていた。その心持ちがマリイには分った、底から好^よく分った。そして男の上へ身を屈^{かが}めて微笑んだ。男は溜^{ため}息^{いき}を衝いた。それから何か言おうとした。何か非常な侮辱を覲^{てきめん}面に与えて遣りたいのである。そうするのが当然だと考えられるのである。女は優しく男の髪を撫^なでて遣って、顔には忍耐に慣れた、疲れた微笑^{ほほえみ}を續けて、口を側に寄せて、親切に囁^{ささや}いた。「わたくし行かなくなつてよ。」

男は黙っていた。その晩は夜の更^よけるまで、病人の側に坐^{すわ}つていて、女はとうとう椅子^{いす}

に掛けたまま眠ってしまった。

翌日学士が来た時、女は話しをしないように避けていた。しかし学士はきようは女の顔なんぞに構わない様子で病人とばかり話しをしていた。

学士はもう程なく起きて好いという事を、きように限って言わずにいる。病人もそれを問う事を憚っている。一体病人は、きようは物が言いたくない。いつもになく口不性である。そして学士が暇乞いをして帰るのを、嬉しく思った。

三十八

病人は女にも不機嫌な、短い返事ばかりしている。午後になって何時間も黙っていた跡で女が問うた。「きようは御気分はどんなのですの。」

「どうだつて好いじゃないか。」病人は両手を頭の上で組合せて、目を瞑って寐入ってしまった。

女は暫く側で病人の様子を見ていた。その内頭がぼんやりして、夢見心地になって来た。

暫くして女がふと心付くと、好く寐た跡のように爽快な感じがからだじゅう体中に漲みなぎっていた。

女は立ち上がって、卸してあつた窓掛を巻き上げた。なんだか近い公園から、遅れ咲きの花の香かが、この狭い町へ迷い込んで来たようで、部屋に這はい入って来る空気に、いつにない美しい匂においがある。女は病人の方を振り返った。病人はさつきと同じように寐ていて、呼吸も静かである。これまではこんな時に、女はきつと一種の感動を起して、この部屋を離れる気にならずに、鈍い沈んだ心持に体を任せていたのである。それがきようはなんにも感ぜない。そして病人の眠っているのを喜んで、心の内に何の争鬭をも起さずに、いつも平気でする事でもあるように、一時間外へ出て来ようという決心をした。

女は足を爪つま立てて台所へ出て、女中に病室へ行っているように差図した。それから帽子と蝙蝠傘こうもりがさとを持って、飛ぶように梯子段はしごだんを降りた。

女は往来へ出た。足早に狭い町を二つ三つ通り過ぎると、公園である。両側に大きい木や小さい木が植わっていて、頭の上には薄青い空がひろがっている。何もかも久しく恋しく思っていた景物ばかりである。

女はベンチに腰を掛けた。同じベンチにも、近所にある外のベンチにも乳母や子守が掛けている。並木の下では子供が遊んでいる。その内次第に暗くなって来るので、もう遊び

も末になったと見えて、女^{おんなたち}達はそれぞれ子供を呼んで、手を引いて公園を出て行つた。とうとうマリイは一人になった。ちらほら人が通り過ぎる。男の中には、ちよつと振り返つてマリイを見て行くものもある。

とうとう外へ来たのである。一体どうしたというのだろう。丁度こういう時、人に邪魔をせられずに、自分の現在の地位を見渡して、好く考えて見なくてはならないと、女は思つた。自分の思想を、はつきりした詞^{ことば}に直して、口の内で言つて見たいのである。

わたしがあの人の側にいるのは、あの人を愛しているからである。側にいなくては気が済まないから側にいるのだ。そうして見れば犠牲になつていいるというものではない。さてこれからどうなるのだろう。いつまでこれが続くだろうか。どうせあの人は助からない。しかし末はどうなるのだろう。いつかあの人と一しよに死のうと思つた事もある。それになぜ今はこんなに余^よ所^そ余^よ所^そしくなつてゐるのだろう。

どうもあの人は自分の事ばかり思つてゐるようだ。今でもわたしと一しよに死にたいのだろうか。こう思うや否や、きつと一しよに死ぬる積りであるのだという断案が、はつきりと下された。しかしその時の男の姿は、永遠に愛人を側に寝かしていたいという優しい青年の姿ではなかつた。意地悪く、嫉^{ねた}み深く、一旦^{たん}我物にした女だからというので、無理

に引き摺^ずつて連れて行く人の姿が見えたのである。

その時若い男が一人来て、マリイの側に腰を掛けて何か言った。女はうつかりして、「なんです」と問い返した。しかし直^すぐに気が付いて、立ち上がって、足早にそこを逃げた。

公園を歩いている間、出逢^{であ}う人の自分を見るのが不快であった。例の輪形^{わなり}になった大通りへ出て、馬車を呼んで、そこらを散歩するように歩けと云い付けた。

日が暮れた。女は馬車の隅に、楽に身を寄せて、車の心地好く滑って行くのを喜び、夜の薄明りと、ひらめく瓦斯^{ガス}燈の明りとの間を出没する、種々の事物の移り変わるのを眺めて楽しんだ。九月の、天氣の好い晩なので、大勢の人が散歩に出ているのである。

三十九

市民公園の前を通る時、中から爽かな軍樂の音が聞えた。マリイはザルツブルヒで合奏を聞いた晩の事を思い出した。そしてこの周囲^{しゅうい}の事物が皆^{みな}無常な無価値なもので、それを擲^{なげ}つて死ぬるのは、なんでもないと思つて見ようとしたが、どうもそれは出来なかった。

自分の心に沁^しみ込んで来る心地好^よさを忘れようとしても、忘れられなかった。なんだか愉快で溜^たまらない。あそこには電気燈の白く照っている劇場がある。あそこには議事堂前の広場の並木の間から、人が暢^{のんき}気らしく往来を歩いて来る。あそこには珈^コ琲^オ店の前^{フィ}に大勢の人が腰を掛けている。この色々な人は心配なんぞはなさそうに見える。事に依^よつたら全く心配はないのかも知れない。柔かい、暖かい空氣が顔に当る。こんな心持の好い晩を、生きていて何遍でも味う事が出来る。その外天氣の好い夜昼を何千度^{たび}でも楽しんで過^すごす事が出来る。健康の喜びの感じが体^{からだ}中の脈^{じゆう}々を流れて通る。この色々なものが総^{すべ}て愉快に感ぜられる。

一体永い間死ぬるほどの疲れに体を委^{ゆだ}ねていたものが、たった何分間かこんな楽^{らく}をしているのが、不都合だというべきだろうか。自己の存在という事を自覚するのが、当然の權利ではないだろうか。自分は健康である。年も若い。千百の泉から一時^じに人生^{ようこび}の喜^{よろこ}びが流れ出て、自分の上に注^{かぶ}ぎ掛^さかって来るのである。これは自分は呼吸をしているという事や天が自分の上に覆^{かぶ}っているという事と同じように自然である。それを恥^はじなくてはならないだろうか。

マリイはふと病人の事を考えた。もし奇蹟^{きせき}があつて、あの人^{ひと}が直^{ただ}つたら、自分は無論あ

の人と一しよに暮すだろう。あの人の事を思えば、優しい、寛恕かんじよして遣りやたい悲哀きげが萌もして来る。そしてもうそろそろあの人の側そばへ帰つて遣らなくてはならない時だろうかと思う。

しかしあの人はわたしの側にいて遣るのに満足しているだろうか。わたしの優しくして遣るのを、難有ありがたく思っているだろうか。なんという毒々しい詞ことばづか使つかいをこの頃ごろはするだろう。なんという憎々しい目附めつきでこの頃は見るだろう。それから接吻せつぶんなんぞはどうしたのだろう。もう接吻という事をしなくなつてから大ぶ久しくなっている。こう思うと同時に病人の唇あはの蒼あおざめて、いつも乾いているのが思い出される。それから額ぬくにキスをして遣ろうかと考える。ああ額は冷たくて、いつも汗ばんでいたつけ。まあ、病氣いというものはは厭いやなものだこと。

マリイは車に背を寄せ掛けた。そして故意に病人の事を思うまいとした。病人の事を思わないようにするには、往来の方を熱心に見なくてはならない。こう思つていつまでも記憶して置かなくてはならないものを見るように、往来の事物の一つ一つに目を付けていた。

フェリックスは目を開あいた。寝台ねだいの側には蠟燭ろうそくが一本弱い光を放っている。その椅い

子の上に、婆あさんが手を膝ひざに置いて、冷淡な様子をして坐すわっている。

「あいつはどこへ行つたのだ。」病人がこういうと、婆あさんはぎりとした。そして「さつきお出掛けになりましたが、直ぐお帰りになるはずですよ」と答えた。

「もうあつちへおいで」と病人が云いった。それでも婆あさんはもじもじしているので、「行つても好よいというじゃないか、用はないのだ」とすげなく云った。

病人は一人になった。これまでにいづれ覚えない不安が襲かつて来た。

女はどこへ行つたのだろう。そう思うと寝台ねだいに寝てはいられないような気がして来た。しかし起きて見ようとするだけの決心も出来なかった。

忽然こっぜんこんな事が頭に浮んだ。「事に依つたらあいつは逃げたのではあるまいか。長く己おれを見棄みすてて行つてしまったのではあるまいか。もう己の側で暮しているのが我慢しくなつたのだ。己がこわくなつたのだ。あいつは己の腹を見破つたのだ。それとも己は寝言でも云つたのではあるまいか。もう大ぶ久しい間、はつきりとは考えなかったが、始終己の心の底には、思っていた事なのだから、いつかそれを声に出して言つたかも知れない。それを聞いて、女は一しよに死にたくないと思つたのではあるまいか。

四十

思想は織るが如くに頭の内を往来する。毎晩発する熱が出て来た。「一体己はあいつに優しい詞を掛けないようになってから、もう大ぶ久しくなる。ただそれだけの事で逃げたのかも知れない。己は癩癩を起したり、猜疑の目附きで見たり、苦々しい事を云ったりした。礼を言わなくてはならないのに、そんな事をしたのだ。よしや感謝して遣らなくても、少くも公平にだけは考えて遣るべきであつたのだ。ああ。ここにいてくれればいいなあ。どうもあいつがいなくては困る。あいつがいなくなるだろうと思うと、胸が燃えるように苦しい。己む事を得ないなら、どんなにもあやまって遣りたい。これからはどんなに自分が苦しくても、一人でこらえて、言わずにいても好い。胸が押し付けられるように切ないのに、微笑んでいても好い。息が詰まって溜らないのに、手にキスをして遣つても好い。己はむちやな夢を見るのだ、よしや夢に何か言つた事があつても、それは熱に浮されたのだと、よく言つて聞かせよう。それから己はお前を崇拜しているのだ。お前になるだけ長生をさせたい、末長く楽に暮させたいと思つているのだと誓つて遣ろう。どうぞ己の側にだけいてくれ、己の寢床の側を離れてくれるな、一人で死なせてくれるなと頼

もう。お前が側にいるときえ思えば、平和な気分で、明るい理性で死を待つ事が出来るのだと云おう。どうせ程なく死ぬるのだ、きようあすかも知れないのだ、それだから側にいてくれなくてはならない、いてくれんでは心細いと云おう。あいつは一体どこにいるのだろう。どこにいるのだろう。頭の中で血が渦巻いている。目が昏くらんで来る。息が忙せわしくなつて来る。それに誰だれも側にはいない。なぜ己は婆あさんを追い出してしまっただろう。あれだつて人間だ。これでは己は手も足も利かないのに一人でいるのだ。」

病人は起き上がった。そして思ったより力強く感じた。しかし呼吸が如何いかにも苦しい。なんとも言われないように切ない心持ちがする。とうとう我慢し切れなくなつて床から出た。そして着物を半分着て窓の所へ出て見た。新鮮な空気が顔に触れる。病人は深い息を二三度した。それは好い心持ちであつた。寝台ねだいの縁ふちに掛けてあるショールを取つて体に巻いて、椅子に腰を掛けた。それから数秒間は思想が乱れて、ぼんやりしていたが、またしては電光のように「どこにいるのだろう、どこにいるのだろう」という考えが閃ひらめき過ぎる。「今まで己が眠あつてゐる間に、出て行つた事があるのだろうか。そうかも知れない。どこへ行くのだろうか。つい一二時間病室の陰気な空気を除よけている積りだろうか。それとも己の病気を嫌つて除けるのだろうか。己の側にいるのが厭いやになつたのだろうか。この部屋に

漂っている死の影がこわいのだろうか。生が恋しいのだろうか。生を求めるのだろうか。何を求めるのだろうか。何を思っているのだろうか。どこにいるのだろうか、どこにいるのだろうか。」

飛び翔かけるような思想が囁ささやきになり、うめき出すような詞になる。そして「どこへ行つたのだろう」と叫ぶのである。女がこの部屋を逃げ出して、自由を得た喜びの微笑びしょうを唇の上に湛たたえて、梯子段はしごだんを駈かけ降りて、どこか病氣や、胸の悪い事や、ゆるゆると死んで行く有様の見えていないところへ、どこか、ある不明なもの、ある花咲き匂におうもののある所へ、逃げ込んで行こうとするのが、目の前に見えて来る。女の姿は、赫かがやく霧の中へ隠れてしまつて、その霧の中から、女の笑わらい声こえが聞える。幸福の笑声、歡喜の笑声である。そしてその霧が散つてしまうと、女の踊っているのが見える。女はくるくる廻まわつて踊りながら見えなくなってしまう。

その時ごろごろいう音が次第に近づいて来て突然止やんだ。男は「どこへ行つたのだろう」とまた思つて、ふと気が付いて窓の所へ走つて行つた。ごろごろいったのは馬車で、それが門口に留とまつている。馬車ははつきり見える。そしてその中から人が出て来る。それはマリイであつた。

四十一

相違なくマリイである。出迎えようと思つて、次の間へ飛び出した。そこは真つ暗である。どこに戸の撮みがあるか見えない。まごまごしている内に、外から鍵を挿て錠を開けた。戸が開いた。マリイが這入つて来た。廊下から微な瓦斯燈の光が差し込んで、女の身の周囲を照している。男がくら闇にいたので、女が知らずに打つ付かつて、きやつと云つた。男はいきなりその肩を掴んで、部屋の中へ引き摺り入れた。そして口を開いて何か言おうとしたが、声が出なかつた。

「あなたどうなすつたの。気が変になつていらつしやるじやありませんか。」

女は恐怖の余りにこう云つて、男の手を振りほどこうとした。

男は棒立ちに立っている。その様子が見る見る丈が伸びて大きくなるように見える。男はようよう物が言われるようになった。「どこから歸つて来たのだ。どこから。」

「まあ、あなたしつかりして下さいよ。どうしてそんな。まあ、そこへお掛けなさいよ。」
「どこから歸つて来たのだ。どこから。どこから。」男の声は前よりは小さくなって、茫

然^{うぜん}として言っているように聞える。どこからを繰り返した声は、ほとんど囁^{ささや}くようである。

女は男の手を握った。その手は焼けるように熱かった。

女に手を引かれて、男は長椅子^{ながいす}の所へ連れて行かれた。そして女は椅子の隅へ男を押し付けると、男は素直にそこへ坐^{すわ}って、なんだか正気になろうと努力するような様子で、周囲^{ゆうい}を見廻した。そして今度は、はつきりした声で、前と同じように、「どこから帰ったのだ」を繰り返した。

女はようよう落ち着いて、帽を脱いで、背後^{うしろ}の椅子の上に投げて、男の側^{そば}へ腰を掛けた。そして媚^こびるように云った。「わたくし、たった一時間外に出て、風に当って来ましたの。なんだか、自分でも病気になりはしないかと思つたものですから。病気にでもなろうもんなら、あなたのお役にも立たないでしょう。帰りには、早くお目に掛かろうと思つて、馬車に乗って帰りましたの。」

男は長椅子の隅に坐つて、がっかりしたような様子でいる。そして女の顔を横から覗^{のぞ}き込んで、なんにも言わない。

女は熱い男の頬^{ほお}をさすりながら、語り続けた。「ねえ、おおこりなすつたのではないで

しよう。それにあの女中に、わたくしの帰って来るまで、お側にいるように云って置きましたわ。いませんでしたか。どこへ参りましたの。」

「己おれがあつちへ行けと云つたのだ。」

「なぜそんな事をなすつたの。あれはわたくしの帰るまで、お側にいるように、そう云つて置いたのではありませんか。わたくし早くお側へ帰つて来たくてなりませんでしたの。幾ら空気が好よくつたつて、あなたがいらつしやらなくつては、詰まりませんわ。」

男は病氣な子供のように、頭を女の胸に寄せ掛けた。女は昔したように、男の髪に軽く接吻せつぶんした。男は訴えるような目付で、女を見上げた。「おい。己の側にいつまでもいてくれなくつてはいけないぜ。」

「ええ。」女はまた男の濡しめつた乱髪みだれがみに接吻した。女はなんとも云えないほど悲しかった。泣きたいようであつた。しかしその感動には一種の枯れた、乾燥ひからびたような心持が交つていた。どこからも慰藉いしやは来ない。自分の悲痛の内にも、それを見出す事みだが出来ない。そして男の涙の頬を伝わつて流れるのを見て、その涙を羨うらやましく思つた。

それからは夜も昼も女が男の病床を離れずにいる。食事を運んで来る。薬を飲ませる。

男が気分が好くて、何か聞きたいと云うと、新聞やら、小説の一節やらを読んで聞かせる。女の散歩に出た翌朝よくあさから雨が降り出して、いつもより早く秋が来た。窓の外を見てみると、毎日朝から晩まで、ほとんど小止おやみなしに降る、細い、鼠色ねずみいろの雨の糸が見えている。

四十二

この頃ごろになって、病人は夜折々、何やら連続のない事を言う事がある。そんな時には、女が機械的に、男の額や髪をさすつて遣やつて、「お寐ねなさいよ、お寐なさいよ」と囁ささやく。子供が夜中に不安になった時、母が宥なだめるような工合ぐあいである。見る見る男は弱つて行く。しかし苦痛はひどくない。病氣の元を思い出させるような、短い間の呼吸困難が折々あるが、それが過ぎ去ると、一種の弛緩しかん状態になる。そしてもう自分で、なぜそんな状態になるかを考えて見るほどの力もない。ただ折々ふと気が付いて、「なぜ己おれはこの頃、何事にもこんなに冷淡になったのだろう」と云いう事がある。外で雨の降っているのを見ると、「ああ、秋だな」というが、それ以上の事は考えない。自分の病氣がどうなるだろうとい

う事も考えない。死をも思わない。健康をも思わない。側そばにいるマリイも、この頃は病人の様子がどう変わるだろうなどとは思わないようになった。たびたび見舞いに来る医学士もただ習慣的に見舞いに来るといふ風になった。勿論もちろん学士は外にいて、生々した世間の状態を見て暮すのだから、この病室へ這入はいつて来る度ごとに、病人の様子が日々変わるのが見える。学士はもう全然希望を擲なげつてしまった。そして病人の身の上にも、側に付いている女の身の上にも、ある新時期の来たのを認めた。それは人間が深い感動を閲けみした跡で到達する時期である。その時期には希望もなければ恐怖もない。その現在の感じも、過去を省みるという事もなく、未来を見渡すという事もないので、鈍く、ぼんやりしている。学士はいつも這入つて来る時、一種の不愉快を感じて這入つて来て、病人と女とが變つた事もなくしているのを見て、始めて安心して息を衝つくのである。いずれもう遠からず、この二人は最後の決心を促される時期に逢あうのである。

ある日学士は、やはりこんな事を考えて、梯子はしごを升のぼつて来た。戸口から這入つて見ると、女が次の間まに、青い顔をして、手を組み合せて立っている。「どうぞいらつしやつて下さいまし」と云つて、女は学士を病室に案内する。学士は急いで這入つて見た。

病人は床とこの上に坐すわっている。そうして憎々しい目附めつきで二人を見て云つた。「一体己をど

うしてくれるのだい。」

学士は足早に側へ寄った。「君こそどうしたのだ。」

「いや。君が僕をどうしてくれるのか聞きたいのだ。」

「まあ、それはなんと**いう馬鹿げた物**の**言**いようだね。」

「君もあいつも、僕を**行き着**かしてしまうのだ。」病人の声は叫ぶようである。

学士は病人の手を握ろうとしたが、病人は荒々しく自分の手を引いた。「**廃**してくれ給

え。マリイもそんな手付きなんぞをしているには及ばない。僕はただ君やあいつが、僕をどうしてくれるのだから、それが聞きたい。これからどうなるのだからそれが聞きたい。」

学士は落ち着いた声で云った。「君さえそんなにむちゃくちゃに興奮しないでいれば、もつと早く好くなるのだ。」

「己はもう随分長い間こうして寝てばっかしいのだ。それを二人共平気で見物している。」こう云い掛けて病人は突然学士の方に向いた。「一体君は僕をどうしてくれるのだ。」

「まあ、そんなわけの分らない事を云うのは**廃**し給え。」

「だって君は僕をどうもしてくれないじゃないか。もう時期は切迫している。それに誰も手を出して防いでくれない。」

「まあ、気を落ち着けなくてはね」と云つて、学士は寢台ねだいの縁ふちへ腰を掛けて、また病人の手を取ろうとした。

「君はもう僕を見放しているのだね。それだからこうして寝かして置いて、モルヒネばかり飲ませているのだ。」

「どうも今二三日の処ところは忍耐して貰もらわなくてはならないよ。」

四十三

「しかしね、こうしているのがなんの役にも立たないのだ。僕がこれからどうなるという事は、はっきり分かっている。なぜ君は僕をこんなにしりじり衰えて行かせるのだ。君にだって、マリイにだって、僕がこのままいってしまうのだという事は、分かっているに違いない。僕の身になつて見給たまえ。どうも我慢が仕切れない。どうにかして見ようがあるうじやないか。君は医者じやないか。考えて見てくれ給え。どうにかしてくれるのが、君の義務だ。」

「それは手段はあるとも。」

「手段なんか、ないね。奇蹟きせきでも現われるなら、知らぬ事だ。ところが奇蹟なんぞは現われまい。そこで僕は兎とに角かくどこへか行こうと思う。」

「それは君がもう少し力付いて来れば、起きる事が出来るのだ。」

「いや。君に言うがね、そんなことを言っていると、機会は過ぎ去ってしまうのだ。なぜ僕がこの厭いやな部屋にいつまでもいなくてはならないのか。僕はどこかへ行きたい。この町が離れたい。僕の体に何が必要だという事が、僕には分かっている。僕は春に逢あいたい。僕は南の国へ行きたい。僕の頭の上に暖かい日が照ってくれれば、僕は丈夫になるのだ。」

「それは分かっているよ。南の方へ行くのは無論好いい。しかしもう少し辛抱しなくてはいいないね。きょうなんぞ立とうと思つたつて立たれない。あすも駄目だ。その時期が来れば、僕がそういうよ。」

「ところが僕はきょうでも立たれる積つもりだ。この厭な部屋の外へ出てさえしまえば、僕はたしかに生れ変つたような人間になる。このままにしてここに置かれては、僕は一日一日危険を冒しているというものだ。」

「しかし兎に角僕は医者だよ。」

「それは君は医者に相違ない。しかし君は特別の場合を考えないで、どの病人をも同じよ

うに扱おうとするのだ。病人には自分がどうすれば好いという事が却^{かえ}って好く分かる。僕をこう遣^やつて寝かして置いて、衰えさせてしまうのは、どうも好い加減な為^{しかた}方で、不親切極まるのだ。南の方へ転地して、体が不思議に好くなったものは幾らもある。たとえ一縷^{いちる}の望みでもある以上は、何も手を束^{つか}ねているには及ばない。僕にだってまだ望みはある。君のするように僕を運命^{もてあそ}の弄ぶがままにして置くのは、実に冷酷極まるのだ。僕は是非南の方へ行つて見たい。春のある方へ行つて見たい。」

「好いよ。それは僕だって承認しているのだ。」

女は急に口を挟んだ。「ねえ、あなた、フェリックスさんとわたくしとで、明日立ちましても好うございましょう。」

「そうですね。フェリックス君が僕に約束して、三日間動かずにいてくれたら、立たせる事にしましょう。兎に角きようなんぞ立たせては、僕が犯罪をするようなものです。どうしてもそんな事は出来ません。それにあの天気を御覧なさい。雨風です。どんな丈夫なもので、きょうなんぞは旅に立たない方が好いのです。」

「そんならあした」と病人が叫んだ。

「まあ、天気が少し好くなったら、二三日の内に立つという事にするのだね。」

病人は学士の顔を、ねらうように見た。

「きつとかね。」

「きつとだ。」

女が「それ御覧なさい」と云った。

病人が学士に言った。「一体君はもう僕の命は救われないものだと思っているのだろう。そこでここで死なせようと思うのだろう。それは間違った人道だよ。人間が死ぬる段になると、故郷も何もあつたものではない。生きていられる所が故郷だ。兎に角僕は手を束ねては死にたくないのだ。」

「まあ、好く聞き給え。冬は南の方で送らせようと、僕が思っていたという事は、君も知っていないてはならないはずだ。しかしこんな天氣に旅行するものはないからね。」

四十四

病人は女に言った。「兎に角直ぐに支度をしてくれ。」

女は心配げに学士の顔を見た。

「それは支度はするが好いよ。いずれいつか用に立つのだ。」学士がこう云った。

「すっかり支度をしてくれ。己おれはもう一時間すると起きて、日の差して来るのを待っている。日が差して来たら、直ぐ立つ。」

午後になってフェリックスは起きた。転地をするという考えが、精神上にそれほど好影響を与えたらしく見える。気分がはつきりして、長椅子ながいすに寝転んでいる。近頃ちかごろの物事に冷淡な様子もなく、絶望の発作もない。マリイの支度をするのを見て、色々な註文ちゅうもんを言う。蔵書の中で、何々を持って行きたいと指図する。一度なんぞは、自分で立つて行つて書類を一山卓つくえの抽斗ひきだしから出して、それを行李こくりへ入れさせた。

「元から書き掛けているものに、目を通して見る積りだ」と、女に言った。それから女がその書類を行李の中へ入れようとしている時、こう云った。「己は長らくなんにもせずいたが、却かえつてそれがためになつたようだ。どうも思想が成熟したかとさえ思われる。今まで考えて置いた事が、今になつて不思議に明瞭めいりょうに想像せられるようだ。」

雨風の日の翌日天氣が直つて、その翌日は意外に暖かになつて窓が開けていられる位になつたのである。そこで午後になつて病人が起きた時には、愉快な、暖かい日影が床ゆかの上

に落ちて、片付け物をするために跪ひざまずいた女の髪の毛の波を打っている上には、きらきらする反射が見えているのである。

丁度女が書類を丁寧に行き止ましているところへ、医学士が来た。病人は長椅子の上に横になっていて、例の書き物の事を話した。

学士ほほえは微笑んだ。「それも悪いとは云わないよ。君だって体は大切にしているのだから、むやみに早く著述に掛かるような事もあるまい。」

「なに著述といつても、労力ではない。これまで闇やみの内に隠れていた、僕の思想の上に、新しい光線の反射が一ぱいに見えて来たような気がするのだよ。」

「それは好いね。」学士はこの詞ことばをゆつくり言つて、病人の様子を見ている。

病人は虚空を凝視している。「君、僕を誤解してはいけないよ。思想といつても、はつきりした輪廓りんかくのあるものを持つているのではない。ただ何かが出来そうな感じがあるばかりだからね。」

「そうか。」

「これまでも僕は、オルケストラが調子を合わせるのを聞くと、強い感じを受けた事がある。今に一斉に清い諧律かいりつが聞えて来るのだ。今にあらゆる楽器が正しく奏し始められる

のだという感じだね。」こういい掛けて突然、「汽車の室は詠えてくれたのだね」と問うた。

「取つて置かせたよ。」

「そんならあすの朝は立たれますね」と、女が機嫌よく云った。女は忙しそうに筆筒から行李へ、行李から書棚へ、書棚からまた行李へと走つて、物を整頓しては詰め込んでいる。

学士は妙な心持ちがした。なんだか面白い遊山の旅に立つて行く、若い男女を見ているように思われるのである。きょうはこの部屋中に、如何にも希望に富んでいる、濁りのない情調が漲っているのである。

学士が暇乞いをして出る時、女が次の間まで付いて出た。「ほんとに立たれる事になつて好うございますわ。わたくし嬉しくて溜りませんの。いよいよ立つという事になつてからは、フェリックスさんが、まるで別な人のようになつたのですもの。」

学士はなんとも答える事が出来なくなつて、ただ女と握手して帰りそうにしたが、振り返つて云った。「あなたに言つて置かなくなつてはならないのですが。」

「なんでございますの。」

「わたしは医者ではあるが、同時にあなた方の友達ですからね、何か僕に用が出来て来たら、僕はいつでも出掛けて行きますよ。どうぞ忘れないで電報を打って下さい。」

四十五

「そんな事になりますでしょうか。」女は驚いたような顔をしている。

「万**ばん**一という事がありますからね。」学士はこう云**い**つて置いて帰った。

女は暫く立ち留まって考えていたが、余り長くここにいたら病人がなんとか思いはすまいかと心配して、急いで病室へ帰った。しかし病人はなんの気も付かずに、女の這入**はい**つて来るのを待ち受けて、前の話しの続きを饒舌**しゃべ**つた。「お前は知るまいが、これまでも太陽が己の体に好影響を与えた事はたびたびある。時候が段々寒くなったら、次第に南へ行くう。リヴィエラへ行くのだな。それからもつと先きになったら、アフリカへ行つても好いいのだ。赤道直下にいたら、己はきつと傑作を纏**まと**める事が出来る。」

いつまでも饒舌り息めないのやで、とうとう女が側**そば**へ行つて、男の頬をさすりながら、微笑**ほほえ**んで云った。「もうお廃**よ**しなさいよ。あんまり軽はずみですわ。あしたは早く起きなく

てはならないのですから、もうお寝なさいよ。」女は男の頬の赤くなつて、目の赫かがやいてゐるのに気が付いた。そして男の手を取つて長椅子ながいすから起き上がらせようとした時、男の手の燃えるように熱いのに驚いた。

夜よが明け掛かると直ぐにフエリックスは目を覺した。丁度休日に内へ帰る子供のような喜びを感じている。停車場へ馬車に乗つて出掛けるはずの時刻より二時間も早く支度をしてしまつて、長椅子に掛けて待つてゐる。マリイも用が疾とつくに済んでゐる。鼠色ねずみいろの外がい套とうを着て、帽子を被かぶつて、その上に青色の面紗ヴェエールを掛けて、女は窓に立つてゐる。註ち文ゆうもんした馬車の来るのを早く見付けるためである。大抵五分置き位に、男はもう馬車が来はしないかと問う。もう男はじれつたがつて外の馬車を雇いに遣やろうかという時、「あそこに来ました」と女が叫んだ。それから「アルフレットさんも来てよ」と女が言い足した。

丁度馬車と一しよに町の角を曲つて来た医学士は、愛想好よく二階の窓に向いて挨拶あいさつをした。それから程なく部屋に這入はいつて来た。「おや。もう二人共そっくり支度が出来てゐるね。朝食あさしよくも済んだ様子だのに、そんなに早く停車場へ行つて、どうする積りだね。」

「だってフェリックスさんが、じれったがるのですもの」と女が云った。

学士は病人の側へ歩み寄った。

病人は機嫌よく微笑んで、「旅には持つて来いの天気だ」と云った。

「そうさ。きつと非常に愉快な旅行になるよ。」学士はこういいながら、卓^{つくえ}の上の堅パンを一切れ取った。「頂^{ちやうだい}戴しても好いのだろうね。」

女は驚いた様子で云った。「あなたまだなんにも上がらずに出ていらっしやったのでしようか。」

「なんにも遣らないとはいわれませんよ。実はコニヤックを一杯飲んで出ました。」

「そんならまだこの中に珈^{コオファイ}琲^イがありましたようですから、どうぞ。」女は無理に勧め、珈琲の残ったのを茶碗^{ちやわん}に注いで、学士に出した。そして何か女中に言い付けに次の間^まへ出た。学士はゆっくり一杯の珈琲を飲んで、茶碗を口から離さずにいた。それは病人と二人ぎりになったので、話しをするのが厭^{いや}だからである。

間もなくマリイは這入つて来て、もう何もかも揃^{そろ}っているから、いつでも出掛けられるのだと云った。

病人は立ち上がって真つ先きに戸口を出た。鼠色の外套を羽織り、柔かい黒の帽子を被

つて、手にはステッキを持っている。梯子段はしごだんも真つ先きに降りようとして、欄干に手を掛けたが、直ぐよろけ出した。背後うしろにいた学士と女とが手を貸した。病人は「少し目舞めまいがするのだよ」と云った。

「それはあたり前さ。何週間も寝台ねだいの上に寝ていたものが、久し振りに起きたのだから。」
 こう云つて学士が片手を掴つかまえると、女が反対の側の手を掴えた。そして両方から支えて、梯子段を連れて降りた。

病人の降りて来るのを見て、御者が帽を脱いで礼をした。向いの家の窓から女が二三人顔を出して、氣の毒そうに見ている。学士と女とで、死人のように青い顔の病人を車へ連れ込むのを見て、家番やばんの親爺おやじも手を貸そうとして進み出た。

車が出て行つた跡で、家番と向いの家の女達おんなたちと意味ありげな、同情のある目付きをして顔を見合せた。

四十六

最後の鐸すずが鳴るまで、医学士が汽車の踏板に足を掛けて、マリイと雑談をしていた。

フエリックスは車室の隅に腰を掛けて、何事にも興味を有せないような様子をしている。その内汽笛が鳴り出したので、病人もようよう気が付いたらしく、学士の方へ向いて合^{がつて}点^{んがつてん}合^{んがつてん}点^{んがつてん}をした。

汽車が動き出した。学士は暫^{しばら}くの間、プラットフォオムに立ち止まって、見送っていたが、ゆるやかに踵^{くびす}を旋^{めく}らして歸った。

汽車が停車場^{ばていしやじょう}の屋根の下を離れるや否や、女は男の側^{そば}へ腰を掛けて男の希望を尋ねた。コニヤツクの瓶^{びん}の栓を抜こうか、本を取って渡そうか、新聞を読んで聞かせようかというのである。男はその親切に感じたらしく、女の手を握った。そして「メランに着くのはいつだい」と問うた。女は確^{しか}とした時刻を覚えていなかった。そこで男は女に旅行案内を調べさせた。昼^{ひる}食^{しょく}はどこで食べられるか、夜泊するのはどこであるか、などという事を調べたのである。その外いつも気にしない、色々な細かい事を調べさせた。それからこの列車に乗っている人の数は何人位だろうと云^いって、勘定をして見たり、その中に若夫婦がいるだろうかと云ったりした。それから暫^{しば}くしてコニヤツクが飲^のみたいと云った。しかし一口飲^のむとひどく咳^{せき}が出たので、これからは自分が飲^のみたいと云っても、飲^のませてくれては困ると、女に言い付けた。

その跡で男は新聞の中で氣象の事の書いてあるところを女に読ませて、天氣が好よきそうだとする予報を聞いて、満足らしく頷うなずいた。その時汽車は丁度ゼンメリングを通っていた。男は注意して窓の外の景色の変るのを見ていて、折々「好いい景色だな」などという。しかしその声の調子は、喜んで言うらしくは見えなかった。昼時分になると、女が用意して来た冷肉ひやにくを出して食べさせた。その時男はコニヤックを飲もうと云った。女がそれは悪わるくろうという、男はひどくおこった。女は為方しかたなしに少し飲ませた。今度は飲んでも障さらずに、却かえてひどく機嫌が好くなつて、何事に付けても興味を有するようになった。窓の外に見える景色や、通過する停車場で見た事を批評するのである。その末にこう云った。

「己おれがいつか読んだ物の中にソムナンビウルの事が書いてあつた。そいつは自分の病気に利く藥を夢に見て知つたのだ。どの医者も氣の付かなかつた藥だそうだ。その藥を飲むと病氣が直つたと云つてあつたよ。なんでも病人は自分のしたいと思う事をするに限ると、己は思う。」

「きつとそうなのよ」と、女が答えた。

「なんでも南の国に限る。南の国の空氣が好いのだ。世間の人は南の国の空氣の違ちがうのは、暖あたたかで年中花を咲かせるのと、オゾンが少し多いのと、嵐あらしが吹いたり、雪が降つたりしない

のと、ただそれだけだと思っている。実はその外にどんなものがあつちの空気の中に漂っているか、誰も知らないのだ。何か我々の夢にも知らない、秘密な物質を含んでいるかも知れないじゃないか。」

「兎に角あつちへいらつしやると、あなたきつと御丈夫にお成りなさいますわ。」女は病人の手を取つて接吻した。

男は色々な話を話し続けた。イタリヤでは大勢の画工に出逢うだろうという事、古来王侯や芸術家が望んでロオマへ行つたという事、自分がマリイと知り合いになるよりよほど前に、一度ヴェネチアへ行つた事があるという事などを話したのである。とうとう話し草^く臥^{たびれ}て、腰掛の上に横になつた。それから夕方になるまでうとうとうとしていた。

四十七

女は向側に坐^{すわ}つて、男の様子を見ている。心持ちは割合に落ち着いている。ただ気の毒だという、軽い同情がある。男の顔は如何にも青い。それに此頃めつきり更けて見えるようになった。初め美しかったこの男の顔が、春頃からこの方^{かた}、どんなにか變つただろう。

女の思うには、自分の頬ほおだって、折々青く見える事はあるが、この男の顔の色は、それとはまるで変っている。自分の顔は、青い時は却かえつて若く、娘らしく見える。男のは反対である。同じ青さでも、自分は青くなるのが、男と違って得なのである。こういう考えは、この時初めてはつきり心に浮んだ。こんな事を考え付いて、なぜそれが切なく思われないだろう。これはきつと男に対する同情が無くなったのではあるまい。多分近頃自分が極端に疲労していて、よしや折々気分が好よくなつたように思つても疲労が真に直る事がないからであろう。こんなに疲労しているのは、却て自分の為しあわ合せである。もしこの疲労が無くなつたら、男の身の上をどんなにか切なく感ずるだろう。そしていつかその感じをしなくてはならないかと思うと、それが今から如何にも恐ろしい。

こんな事を考えながら女は寐ね入いってしまったが、ある一刹那せつなにその眠りが突然醒さめた。あたりを見廻みまわせば、ほとんど真つ暗になっている。車室の天井に下がっている明りには布きれが掛けてあるので、室内は鈍い緑色に照されている。窓の外は闇夜やみよである。丁度長い、長いトンネルを通つて行くような気がする。

なぜ驚いて目を醒ましたのだらう。進行する汽車の車輪の音が、単調に聞えている外には、あたりに物音はしないのである。

暫くして目が薄明りに慣れたので、男の顔が見えて来た。よく眠っているらしい。少しも体を動かさずにいる。暫く見ているうちに、忽ち男は深い溜息を衝いた。気味の悪い、訴えるような声が出た。それを聞いて、女は動悸がし出した。さつき驚いて目を醒ましたのは、多分今のような溜息を聞いたからであろう。

こう思った直ぐ跡で、女はまたびっくりした。それはよくよく男を見ると、眠ってはいないのである。男は目を大きく、大きく見開いている。それがはっきり見える。この空に向い、遠方に向い、暗黒に向って開いている目が、女のためには気味が悪くつてならない。その内男はまたうめいた。その声は前よりも気味悪く訴えるようである。それから男は身を動かして、また溜息を衝いた。しかし今度のは苦しげではなくて、むしろ荒々しいのである。

突然男は両手を腰掛の布団の上に突いて身を起して、両足で、掛けてあった鼠色の外套を下へ蹴落して、立ち上がるうとした。しかし汽車の動揺に妨げられて、また腰掛の隅へ倒れ掛かった。

女は驚いて飛び起きた。そして明りに掛けてある緑色の紗を退けようとした。そのとたんに女は男に抱き付かれた。

がたがた顫ふるえている女を、男は自分の膝ひざの所へ引き据よえて、咳せわ、噎がれた声で、「マリイ、マリイ」と呼んだ。

女は振りほどこうとしたが、それが出来なかつた。健康であつた時と同じ程な力を恢かいふ復くしたらしい様子で、男はしっかりと女を抱き締めた。そして唇を女の領えりの側へ寄せて囁ささやくのである。

「マリイ。覚悟をしているか。」

女にはその意味がちよつと分からなかつた。ただ際限もなく恐いと感じるだけである。しかし抵抗する力はない。叫こゑぼうと思つても声が出ない。

「覚悟をしているか」と、男は繰り返した。しかし男の手が少し緩んだので、男の唇、その息、その声が前より遠くに離れて感ぜられた。そして女は前より楽に息が出来るようになった。その時女はようようの事で、恐る恐る云いつた。「どうしようと仰おつしやるの。」

「己おれのいう事が分らないのか。」

「放して下さい、放して下さい。」女は叫ぶように云つたが、その声は進行している汽車の響に消されてしまった。

男は少しも女の言う事に構わない。しかし手だけは放した。女は男の膝元から起き上が

つて、向いの腰掛の隅に坐^{すわ}つた。

四十八

「己^{おれ}の言う事が分からないのか」と、男は繰り返した。

「どうしようと仰^{おつし}やるの。」と、女が向いの腰掛の隅で囁^{ささや}いた。

「己は返事が聞きたい。」

女は黙^{もく}つて顫^{ふる}えている。そして早く夜が明ければ好^いいと思うのである。

男は前^{まえ}屈^{かが}みになつて小声で云^いつた。「もう時間が切迫して来るから、お前の覚悟は好いかと問うのだ。」前屈みになつて云うので、今度ははつきり聞えた。

「時間と仰やるのは。」

「お前と己との時間だ。」

男の心持ちが分かつたので、女は咽^{のど}を締め付けられるような気がして、何も言う事が出来ずにいる。

「お前、覚えているだろうな。この事をお前に相談する権利を、お前は己にくれた事があ

る。覚えているだろうな。」男の声は少し優しくなつて、ほとんど嘆願するように聞える。男は女の両手を取つた。

男の詞は気味の悪い詞であるが、その目が前のように空を睨んでいないのと、その声の前ほど人を嚇すようでないののために、女は少し落ち着いた。今見れば男は自分に頼んでいるようである。

男はまた「お前、覚えているだろうね」と繰返したが、今度はその声が泣き出しそうに聞えた。

女はこの時ようよう物の言われるまでに、力を恢復した。そしてまだ唇を顫わせながら云つた。「あなた、それは子供らしい事ですわ。」

男は女の詞が耳に這入らないらしい様子をして、半分忘れた事を、再びはつきり思い浮べるように穏かな調子で云つた。「もうお暇乞いが近くなった。お前と一しよに行つてしまわなくてはならない。己達二人の時間がおしまいになるのだよ。」

女のためには、この詞が自分を縛つて、自分の運命を極めてしまつて、逃れようのないようにするらしく聞えた。低い声で囁いたのであるが、如何にも力強く聞えた。もし同じ詞でも、荒々しく嚇すように言われたなら、抗抵しようもあつたのだろう。しかし今のよ

うに静かに言われると、なんとも答える事が出来ない。暫くして男が少し前へ寄つて来たので、女の恐怖は極端に達した。今少して男に飛び付かれて、咽を締められるのではあるまいかと思つたのである。そこで車室の反対の隅に飛び退いて硝子窓を打ち破つてでも人に救いを求めようかと思つた。

しかしその瞬間に、男は女の手を放して、体を背後へ寄せ掛けて、もうこの上何も言う事はないというような様子をした。

「あなたはほんとに分からない事を仰やるわ。これから南の方へいらつしやつて、すっかり丈夫にお成りなさるのではありませんか。」女はこう云つて見た。

男は向側で体を背後に寄せ掛けて、物を案じている。

女は立ち上がつて、明りに被せてある緑色の紗を除けた。まあ、明るくなつただけでも、どんなにか力強く感ぜられるだろう。明るくなってからは、胸の動悸が鎮まつて恐怖が薄らいだ。女は元の所へ坐つた。

男は床を睨んでいたが、この時顔を上げて女と目を見合せた。そしてゆっくり云つた。

「マリイ。己は夜が明けたつて、もう馬鹿な望みは起さない。南の方へ行つたつて駄目だ。きようそれが己にはつきり分かつたのだ。」

なぜあんなに落ち着いて来たのだろうと、女は思った。安心させて騙す^{だま}のではあるまいか。逃げ出されては困ると心配して、あんな真似^{まね}をするのではあるまいか。こう思つて、女は用心する氣になつた。そして男が何を言つても、その詞には耳を貸さないで、熱心に男の様子を観察している。その目附^{めづ}き、その体の運動に一々注意している。

男が云つた。「お前には意志の自由がある。仮令^{たとえ}これまでに己に誓つた事があつても、己はお前に約束を履行しろというのではない。お前に脅迫しようとは思わない。まあ、その手を握らせてくれ。」

四十九

女は握手した。しかし自分の手を上にするだけの注意をした。

「早くその時になれば好^{いい}い」と、男は囁^{ささや}いた。

「わたしあなたに忠告しますわ。少しお眠りなさるが好いのよ。もう今に夜^よが明けます。そしてメランに一二時間で着くのです。」

「己^{おれ}はもう寐^ねられない」と、男は云^いつて顔を上げた。そして女と目を見合せて女の表情に、

自分を疑って自分を窺^{うかが}つているところがあるのに気が付いた。そして女の腹がすっかり分つたと思つた。どうも女は己を寐かし付けて、次の停車場^{ていしやじよう}でそつと降りて逃げようとしてゐるらしい。こう思うと、なんともかとも云われない心持ちになつたので、男は叫んだ。

「お前なにかたくらんでゐるね。」

女はぎつくりとした。「いいえ。」

男は立ち上がろうとした。その様子を見るや否や、女は車室の反対の隅へ駈^かけて行つたので、男との距離が大ぶ大きくなつた。

しかし男はただ「息が、息が」と苦しうに云つて、慌ただしく窓を明けて、首を外へ出した。急に立ち上がろうとしたのは、呼吸が苦しくなつたからであつた。

女は安心して、また男の側^{そば}へ戻つて、窓から首を出している男を徐^{しず}かに腰掛の上へ引き据えた。

「あなたそれはお為^ために悪いわ。」

男は苦しげに息をしながら、腰掛の隅に坐^{すわ}っている。

女は片手を窓の縁^{ふち}に掛けて、暫^{しばら}く男の側に立つていたが、また自分の元の席に歸つた。

暫くして男は楽な息をするようになって、その唇には軽い微笑ほほえみが見えた。女は気の毒げに、心配らしく男の顔を見た。「窓を締めましょうね。」

男は頷うなずいた。そして「朝だ、朝だ」と叫んだ。この時地平線に赤み掛かった灰色の横雲が見えて来た。

二人は暫く黙って向き合っていた。それから男が、さっきの微笑みを口の周囲まわりに見せて云った。「お前は覚悟が悪いね。」

女は何か不断の調子で言って遣やりたかった。男の言う事が子供らしいとか、なんとか云いたかったのである。しかし男の微笑みに打ち破られて、その詞ことばは出されなかった。

汽車が速度をゆるめた。数分間にして、朝あさ食しょくをするはずの停車場に着いた。

プラットフォオムには給仕がパンや珈コ琲オフイイを持って駈まわけ廻まわっている。旅客の中には、ここで下車するものもある。人の呼び交す声かまびすが喧かまびすしい。

女は恐ろしい夢の醒さめたような心持ちがした。この世の常の停車場生活が、如何いかにも快いのである。自分の体になんの危険もないと思うので、すっかり安心して、座を立て、プラットフォオムを眺めていたが、とうとう一人の給仕に手招きをして呼び寄せて、一杯の珈琲を買った。

男は女の珈琲を飲むのを眺めていたが、女が勧めても、首を振って聴かなかった。

五十

間もなく汽車がまた動き出した。^{ていしやじょう}停車場の屋根の下を出離れると、本当の昼の明りになった。なんという好^いい天気だろう。それに向うには朝日に赤く染められた山々が聳^{そび}えている。女はもう夜になつても、こわがらずにいられそうだと思つた。男は折々窓の外を眺めて、なるたけ女と目を見合せないようにしている。ゆうべの事を少しは恥かしく思つてゐるのだなと、女は思つた。

汽車は少しずつ行つて一二度停^とまつた。それからメラン停車場に這^{はい}入つたのは、夏のよ^うに暖かく日の差している午前であつた。

「さあ、着きました。やつとの事で。」女が嬉^{うれ}しそうにこう云^いつた。

二人は馬車を雇つて、似^に合^あわしい家を捜して歩いた。「別に儉約をしなくても好^いい、ただ己^{おれ}の財産が無くなりはいしないから」とフェリックスが云つた。貸^{かしや}家があるたびに、馭^{ぎよし}

者に車を留めさせて、マリイが間取りの様子や庭などを見て来る間、男は車の中に待っていた。

程なく気に入った家を見付けた。小さい家で、中二階のように出来ている。それに小さい庭が付いている。マリイは家主を連れて出て来て、車の中に坐っている男に、この貸別荘の好い所を話させた。男は別に異議がなかったので、数分時間の後に、二人はその家を借り受けた。

女は忙しそうに片付け物をしているのに、男は構わずに寢部屋へ這入った。寢部屋の中だけは男もぎつと様子を見廻した。随分広くて気持ちが良い。明るい緑色の形紙で壁が張つてある。大きい窓が開けてあるので、庭から這入った草木の匂が部屋一ぱいに満ちている。窓に向き合つて、寝台が二つ据えてある。男は草臥切つていたので、直にその一つに寝転んだ。

その際にマリイは家主の女にそこらを見せて貰つて、庭に出て見てひどく喜んだ。庭は高い格子のような柵で囲んである。裏門が付いていて、家の中を抜けずに這入つて来られるようにしてある。その裏門の外は広い道で、そこから停車場へは真っ直で、街道を過ぎるよりは早く往来する事が出来るのである。

部屋へ帰って見ると、男は元のままに寝台ねだいの上に寝ていた。声を掛けて見たが返事をしない。ずっと近く寄って見ると、顔の色がいつもより一層青く見えた。もう一遍呼んで見たが、やはり返事をしない。また身動きもしない。

女はひどく驚いて家主の女を呼んで、医者を請待しょうだいする事を頼んだ。家主の女が出て行った、直ぐ跡で、男は目を開いたあ。しかし何か言おうとして起き上がったが、直ぐ苦しい顔をして倒れて、うめき声を出している。口の角すみから血が少し流れている。女は途方に暮れて側そばに寄って見詰めていた。それからもう医者が来そうなものと、戸口へ走って行ったり、また病人の側へ戻って来て、名を呼んで見たりした。そして心の内で、アルフレットさんがいてくれたらと思つた。

ようようの事で医者が来た。頬髯ほおひげの白い老人である。女は出迎えて、「どうぞどうかして上げて下さいまし」と云つた。それから逆上している気分を出来るだけ落ち着けて、これまでの様子を話した。

医者は病人の様子を見て、脈を取って今血を吐いたばかりのところだから、精くわしい診察は出来ないと云つて、色々養生の事を話した。

医者が帰り掛けるので、女は門口まで送つて行つて、「どうぞごさいましょう」と問う

た。

「まだなんとも云われませんね。先^まず暫^{しばら}く忍耐して御様子を見ておいでなさい。決して失望するには及びません。」医者はこう答えた。そして今晚また見に来るといふ約束をして、馬車に乗って、優しく平気な様子で会釈をして、帰って行つた。その様子がまるで形式的な訪問をした人のようであつた。

女はちよつと途方に暮れて立っていたが、忽^{たちま}ち思い附いた事があるらしく、一人領^{うなず}いて郵便局へ駈^かけて行つた。医学士に宛^あてた電報を打つたのである。

電報を打つてしまうと、気分がよほど落ち着いた。そこで内へ歸つて、留守中病人の世話をしてくれた家主の女に礼を云つて、着いた早々色々世話になつて済まないが、いづれお礼をする^と誓つた。

男は旅行服のままで、生^{しょうき}氣を失つて床^{とこ}の上に寝ている。しかし息はよほど楽になつた。マリイが病人の枕^{まくらもと}元に腰を掛けていると、家主の女が慰めて、これまで大病人がこのメランに来て直つた話をした。それから自分も若い時病身であつたが、今はこの通り丈夫になつていると云つた。それから身上話をし出した。この女は随分不幸な目^あに逢つたというのである。亭主は結婚してから二年立つと死んでしまった。息子は遠方に行つてい

る。望みを言えば限りはないが、今この家を預つて人に貸しているのは、自分の身の上に取りつては不足ではない。本当の家主はポオゼンに住んで居て、月に二度位見廻りに来るだけである。こんな風に色々細かい事まで話し出して、大層親切そうにする。それから荷物をほどこ手伝いをしようというので、マリイは喜んで手伝つて貰つた。

五十一

程なく^{ひるしよく}昼食を運んで来た。病人のと云つて、牛乳が添えてある。

その内病人が少し体を動かした。なんだか気が付きそうな様子である。暫くして^{しばらく}實際気が付いたと見えて、頭をあちこち動かして、とうとう自分の上にかぶさるようにして看病しているマリイの顔に目を付けた。そしてにつこりして、静かに手を握つた。「一体^{おれ}己はどうしたのだろう。」

午後になつて医者^いが来た。大分様子が好いからというので、着物を着換て、^{ねだい}寝台に寝るように差図した。病人はおとなしく医者^いの言うがままにしていた。

マリイは病人の側^{そば}を離れずにいる。まあ、なんという長い半日だろう。医者^いの言付けで

開けて置いた窓から、庭の草木の匂がほのかに通つて来る。あたりはひっそりしている。マリイは日の光が床の上に落ちてきらきらしているのを、無心で眺めている。その手を病人は握つて放さずにいる。男の手は冷たくて湿っている。それが女には心持ちが悪い。女は折々何か言おうと思つて、力めて口を開く。「もう大分好いでしょう。それ御覧なさいな。あなた何も言うのではありませんよ。物を仰やつては悪いのですから。あさつてあたりはきつと庭に出て御覧なさる事が出来ますわ。」

男は頷いて微笑むのである。

女は心の内に、いつアルフレットさんが着くだろうかと、時間の勘定をしている。あすの夕方には来られるはずである。そうして見ればまだ一晩と一日だけは待たなくてはならない。ほんにあの方が早く来て下されば好い。

半日が如何にも長い。日は入った。部屋が次第に薄暗くなつて来る。しかし庭の方を見れば、白い砂の敷いてある道の上や、格子になつている柵に、黄いろい日の光がまだあつてゐる。

突然男が「マリイ」と呼ぶのが聞えた。庭の方を見ていた女が、急に病人の方へ振り向いた。

「もう大ぶ好いよ」と、男が意外に大きい声で云った。

「そんなに大きな声をしてはいけませんよ」と、女が優しく留めた。

「大ぶ好い。今度のは旨く経過したようだ。これが病気の転機になるのかも知れない。」
今度は囁くように云った。

「きつとそうですわ。」裏書をするように女が云った。

「己は空気が好いから好くなりそうに思うのだ。しかし今のような奴がまた来てはかなわない。今度は駄目だ。」

「だって、もう御気分が好いじゃありませんか。」

「いや。兎に角お前は親切だよ。好く気を付けていてくれ。」

「そんなことは仰やるまでもありませんわ。」女は少し不平らしく云った。

「己がいよいよ行く時には。お前も一しよに連れて行くのだよ。」男はこう囁いた。

その詞を聞くと同時に、女は非常に恐怖に襲われた。なぜこんなにこわいのだろう。何もこの男がこつちに危険を加えようとは思われない。暴行を加えようと云つても、もうこんなに弱くなつていてはそれは出来ない。体力から言つて見れば、今ではこつちの方が病人の十倍も強い。一体男はどうしようと思つているのだろう。今も空を見たり壁の方を見

たりしているが、なんと思つてあんなに見廻みまわしているのだろう。もう一人で起き上がる事も出来そうにはない。それに刃物なんぞは持つていない。それとも毒でも持つているのだろうか。事に依よつたら、どうにかして毒を手に入れて、現に持つていて、それをこつちの飲むものに入れようとするかも知れない。それにしてもその毒はどこにしまつてあるだろう。さつきも着物はこつちが着せ替かへて遣やつた。粉こ薬ぐすりか何かを紙入に入れて持つてはいしないか。紙入はあの上着にあるはずである。いやいや。さつきのような事を言つたのは、あれは熱ねつが言いわせたのだ。それにあんな事を言つて、こつちを苦しめようと思うだけの事かも知れない。

五十二

しかし熱ねつがあんな事を言いわせるとして見れば、同じ熱ねつがどんな事を実行させないにも限らない。事に依よつたらこつちが眠ねつてゐる内に、咽のどを締めようとするかも知れない。それは格別力がなくても出来る事である。その時氣を失つたら、跡はどうせられるか分からない。なんでも今夜は寐ねずいになくてはならない。あしたはアルフレットさんが来るのだか

ら。

日が段々暮れて来た。もう夜になった。病人はその後一言もものを言わない。もう口のまわり周囲に見えていた微笑みの影も消えた。今は真面目な、陰気な顔をして空を見詰めている。暗くなり切った時、家主の女が蠟燭を点して来て、病人の寝ている側の、今一つの寝台を拵えに掛かった。それを見てマリイはそれには及ばぬと、手真似で知らせた。

それが病人に分つたと見えて、「なぜ拵えさせないのだ」と云った。それから間を置かず、「そんなにしなくても好い、お前も寝なくてはいけない、己はもうこんなに好いのでから」と言い足した。

この病人の詞が、マリイの耳には嘲りのように聞えた。

女はどうとう寝台へ行かずにいた。病人の寝台の側で目を瞑らずに、長い沈黙の夜を過している。病人は大抵静かにしている。女は折々病人が寐た振りをして、こつちに安心をさせようと思うのではないかと疑った。病人の顔を好く見ようと思つても、蠟燭がちら付いて、病人の目の周囲や、口の脇に、痙攣するような運動があるように見えたり、またそれが明りのせいのように思われたりして、どうもしかと見定められない。

女は立つて窓まで出て庭の方を眺めた。外は鈍い青色を帯びた闇である。少し乗り出し

て仰いで見ると、庭の木立の真上の所に月が出ている。風はちつとも吹かない。あたりが如何いかにも静かで、何一つ動くものがないので、暫しばくじつと見ていると、向うにはつきり見えている外そと、そとがこいの柵さくがじりじりと手前の方へ寄つて来て、暫くしてまた留まるように見える。

夜中過ぎに病人が目を醒さました。女は枕まくらの歪ゆがんだのを直して遣やった。その時ふと思ひ付いて指で枕の下を捜して見た。何か隠してありはしないかと思つたのである。しかしなんにも無かつた。

女の耳には「お前を連れて行く、お前を連れて行く」という詞が絶えず響いている。しかし好く思つて見れば、男が真面目にそう思っていたら、そんな事を言うはずがないようでもある。男が實際何かたくらむ程の氣力を持つているだろうか。もし持つているとしたら、飽くまで目的を隠して、けどられないようにすべきではあるまいか。事に依つたらこつちは病人の譚語うわごとを氣にして、子供らしく恐れているのかも知れない。

女は段々眠たくなつて来た。そこで万一の用心に、自分の椅子いすをずっと遠くへいざらせた。しかしどうしても寐入らない積りである。

その内思想うちが段々不明瞭ふめいりようになつて来た。昼間の明るい意識から次第に灰色の夢の薄明

りに這入^{はい}って行く。昔の記念が浮ぶ。楽しかった時代の昼の事、夜の事が思い出される。男が自分の体を抱いていてくれて、部屋の内^{うち}に、新春の息が通^{かよ}っていた時の事を思い出す。女は庭の物の香^かが自分の坐^{すわ}っている所まで這入^{はい}って来なくなったように思った。窓の所まで行^いって、その香^かを吸^すい込みたいのである。なんだか病人の髪^{かみ}の毛^けから、厭^{いや}な甘^{あま}ったるい匂^{におい}が立ち昇^{のぼ}って部屋中に満ちているように思うのである。

いよいよおしまいになったらどうだろう。この「おしまいになったら」という事を思^{おも}えて見ても、もう別段驚^{おどろ}きもしない。心の底^{そこ}の恐^{おそ}ろしい願^{ねが}いを、「当^{あた}人も楽^{やす}になるのだから」という偽善^{ゐせ}の同情^{どうじやう}で覆^{おほ}い隠^{かく}す、この如何^{いか}わしい詞^{ことば}が口^{くち}の内に浮^うんで来ても、もう驚^{おどろ}かなくなっている。そうなったらどうだろう。女は自分の体^{てい}が外^{そと}の庭^{にわ}に出て腰^{こし}を掛けていて、その顔^{かお}が青^{あお}ざめ、目^めが泣^なき腫^はれているのを見るように思^{おも}う。しかしこの悲哀^{しるし}の徴^{しるし}はただ上^う辺^へばかりである。心の内^{うち}には、これまで久^{ひさ}しく味^{あじ}わずにいた、嬉^{うれ}しい平和^{へい}が来^きている。見^みている内にその姿^{すがた}が立^たち上^あがって柵^{さく}の外^{そと}へ出^でて、道^{みち}をゆ^ゆつくり歩^{ある}いて行^いく。もうどこへでも自由^{じゆう}に行^いかれるのである。

こんなにぼんやりした想像をしていながら、女は男の寐息ねいきを聞く事を怠らない。寐息は折々うめき声になる。

夜は次第に明けて来た。やつと明るくなつたと思うと、家主いえぬしの女が来て交代してくれようと云つた。マリイは嬉うれしそうに同意して、病人を一目見て、次の間へ出た。そこには家主の女が長椅子ながいすを寢床こしちに拵こしらえて置いてくれたのである。まあ、なんという好い心持ちだろう。女は着物を着たまま横になつて、直ぐに目を閉じた。

よほど時間が立つてからマリイは目を醒さました。部屋は気持ちの好い薄明りになつてゐる。鎧戸よろいどを締めた窓から日の光が狭い筋になつて差し込んでゐる。女は急いで起き上がつて、直ぐに自分の現在の位置をはつきり考える事が出来た。きようは医学士のアルフレットさんが着くはずである。これから出逢であわなくてはならない、暫くしばらくの間の陰気な境きようが界かいに對して、この人の来るといふ事がよほど力になるのである。

女は躊躇ちゆうちよせずせに病人の部屋に這入はいつた。戸を開けた当座一秒時間程は病人の寢床に掛けてある白い布きれに目を射られて、物が見えなかつた。暫くしてから見ると家主いえぬしの女が

いる。それが指先を口に当てて、物を言うなという合図をして椅子から立ち上がって、爪先で歩きながら、マリイを出迎えた。そして「好くお休みです」と囁いて、それから今までの様子を話した。一時間程前までは、熱がひどい様子で目を醒ましていて、二三度奥さんの事を聞かれた。朝早くお医者が来て見たが、容体は前と変った事もないという事であった。その時奥さんを起そうかと思つたが、医者が必要には及ばないと云つた。医者は午後の内に、また一度来て見るはずだというのである。

マリイはこの話を注意して聞いて、自分に代つて看病してくれた礼を言つて、病床の側の椅子に腰を掛けた。

きようは暖かい日である。ほとんど蒸し蒸しすると云つても好い位である。もう正午に間もあるまい。庭の方を見れば、静かな重くろしい日の光が差している。

寝台の上を見て、最初に目に付いたのは、病人の両手である。両手は着布団の上に出ていて、折々びくびくと動いている。それから顔を見れば下顎が締りなくなつたので、唇が軽く明いている。色は死人のように青い。数秒時間呼吸の息んでいる時がある。それから上面でするような、嚙るような息をする。

「事に依つたらアルフレットさんの来ない内に、死んでしまうのではあるまいか」と、女

はちよつと思つた。今寐^ねている病人の様子を見れば、顔付きに悩んでいる青年の表情が見える。ひどい苦痛の跡の弛^ち緩^{かん}、勝算の無い闘いの跡の諦^{あきら}めが見える。こういう容態が昨今暫らくの間見えずにいたという事に、女は急に気が付いた。それは病人が女を見るたびに、その顔に不平が現われていたからである。多分今は夢の中でも女を憎んではまい。あんなに美しい顔付きになっているから。

女は今日を醒ましてくれれば好いと思つた。そしてじつと病人を見てみると、なんとも言われない悲しみと悔^くみとが起つて来る。今ここで死に掛かっているのは恋人に違いない。女は急に避^さくべからざる、恐ろしい運命に自分が襲われるのだという事を感じて、一時に何もかも分かつたように思つた。やはりこの男が我が幸福、我が生命であつたのだ。自分はこの男と一しよに死んでも好いとまで、思つた事もあつた。それにその男の帰らぬ旅に赴^{せつ}く一刹那が、今迫つて来ているのである。こう思つて見れば、これまで一時自分の胸の上にかぶさっていた冷やかさ、何日も続いていた無情が解^かせられないもののようになつて来る。それでも今はまだ男が生きている。息もしている。夢でも見ているかも知れない。しかしもう程なく死んでしまふだろう。そして葬られてしまふだろう。どこかの静かな墓地の土の下に埋^{うめ}られて、次第に朽ちて行くのに、その土の上では何事もない日が立つて行

く事だろう。そして自分は生き残つて、人交りもするだろう。自分の愛していた男は沈黙した墓の中にいるという事を知つていながら、人交りもするだろう。

女の顔を伝わつて、涙が止所もなく流れる。とうとう女は声を立てた。その時病人が動いた。女は急いでハンカチーフで頬を拭いた。その時病人は目を開いて、何か問いたそうな目附きで、暫く女をじつと見ていた。しかし何も言わなかった。それから二三分立つてから、男が「おいで」と囁いた。

女は椅子から立ち上がつて、男の上に身を屈めた。

五十四

男は腕を伸ばして女の頸を抱きそうにしたが、それを止めて、また腕を卸した。

「お前泣いたのか。」

「いいえ」と女は急に答えて、額に飜れ掛かっている髪を掻き上げた。

男はまたじつと真面目に女の顔を見て、それから顔を反けた。何か物を案じている様子である。

女は考えた。それは医学士に電報を打った事を、病人に打ち明けて話したものだろうか、
 どうだろうかと云う問題である。友達ともだちが来るのだから、知らせた方が好くよはあるまいか。
 いやいや。そんな必要はあるまい。なに、学士が来た時に、自分も不意であつたという風
 をすれば済むのである。

その日の暮れるまで、女は鈍い緊張を感じて、来るはずの人を待っていた。目前の事は
 総すべて霧の中で見るもののように、ぼやけて過ぎ去つてしまう。医者の見舞いなんぞは、な
 んでもなく済んでしまった。病人は始終何事にも感ぜずにいる。呻吟しんぎんして半眠りになつ
 ている状態から、折々醒さめて、なんでもない事を問うたり、何か欲しがったりする。時間
 を問う事もある。水を飲みたがる事もある。家主いえぬしの女が出たり這入はいつたりする。マリイ
 は始終外へ出ずに、病人の側の椅子てばいすに掛けている。時々寝台ねだいの背後うしろの横木に手を掛けて
 立っている事もある。また窓の所へ行つて庭を見ている事もある。庭では木の影が段々長
 くなつて、とうとう草原や道の上を闇やみが這い寄つて来た。

少し蒸し蒸しするような晩である。病人の枕まくらもと元の卓たくの上に点けてある蠟燭ろうそくの火が
 ほとんど少しも動かない。すっかり暮てしまつて、向うの奥に見える青み掛かつた鼠ねずみ
 色の山の上に月が出た頃ころ、風が少し吹いて来た。それが額に当るのを、女は好い心持ち

だと思つた。

病人も同じ感じでいるらしく、頭を動かして、大きく開けた目を窓の方へ向けた。それから深い深い息をして、「ああ」と云つた。

女は布団の脇^{わき}へ垂れてゐる病人の手を取つて、「何か上げましょうか」と云つた。

病人はそつと手を引いて、「マリイ、こちらへおいで」と云つた。

女は側へ寄つて、頭を病人の枕近く寄せた。

病人は女の髪の上に、祝福をするように、手を拡^{ひろ}げて載せて、小聲で、「お前のこれまでの親切は難^{ありがた}有^{ありがた}かつたよ」と云つた。

女は頭を病人の枕に寄せ掛けていたが、目に涙が湧^わいて来た。

部屋の中はひっそりしている。遠くから汽車の汽笛の音が消え消えに聞えて来た。その跡はまたしんとして、夏の夕べの重くろしい、甘いような、不思議な感じが満ちている。

病人が突然寢床から起上がつた。その動作が如何^{いか}にも急で劇^{はげ}しかったので、女はびっくりした。そして頭を上げて、病人の顔をじつと見た。

病人は両手で女の顔を挟んだ。昔可^{かわ}哀^{わい}がつた時にしたようなし方である。「マリイ。約束の事はどうしてくれるのだ。」

「約束とはなんでしよう。」こう云つて、女は病人の手を放そうと思った。

病人は平生の力を悉く恢復し得たように、しっかりと女の頭を抑えて放さない。「己とおれ

一しよに死んでくれる約束じゃないか」と、忙しい語調で云つて、女の顔の側へびつたり顔を寄せた。病人の息が女の口に障る。

女は顔を引こうとしても引かれない。

病人は自分の詞を一句一句女の口に注ぎ込むように言うのである。「己は一人で行くのは厭だから、お前を連れて行くよ。己はこんなにお前を愛しているのだから、お前を手放して置く事は出来ない。」

女は恐ろしさに麻痺したようになってゐる。その咽からは自分にもほとんど聞えない位な、咳嚔れた叫び声が出た。顚顚と頬とをしっかりと抑えられていて、頭を動かす事が出来ない。

病人は頻りに口説き立てる。湿っぽい、熱い息が女の顔に触れる。「一しよだ。一しよだ。お前の意志でそう極めたのじゃないか。一人ではこわくて死なれない。一しよに死んでくれるかい。」

女は足で自分の椅子を押し退けた。そして鉄の籠を脱すように、自分の頭を病人の手か

ら引き放した。

五十五

病人は女の顔を挟んでいた手を、そのままにしている。丁度まだ女の頭が間に挟まっているように、空を掴んでいるのである。そして女の頭が抜け出したのが、まだ分からないかと思われるような顔をして目を据えている。

「厭いやです。厭いやです。わたくしはそんな事は出来ません。」女はこう叫んで戸口の方へ駈かけ出した。

病人は寢台ねだいから飛び降りたい様子で、起き上がった。しかしもう力を使い尽したと見えて、死物のようになつたりと寢台の上に倒れた。

女はそれを見返らずに、戸を引き開けて、次の間まに走り抜けて、廊下へ出た。ほとんど夢中である。男が自分を締め殺そうとした。顚顚こめかみや頬ほおから、頸くびへ滑り落ちようとした、男の指をまだ肌を感じている。女は門口へ出た。そこには誰たれもいない。家主いえぬしの女は夕食の品物を買ひに出たはずだという事を思い出した。

どうしよう。女は引き返して廊下を抜けて、庭へ出た。人に追い掛けられるように、草^く原^{さはら}や道を横切つて、庭の向うの端^{はし}まで行つた。そこから振り返つて見れば、病人の部屋の窓が見える。窓には蠟燭^{ろうそく}の火がちらちらしているが、その外にはなんにも見えない。「どうしたのだろう」と独^{ひとりごと}語^いを云つた。そして自分もどうして好^いいか、分らなかつた。ただ意味もなく柵^{さく}の内をあちこち走り廻^{まわ}つてゐる。

その時ふと思ひ出した事がある。アルフレットさんが来るはずだつた。丁度^{いま}今頃^{ころ}来るはずだつた。こう思つて柵の格子の間から、月の差している道を眺めた。停車場^{ていしやじやうそば}の側まで見えているのである。

女は庭の戸のある所へ駈^{かけ}け寄つて、戸を開けた。目の前には人のない、白い道が見えている。もし外の道からおいでなさりはすまいか。いや。あそこに人影が見える。次第に近くなつて来る。急いで来る男の姿である。あの方だろうか。

女は二三歩走り出した。「アルフレットさんですか。」

「マリイさんですね。」

待つていた医学士が来たのである。女は嬉^{うれ}しさに泣きたくなつた。学士が側へ歩み寄つた時、女はその手に接吻^{せつぶん}をしようとした。

「どうなすつたのです。」

女は黙つて学士の手を取つて、引き摩するようにして跡へ引き返した。

部屋の中では、フェリックスが暫しばらく茫然ぼうぜんとしていたが、また起き上がつて、あたりを

見廻した。女はもう逃げて、自分一人になつていたのである。咽のどを締め付けられるような恐怖が襲つて来た。どうしてもあの女を側に引き付けて置かなくてはならないと思うより外、なんにも考えて見る事が出来ない。

一ひとはね跳はに寝台から飛び出した。しかし立つている程の力がないので、また仰向けに寝台の上に倒れた。頭の中ががんがん鳴っている。また起き上がつて椅子いすの背を掴つかんで、椅子を前へずらせながら歩き出した。「マリイや。マリイや。己おれは一人では死なれない。」

女はどこへ行つたのだろう。行く所はないはずだが。こう思いながら椅子を杖つえにして、いざりながら窓の側まで来た。庭が見える。蒸暑い晩の、青み掛かつた月の光が差している。それが目の前にちらちらして、草や木が踊っているようである。ああ。これが己の体を直してくれるはずの、南の国の春であつた。この空気だ。この空気だ。こんな空気がいつも己を吹いていれば、健康にならなくてはならないはずだと思つたのである。

ああ。あれはなんだ。病人は地の底にあるように見える柵さくの格子のあたりから、青い月

の光に照らされて、真つ白に光る小石の道を歩いて来る女の姿を見付けた。女は飛ぶように駈^かけて来る。次第に近くなる。マリイだ。マリイだ。しかしその背後^{うしろ}から男が来る。マリイと一しよに男が来る。恐ろしい大男のように見える。これまで見ている内に、柵の格子が踊つて来る。何もかも踊つて来る。遠方から歌のような物音が聞える。好い音だ。好い音だ。病人の目は昏^{くら}んでしまった。

マリイと学士とが駈^{のぞ}け付けた。窓の所へ来て、女は立ち留まつて、恐る恐る部屋の中を覗いた。そして「ああ、いらつしやいませんわ、寢台はからっぽです」と叫んだ。

その跡で突然女はきやつと云つて倒れそうになつたので、学士が抱き留めた。学士はそつと女の体を脇^{わき}へ寄せて、自分が窓の中を覗いて見た。

部屋の中には、窓の直^すぐ下に、白い襦^{じゆ}袢^{ばん}一つを着て、フェリックスがばったり倒れて、両足を大きく拡^{ひろ}げている。片手はひっくり返つた椅子の背を握っている。口の角^{すみ}から一筋の血が腮^{あご}の方へ流れている。唇と瞼^{まぶた}とが、まだびくびく動いているらしい。しかし好く見れば、それは月の光が青ざめた顔を照して人の目を惑わしていたのであった。

(明治四十五年一月―三月)

青空文庫情報

底本：「於母影 冬の王 森鷗外全集12」ちくま文庫、筑摩書房

1996（平成8）年3月21日第1刷発行

底本の親本：「鷗外全集 第九卷」岩波書店

1972（昭和47）年7月22日発行

初出：「東京日日新聞」

1912（明治45）年1月1日～3月10日

※「匂」と※[#「鈞のつくり」、第3水準1-1475]」、「嘘」と※[#「言+墟のつくり」、第4水準2-8874]の混在は、底本通りです。

※「合点」に対するルビの「がてん」と「がってん」の混在は、底本通りです。

※誤植を疑った箇所を、親本の表記にそって、あらためました。

入力：門田裕志

校正：館野浩美

2019年1月29日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

みれん

シュニッツレル Arthur Schnitzler

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 森鷗外訳

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>